

て泣き始める。冠者は女の體を苦々しく思ひ水入と取換へる。女はそれと知らず悲しやうと泣く。冠者抱腹絶倒。大名もそれと心附く。大名は國許へ下つたら迎をよこすが、それ迄の形見だと女に體を與へる。女、體を見て何者が體を壊らしをつたと怒り、逃げ行く兩人を追ひ込むといふ筋で、歌舞伎の所作事「黒塚女」となつてゐる。〔野村〕

炭焼長者

内山の奥に、炭を焼いて御住む小五郎といふ貧しい若者があつた。都の某家の姫君、長谷の觀音の夢の告によつて、遙々尋ね下つて夫婦の語らひをする。その折に小五郎は姫から小判といふものを貰つて、それを持つて來る島を見て、その小判を打ちつけたが、中らなかつた。さうして手を空しくして歸つて來たので、どうしてそのやうな情しいことをするかと姫が言ふと、あんな物ならは炭焼く小屋の脇に幾らでも落ちてゐるとの答へに、二人は行つて見ると、果して山出黄金であつた。それを拾つて來て一朝にして長者となつた。いふ。この傳説は、豊後大野郡三重町、内山蓮華寺の觀音堂の縁起として、夙く文藝に録せられた物語の破片であるが、その分布の廣汎なことにかけては、全國にこれに比するものが少い。而もこの地方には、この奇聞を詳述した「野村長吉實記」などといふ書物の書があるばかりでなく、今もその事實を信じて金銀試掘地として發掘されてゐる。ところが、この物語はまだ中世の交通不便な時代から、既に國中の隅々まで、何人かによつて運

搬せられ、それ／＼の土地に土着して、找くべからざる傳説となつてゐる。「海南小記」といふ書には、その主要なる例を列記してあるが、北は青森縣津輕の戸立澤(こ)では、炭焼長者の傳説によつて黄金を發見したといつて、その由緒を記念した社もある。山形縣山形市の吉事宮、宮城縣栗原郡成村の長者屋敷、福島縣信夫郡石那阪の吉次宮及び信州國原の伏屋長者の屋敷跡の四箇所では、やはり藤太といふ炭焼が同じ因縁を以て長者となつたと傳へ、而もその藤太は、金貨吉次三兄弟の父であつたと謂ふのである。もとは明かに國々を流傳した一箇の傳説であつたと思ふが、それが何れも傳説に化して、土地の舊史の如く考へられようとしてゐるのである。それから他の一方には、遠州濱松に近い鴨江の觀音堂、加賀金澤に近い野田の二子塚には、芋割長者の傳説がある。單に炭焼長者が芋割長者と變つてゐるだけで、双方の傳説は一致してゐる。南部八戸の港でいふ是川村の炭焼長者四郎なども、芋がただ無になつてゐるのみで、殆ど同様の話である。而も日本に於てはまだ確かに遺つてゐる。そのうち肥後の二人の長者の話は、薩摩豊後の内山の縁起から、觀音の利生を説く者によつて移されたことが想像し得られるのみならず、現に又筑前の朝倉郡と安曇の賀茂郡に於ては、事蹟の語つてゐた文藝家編纂の傳説(こ)によつて、その傳説化以前の狀況も、凡そ想像することが出来る。併しこれだけの事例を見て、すべてこの傳説を内山の法蓮寺の縁起より新しいものと斷定することは出来ぬ。といふわけは、南

方沖繩の列島に於ても、炭焼が女房の身分にあつた。長者になつたといふ話があるからである。これには勿論、觀音の利生といふことはない。「遺老傳」に於ては、宮古島の炭焼太良の傳説は、ユリと稱する御靈に導かれて、幸運の妻を得て長者となつたと謂ひ、佐喜眞法師の探集した南島説話の山原の炭焼長者も、小判を打付けたといふ話はない代りに、雀の聲に誘はれて女房が奪つて來たことになつてゐる。沖繩は本來金を産せぬ島だから、かういふ説話の土着には最も不便であつたらうと思ふが、それにも拘らず炭焼長者の傳説の一つとして殆ど同様の話が傳へられてゐる。これ等の多くの事實を綜合すると、黄金發見の傳説は、もと金貨の徒の運搬したものであつたことが想像される。金貨は近世の平和時代に入るまで、踏踏を荷擔して群をなして田舎を巡り、便宜の地に賃住して錫物の業を營んでゐた。さうして炭焼は、その缺くべからざる副業であつたのである。彼等の持つてゐた信仰には、宇治の八幡と關係の深いものがあつたのではないかと思ふ次第がある。簡單に言へば、八幡は、もと火の恵の本の神と彼等によつて考へられてゐたらしいのである。豊後の眞野長者の物語は、單に炭焼立身の奇蹟を説くのみならず、それから引續いて一女王世襲の美人の名高く、終に體に召されて、貴き皇子を生んだといふ一段がある。それが近古の文藝の一つの異彩を放つた「山路の草子」であつた。そして僅かづつ形をかへ、又は色々の敷衍を以て、遠く奥羽の果まで語り傳へられてゐたことは、この頃になつて追々に分つて來た。例へば、秋田縣鹿角郡小豆澤の大日堂の縁起に、田山長者の一人

娘が御后になつたといふ一條なども、曾ては亦この炭焼長者の、後日譚として傳へられてゐた爲めに、所謂山路の牛飼堂の話と、著しい類似をもつてゐるであらう。その山路の笛のことが、舞の本の「島御子折(須磨)」に遊女の物語として長々しく叙述せられるのも、それが最初から、金貨吉次家の話と關係してゐたものとすれば、格別の不思議はないのである。〔藤田(國)〕

炭焼の煙 小説【作者】江見水燕【發表】明治二十九年一月「國民之友」

【梗概】野々村の宮家藤原が、櫻谷に炭焼を持つてゐる。或る年の春、藤原の娘が櫻谷に花見に來た。その時、若い炭焼き男が娘の美しさに心を惹かれた。その後娘が婿を迎へることになり、その披露の席上へ眞次をも招かうとして老僕右衛門に呼びに行かせる。作右衛門は眞次をからかつて、お前を前に迎へられることになつたのだと言ふ。朴訥な眞次はそれを眞に受けて、披露の席へ出て見ると、全く嘘だとわかつたので、山中へ逃げ歸つたが、その後は、山から出ようと思はない。【批評】本篇が發表された時、噂外はその旨意ありとし、又書處もこれを遺憾したが、初年は「幼種」だと説いた。幼種といふ批評は或る點まで事實で、魯庵の賞揚は過ぎてゐる。この作は水燕の長所短所を具有した作で、結局旨意を可として表現の粗雑に堪らないとした噂外の評がまづ妥當であらう。〔高田〕

住吉踊り【作者】(名無) 藤津住吉の住吉神社から出た舞踊。【梗概】元來は神事舞で、農道祭の呪術的舞踊であつて、祭の後には村を出て京大阪まで馳進して踊り、米錢を得たものである。その圓形に踊る輪の中に蓋鉢を

立て、また踊子が圓扇を手にするところから見て、田舞の一系統なることが知られる。歌の終りに「住吉様の岸の松松めでたきよ、千入樂、萬歳樂」と稱へる。この踊は後に江戸に入つて、團扇坊主の手に依つて江戸化され、今日のカッポレを生んだ。カッポレの名義は諸説あるが、未だ信ずるに足るものがない。又この餘風は今も豊年喜梅坊主一派に依つて東京で維持され、本場の住吉神社では昔の農道祭ではなく、六月十四日の御田植神事に今日も行はれてゐる。〔参考〕人倫調査會卷七(守貞) 浮城巻七(小寺)

住吉派

日本舞の一派。江戸時代の初期住吉廣通が此の派を興した。廣通寛文十年(一七三〇)は土佐派の正系たる光則の弟で如慶と號し、江戸に出て將軍家に仕へ、本家たる土佐と相匹敵する程の勢を得た。この派の遠祖は鎌倉時代の貴人住吉廣恩と傳へてゐるが、廣恩の實在は甚だ疑はしい。西上建長の頃在位した貴族、住吉住人介法橋慶忍を誤り傳へたものである。その住吉の名の由来も住吉神社の神所であつた爲めといふがこれまた明かでない。思ふに徳川初葉土佐家がその勢力を江戸に派出するに際し、新にこの一家をたてて住吉廣恩をその祖と仰いだものであらう。如慶廣通の後にはその子具慶廣澄(寛文二年)があり、父に次いでその妻名顯る著聞してゐる。この派は土佐家と相違んで大和舞の古様式を傳ふるもので、その優雅麗麗な舞風は當代漢流壇に推視した狩野派の雄健な舞風と相對して特色を發揮し

てゐる。住吉家は具慶の後、廣保(寛延三年)廣守(安永六年)廣行(文化八年)廣向(文政十一年)廣弘(文久三年)等相繼ぎ、明治に至るまで家系を傳へたが、更に廣守の門から板谷・栗田口の二派を分出するに至つた。板谷家は慶應義塾(寛政九年)に始まり、栗田口家は慶應直方(寛政三年)に始まる。しかしこれ等は近代舞臺史上の一派として特色の顯著なものでなく、住吉派の支流として等しく大和舞様式を傳ふるものである。〔田中(一)〕



(りどき住吉廣通) 藤 吉 住

家には慶應義塾(寛政九年)に始まり、栗田口家は慶應直方(寛政三年)に始まる。しかしこれ等は近代舞臺史上の一派として特色の顯著なものでなく、住吉派の支流として等しく大和舞様式を傳ふるものである。〔田中(一)〕

住吉物語【作者】(名無) 藤津住吉の住吉神社から出た舞踊。【梗概】元來は神事舞で、農道祭の呪術的舞踊であつて、祭の後には村を出て京大阪まで馳進して踊り、米錢を得たものである。その圓形に踊る輪の中に蓋鉢を

又非常に異本の多いものであるから成立年代にはなほ再考の餘地がある。【諸本】本活字本二種あれど刊行の年代を詳かにしない。流布の本は寛永九年の刊本(一)で、その後幾々同じ版木を以て刊行され、寶曆九年刊のは繪が入つて一冊になつてゐる。諸書類從に收められたのも同系統のものである。寫本は、宮内省圖書寮・内閣文庫・帝國圖書館・靜嘉堂文庫・無窮會文庫・神宮文庫、及び大塚の文庫には一二本を藏し、個人では松井開治野村八良・橋本進吉・山岸徳平・池田龜徳諸氏が數本を藏してゐる。非常に異本の數も多し、且つ系統が異なつてゐるので、一本毎に差異を發見する。以上の諸本のうち、野村氏藏本には「風葉」に載つた六百の歌が全部存する。明治以後では日本文學全集・國文大觀・國文新譯文庫(京都)・有朋堂文庫・日本文學大系・日本古典全集等に收められてゐるが何れも流布本である。但し大系本は契沖の撰書である異本を探つてゐる。これは又繪巻として傳へられ、帝室博物館に藏するの長陸筆と傳へられてゐる。住吉舞の諸書参照。京都恩賜博物館藏のは三冊で、傳來者不明であるが、江戸時代初期の作と思はれる。繪巻の詞書のみを寫した本、或は奈良舞本も多く傳はつてゐるが、未だ室町時代に入る寫本は見出されぬ。【梗概】昔、中納言で左衛門督をかねた人があつて、妻を二人持つてゐた。一人は時めく諸大夫御沖木、式部の大藏の娘で、その腹に女君が二人あつた。他の一人は古い宮殿の御娘で、その腹に光る程の姫君が出來た。母宮はこの姫君八歳の頃、成長の後は帝に參らせやうにと中納言に遺言して逝つた。やがて姫君はもう一人の妻の家へ引取られ、西の對に乳

母の子の住吉と共に住む。成長するにつれて美しくなるが、内參の事は中々出來さうにもない。こゝに右大臣の子の四位少將がこの姫君の事を知り、以前姫君の母宮と縁故があつた故前を以て文をやる。併し姫君の方は返事が無い。その中に繼母がこれを知り、腕を拗込んで少將を欺いて三の君にあらはす。後に少將はこれを知つて残念に思ひ、又文をやる。或る日、姫君が中の君、三の君と一緒に嵯峨野の春に遊びに出た時、始めて少將は姫君を目のあたりに見て愈々焦れる。中の君には既に兵衛佐を知り、三の君には少將を迎へたので、中納言は姫君を内に參らせんと繼母に話すと、それよりも上達部へ參らせ

る方がいふ。そして卑しい法術を語ら
つて、朝経君の所から出て行く強にして中納
言に見せる。それで中納言は内参りのことは
思ひ止まり、内大臣の子の左兵衛督にあはせ
んとする。継母はむくつけ女と計つて、その
兄の主計助といふ七十ばかりの老翁に成り出
させようとする。継君に心を寄せてある式部
がこの事を告げたので、大に驚き、故母宮の乳



(原氏一撰下西) 話物吉住本吉

母が尼になつて住吉にゐるのをたよつて、密
かに侍従一人を供に住吉へ行く。都では皆々
驚き悲しみ御佛に祈る。継君は心利いた童に
手紙を託して中納言の許へ居所を知らせず
消息をする。右大臣は面白になり、少将は三
位中將となる。初瀬に参籠して満願の日、中
將は夢に継君に會ひ、住吉にゐる事を知り、
一方住吉でも継君は夢に中將と會ふ。中將は

直に住吉に行つて継君に會ひ、始めて契る。
やがて田舎人の娘と稱して京へ連れ歸り、北
の方と定める。中將はやがて中納言右大將と
なり、二人の間に男君・継君が生まれる。この継
君の養育に、父の中納言の今は大納言となり
按察使を兼ねたるを招き、かづけ物として北
の方の若き頃の小柱を賜ふ。次の日、数年振
りて親子再會する。かくて後、中納言は益々
榮え、やがて關白となり、子は三位中將とな
る。継母やむくつけ女は、顧みる者もなく零
落して死ぬ。

【構想】この物語は種子いちめ説話に、初瀬親
母の利生説話を併せたものである。継君が繼
母の奸計を知り、住吉に落ちるのが全篇の山
であるが、それ以前の継母の嫉妬への態度は
何の叙述もなく、又主計助の事も單なる話
に止まつて、何等切迫した情態にも立ち至らな
いので、甚だ物足りない。又初瀬の親言にし
ても、最後に「むかしもいまもはせのくわん
おんはしるしあらたに初はします」とあるの
みで、裏隠しとしては甚だ力のないものである。
【史的地位】「源氏」を頂點として、次第に
下り坂となつた小説は、鎌倉に入つて益々衰
へた。古來著名な「住吉物語」の名を冠したこ
の物語も、實際的には何等の特異な地位を主
張する事は出来ぬ。「源氏物語」の影
響があるが、彼に見る如き筋の複雑さはなく、
種子いちめ説話の要點のみを並べた事かす
れば、この方が原始的な形式である。室町時
代になつて、「秋月物語」(別項)の類がこの書の
影響を受けた事は争はない。
【註釋書】住吉物語通釋(藤田)○註解新譯住
吉物語(文藝春秋)○住吉物語松風抄(この本
の名は藤田氏の著作目録中にあるが未見)。

【參考】住吉物語の形態に就いて西下(一)藤田
(大野水)
住吉物語繪巻(つみよし)繪巻【解
説】この繪巻は今完本の態を成さず、殘缺と
して諸家に分蔵されてゐる。そのうち帝室博
物館所蔵の一卷が最も長い。これは詞書を缺
いてゐるが圖様によつて見れば、流布本「住吉
物語」(別項)の後の方で、中將が初瀬に参籠し
た後、住吉の住居に娘を訪ねて逢瀬を喜ぶ
最も情景の切實な一段である。福岡子爵蔵の



(藏圖書院) 繪巻品初吉住

一段はこれに續くべきもので、住吉に於て月
の光を賞し、奏樂する圖であり、梨山氏蔵
の一段は、更にこれに續いて中將が娘を連
れて住吉を出發する光景らしい。この外に大

村伯爵所蔵の一段があり、これは住吉より
歸途河川を上る光景かと思はれるが明かでない。
繪じて純粋な土佐流の畫風を見るべきも
ので、鎌倉末葉の製作と思はれる。今は大分
剝落してしまつたが、描寫賦色の美しかつた
もので、構圖や表現も内容を活かして情態が
豊かである。傳へて土佐長隆の筆といふが、
もとより確かではない。住吉物語繪巻として
は、この外に岩崎男爵所蔵の別本殘缺一卷が
ある。正月子の日の遊びや継君の乳母のみま
かる前後のことが畫かれてをり、前者と
は畫致も違ひ、製作時代も更に下るものと思
はれる。
【田中(一)】

住吉物の謡曲(すみよし)【曲目】和
歌の守護神住吉明神をシテとした謡曲に、「高
砂」「白樂天」及び西行物語(別項)の「雨月」が
ある。【諸本】現行諸説話本。日本文學大系
曲要書(芳賀・佐佐木)・國民文學庫・謡曲三百五
十番集(日本名著全集)所收。
【高砂】謡曲(作者)世阿彌(能作書中巻)
【古名】「相生」(和名)又は「相生松」(内容)
肥後國高砂に立ち寄り、松の木蔭を掃いてゐ
る老人夫婦(世阿彌)は、松の影に於て高砂住
吉の松を相生の松といふ謂れを尋ねると、夫
婦は世阿彌の道に於てないこと、夫婦の相老
となる事を説き、松のめでたい故事を語り、
自分達は高砂住吉の松の精であると打明け、
また住吉で待ち受けようといつて、舟を漕ぎ
出して行く。友成がその跡を追つて住吉に着
くと、住吉明神(世阿彌)が影向して、神舞を舞
ひ、御代を祝ひ給ふといふ曲。「古今集」序に
「高砂住の江の松も相生のやうにおぼえ」とあ
るに據つて、前段を構想し、後段にはその縁

で和歌の守護神を出したのである。複式夢幻
能。五流現行。【白樂天】謡曲(作者)世阿
彌(能作書註文二百十番目録)。唐の太子の
賓客白樂天(ワキ)は、日本の智慧を計れとの勅
命を受けて日本に渡り、筑紫に着いたところ、
一人の漁翁(ササキ)がゐり、白樂天が詩を作れ
ば漁翁はまたこれを和歌に詠むので、白樂天
はその才に驚く。漁翁は、日本では生かすに
生けるもの、鳥類・畜類に至るまでも歌を詠む
のである。これからなほ和歌の曲を見せよ
うといつて消える。やがて住吉明神(世阿彌)
が現れて舞を舞ひ、日本を従へることは出来
ないから早く歸り給へといはれる。かくて白
樂天は神々の神力に感ぜられ、神風に吹戻
されてしまつたといふ曲。出典はない。夢幻
的劇能。観世・金春・金剛・喜多現行。

【構想】二曲とも、殆どすべて感問作者の創案
構想した、そして詩を抜いた出色の作である。
まづ「高砂」は、歌道を説き、夫婦の道を教へ、
國家の安泰を説つた、而も文字に注意して一
語も佛語を用ひてゐない。神事物(別項)の中
で最も内容の充實した條條の整飾した曲であ
るが、更に「白樂天」に至つては、國家的意識
の高調を示したわが國文學のために、萬丈の
氣焔を吐いたものとひびく。由来わが國
では自國の文學を卑下して、漢文學を偏重す
る弊が甚しく、殊に白樂天といへば、中古以
來最も崇敬してゐた詩人であるのに、これを
和歌の力を以て、和歌守護神の神徳を以て國
外に追放したのは、他の文藝に類例のない所
である。
【參考】謡曲評釋(大田)○謡曲大觀(佐藤
大田)
繪巻「高砂」を見よ。

【参考】謡曲評釋(大田)○謡曲大觀(佐藤
大田)
繪巻「高砂」を見よ。

駿河舞(うま)【東遊記】を見よ。
駿牛繪詞(うま)繪巻【解説】鎌倉
時代向武の氣風を感んたるにつれ、上下皆騎
馬の馬牛に駿逸を競ふやうになり、これ等馬
牛の寫真圖(現はる)もやうになつた。「駿
牛繪詞」の如きは、その通例の一といふべきも
ので、その詞は書無難に載せられてゐる。
その繪の斷片と思はれるものも、いま福岡子
爵保坂氏・帝室博物館及び益田男爵等に分蔵
されてゐる。類從所載の詞によれば、各國畫



(藏圖書院) 駿牛繪詞

者が違つてをり、恐らく繪巻に集成したもの
と察せられるが、遺品に徴すれば、蓋し鎌倉
末葉乃至南北朝頃の製作で、當代大和繪に於
ける動物の似繪として、當時の好尚を窺ふ
べき興味ある作品である。(田中(一))
寸錦雜綴(うま)繪巻【著者】
本書には著者・刊年を記してない。けれども、
巻首に在る風來亭主人の序文の狂文めいたも
のの中に、自述の口吻が多く、書肆が外題(著
者)を乞ふに任せて、初め「寸錦」と題したところ

難色があつたので、改めて寸錦雜綴と命名し
た趣などから推して、この序者が即ち撰者で
あることが察せられる。風來亭主人は森島
川中良の號で、初代風來散人即ち平賀源内
國倫の譲りを受けた人である(註釋書參照)。
【刊行】巻中、力士谷風の手判の説明中に同力
士寛政七年(一八二五)のことが記してある。同年
以後の刊行であることが知られる。また森
島中良の没年は文化五年(一八二八)であるから、
同年前刊と見るべく、要するに文化初期の出
版であらう。巻末に獨吟子(即ち友人)といふ人の
跋があるが、これにも年代の記載がない。(内
容)江戸中期前後の藝術風俗の考證資料とな
つてゐる。動遊記(香川)・藝叢書(京都)
横綱免許(元祿)・各風手印(落語)・揚屋講
帳(佛傳)・結婚封傳(大門)・公論(高尾)
印(寛永)・佛傳(常盤)・常盤津宗圓(松石)・香
行女畫帳(舞妓)・小女百人一首(衣手)・
子(童休)・高尾上(衣)・紀文(藝叢)・扇部
氏(可彌)・扇部米積の二十九項を傳し、
一々原本の影撰や實物の關係等を加へ、興味
を本位としてゐる。(田中)

【参考】寸錦雜綴(著者) 隨筆 五卷【著者】
室直清(名稱)著者の住宅が神田の駿河臺に
あつたからか言ふ。【刊行】寛延三年【成
立】享保十七年(一七五七)に成つたものだとい
ふ。【解説】仁義・禮・智・信の五常を五巻
に配し、見聞に事よせて道義を奨め、學問を
勵まし、齊身修身に資する目的で書きつづけ
たもので、朱子の老徳を以て武士道を鼓吹し
た著者の得意さを見ることのできる。行文雄
健勁技で玲瓏すべく、近代文の模範とする

に足る。海に國華中の一頁である。寛延三
年(一七五七)刊行。享保十七年著者の兩序がある。
【參考】寸錦雜綴註釋(田中)

世阿彌(せあみ)能役者・謡曲作者【姓名】
納時左衛門大夫元清(幼名藤九、後三郎)【法
號】世阿彌(沙彌)【別號】貫翁・至翁【生
没】觀世元年(一六一五)七月、八十一歳没したとある
が、永享四年(一四二二)の著した夢跡一紙に「今
七秩に至れり」としてゐるから、その時七十
歳、即ち生年は貞治二年で、その没年は喜吉
三年(一四二二)三十一歳又は文安二年(一四三九)
三十三歳である。【關係】觀阿彌の嫡男。應安七年、
世阿彌七歳の時、將軍義満が父の藝を觀て以
來、深く賞讃に愛せられ、諸大名も争つて彼
に物を贈り、これによつて將軍の意を知へよ
うとする勢ひであつた。併し、彼はその容色
に誇らず、その果報に堪えず、ひたすらその
家業に精進した。そして應永七年(一四三〇)二月、
書三篇を書き、從來わが國には藝術論の見
べきものがなかつたのであるが、彼は卓抜な
見識と周到な經驗とを以て、こゝに舞臺藝術
の理論及び實際について、詳しく論説を著し
したのである。越えて應永九年三月には、こ
の續編として「神儀」(二篇)を著し、
能樂の沿革とその本質とを説いた。應永十五
年三月には、義満の北山別荘で、その藝を天
寶に供へ奉るの光榮に浴した。彼は二十三歳
の時父を失つたが、これまで父に教へられた

抄二東宋八大家文術等がある。

性格描寫(ペソナリティ) 文學論【解説】小説や戯曲の中で最も大切なものは、人物と事件...

井華集(せいけい) 句集二冊【著者】夜半亭...

生活と藝術(せいふく) 短歌雜誌【刊行】大正二年九月創刊...

靜嘉堂文庫(せいけいどう) 文庫【所在】東京市世田谷区...

星嶽(せいがく) 漢詩人【姓名】藤川五郎...

齊家論(せいけいろん) 心學書二卷【著者】石田梅巖...

描寫の展開法(びやう) 第一は單なる描寫で、これがまた直接的と間接的と暗示的との三つに分れる...

生活派(せいふく) 元來は短歌の上に於て使用された言葉である。即ち従來日本の短歌即ち和歌は、三十一文字といふ形式があつて...

靜嘉堂文庫(せいけいどう) 文庫【所在】東京市世田谷区...

星嶽(せいがく) 漢詩人【姓名】藤川五郎...

齊家論(せいけいろん) 心學書二卷【著者】石田梅巖...

齊家論(せいけいろん) 心學書二卷【著者】石田梅巖...

實の生活に傾れてゐるが、何處か類型的なところがあり、夕暮の歌は自己の生活を根柢にしてゐるが、響きが弱く、哀果は痛ましい現實を歌つても、何處かに東京人らしい響きを見せる。故にこれ等の歌人、同じ稱呼で一括するのは無理ではあるが、時恰も現實の問題が論議されてゐたので、便宜上、漠然たる稱呼を以て一括したものであつて、後のプロレタリア短歌も、内容的には生活派の一種と見ることが出来る。但し生活派なる言葉は、廣い意味では夏目漱石・森鷗外等の餘裕派、あそび派、無頼派に對し自然主義の作家を指すに用ひられた。

實の生活に傾れてゐるが、何處か類型的なところがあり、夕暮の歌は自己の生活を根柢にしてゐるが、響きが弱く、哀果は痛ましい現實を歌つても、何處かに東京人らしい響きを見せる。故にこれ等の歌人、同じ稱呼で一括するのは無理ではあるが、時恰も現實の問題が論議されてゐたので、便宜上、漠然たる稱呼を以て一括したものであつて、後のプロレタリア短歌も、内容的には生活派の一種と見ることが出来る。但し生活派なる言葉は、廣い意味では夏目漱石・森鷗外等の餘裕派、あそび派、無頼派に對し自然主義の作家を指すに用ひられた。



山崎の浮山(高野野之氏蔵)

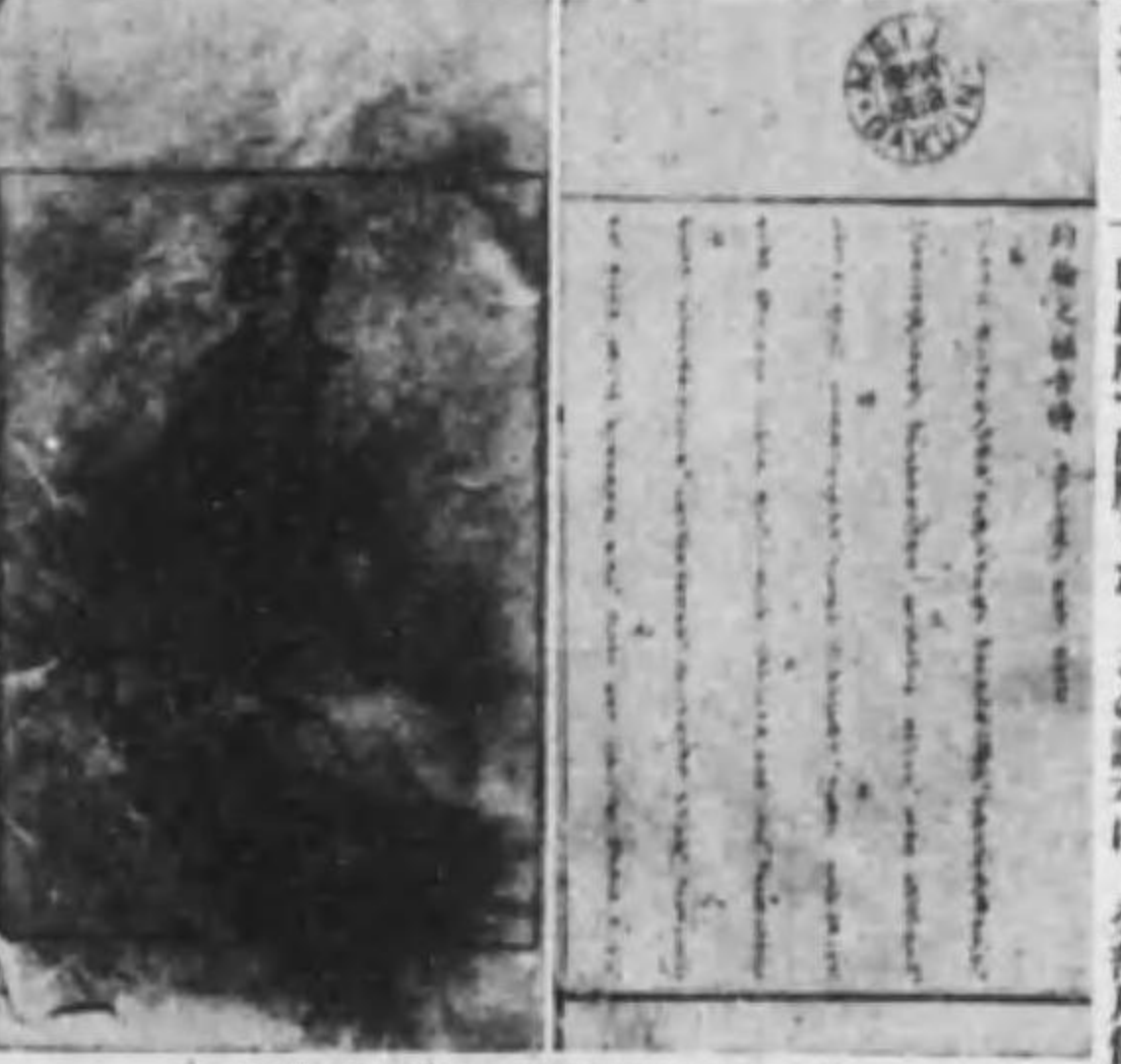
玉池吟社(たまけい) と稱した。門弟多く集まつたが、翌弘化二年(五十七)六月、玉池吟社を閉じて歸京。同三年十二月、京に入り二條木屋町に卜居した。翌々嘉永元年、華頂山の北に移り、黄葉山房と名づけた。更に翌年再び居を川崎丸太町に移し、安政四年(六十一)東三本木に移つた。

實の生活に傾れてゐるが、何處か類型的なところがあり、夕暮の歌は自己の生活を根柢にしてゐるが、響きが弱く、哀果は痛ましい現實を歌つても、何處かに東京人らしい響きを見せる。故にこれ等の歌人、同じ稱呼で一括するのは無理ではあるが、時恰も現實の問題が論議されてゐたので、便宜上、漠然たる稱呼を以て一括したものであつて、後のプロレタリア短歌も、内容的には生活派の一種と見ることが出来る。但し生活派なる言葉は、廣い意味では夏目漱石・森鷗外等の餘裕派、あそび派、無頼派に對し自然主義の作家を指すに用ひられた。

【組織】聖書には、正典と外典とあるが、普通聖書といふ時には正典のみを指す。舊約の正典は、次の三十九巻即ち創世記、出埃及記、利未記、民数記、申命記(以上律法書)、約書、士師記、撒母耳前後書、列王紀略上下、歴代志略上下、以士喇書、尼希米書、路得記、以士喇書(以上歴史書)、以賽亞書、耶利米書、以西結書、何西亞書、約耳書、亞摩士書、阿巴底亞書、約拿書、米迦書、ホセ書、ヨナ書、西番雅書、哈基書、撒加利亞書、馬拉基書(以上預言書)、詩篇、哀歌、雅歌(以上詩歌)、新約の正典は、次の二十七巻即ち馬太、馬可、路加、約翰の四福音書、使徒行傳(以上歴史書)、羅馬書、哥林多前後書、加拉太書、以弗所書、腓利比書、哥羅西書、帖撒羅尼迦前後書、提摩太前後書、多馬書、腓利門書、希伯來書、雅各書、彼得前後書、約翰第一第二第三書、猶太書(以上書翰)、約翰黙示録(以上預言)である。【内容】舊約の内容は、簡単にいふと、ユダヤの神話・傳説・宗教・道徳・政治・法律・風俗・習慣・歴史等、一切に關するものが、その中に記述されてゐると云つてよい。新約は四福音書がイエスの傳記であり、使徒行傳が使徒、主としてパウロの傳記であり、黙示録が時代批評し、且つ將來を豫言したものであり、書翰類は、個人的なものや、教團に關つたものやいろいろで、宗教上の信仰及び道徳、その他に關する教訓や、神學上の議論等、その内容は頗る豊富である。【外典】外典の原語はポクリフ、(Apocrypha)とは、字義からすれば、秘せられたもの、即ち奥義書の意であるが、正典に對し、普通これを外典と稱してゐる。舊約聖書には、元來ユダヤ本國

で用ゐられてゐたものと、國外で用ゐられてゐたものと二種あつて、後者は前者よりも巻数に於て、十数巻多くなつてゐる。即ち紀元四世紀の頃、ヒエロニムス(Hieronymus)が、ラテン語に翻譯し、宗教改革の頃まで一般に用ひられ、今でも天主教會で使用してゐるウルガタ(Ulgoata)は、ヘブライ語の原本より十四巻多く、またユダヤ本國以外に居住して、平常ギリシア語を使用してゐたユダヤ人の間に用ひられてゐたギリシア語の聖書(即ち通常「七十士譯本」(Septuagint)と稱するものは、十三巻多くなつてゐるのであつて、このヘブライ語の原本にない十数巻のものが、今日謂ふところの舊約外典で、ローマ教會では、紀元五世紀の頃から正典として用ひられてゐたが、プロテスタントは、宗教改革の頃よりヘブライ語の原本を尊重したのみならず、教團を以て聖書に置くところから、少しでも疑問のあるものは、聖書としてこれを認めないといふことになり、前記十数巻のものも、外典として正典から省かれることとなつたのである。即ちその書名は、次の通りである。第一第二マカベウス書、エズドラ第一及第二書(以上歴史書)、シラクの子イエスの智慧、ソロモンの智慧、以上訓書、トビ、ユディット、智慧、以上訓書、上小使徒、イレミヤの書翰、マナセの祈禱、エステル書、列王紀略(以上正典外典)、新約聖書には、舊約に見るやうな外典はないけれども、或は一地方で聖書とせられてゐたものや、或は一時聖書の中に加へられてゐたものや、その他外典と稱してゐるべきものが若干あつて、それ等を總稱して、今日これを新約外典と云ひ、

その数は頗る多いけれども、最も多く讀まれてゐるものは、次の諸書である。ヘブライ人福音書、エヂプト人福音書、エビオン宗福音書、ペテロ傳福音書、福音書断片(フアイニウム)、マテウ福音書断片、ヤコブ福音書断片、ニコデモ福音書、トマス福音書、ロギア、アグラファ(以上福音書)、パウロ及びテトラ行傳(以上使徒行傳)、クレメンチ第一書、バルナバ書、アプカラス往復書翰、パウロのラオデキヤ書翰、パウロ、セネカ往復書翰(以上書翰)、十二使徒の教訓、ペテロの説教、クレメンチ第二書、以上訓書、ヘルマスの牧者、ペテロ黙示録、パウロ黙示録、エズドラ黙示録、マリヤ黙示録(以上黙示録)。なほ外典に類似したもので、偽典(Pseudepigrapha)と稱せられてゐるものが、外典の外にも少くない。【聖書の和譯】日本に於ける基督敎の文學的事業は、傳來の當初から相當に注意せられたと見えて、後に禁令が布かれ、布教は固より書籍も禁ぜられたに拘らず、今日なほ好書家の手に依つて發見されるものが少くない。併し聖書の和譯が出来たのは、プロテスタントの傳道が日本に開始されようといふ頃になつてからの事で、元來プロテスタントに於ては、聖教に重きを置き、又聖書中心主義でもあつたから、傳道の開始と共に、聖書の翻譯と翻案(翻案)の事業は、特に注意せられた。最初の和譯聖書は、獨逸人カール・グラーフ(Carl Gutzlaff)の手に成つたもので、彼は一八二七年文政十年和



〔四年三保天〕(譯)譯 フラツク

ため、日本に來たモリスン號に同乗し、最初は江戸灣に、尋いで鹿児島に上陸し、ついで上陸し、兩度とも目的を達せず、空しく廣東に歸航した。爾來彼は、それ等の水夫を自宅に置いて、日本語を練習し、遂に前記二篇の聖書を和譯し、萬延元年か、その翌年の頃、(S. R. Brown)の兩人に宛て、その原稿を贈つて來たが、それは慶應三年の失火の際、プラウソンの住宅と共に身有に歸した。第三の和譯は、何牙利生れのユダヤ人、醫學博士ベッセル・アイム(C. J. Betsheim)の試みたもので、彼は一八四六年(弘化三年)、英國海軍で、シヤンより、宣教師として琉球に派遣されたが、宣教師の資格が甚だしく、安政元年、終に米國シカゴに去つた。彼が聖書の和譯を試みたのは、恐らく琉球在任時代のことであらうが、一八五四年(安政元年)に出版された「路加傳」は香港に於てであつた。この本は、唐紙仕立、西の内紙二ツ折六の形で、表紙には、路加傳福音書、乙卯年、往普天下傳福音書萬民とし、又片假字にて「ロカノヨロコビタヨリノシヨモツ」としてある。降つて一八六〇年(文政十三年)、彼は翻譯草稿の買上を米國政府に請願したが果さず、更にシカゴに於て日本人の助手を續けて再び訂正を加へ、「使徒行傳」の五巻で、彼はそれを英國聖書會社に提供してその買上を得、それ等は一八七三年(明治六年)、埃地利のウインで出版せられる事になつた。以上の試みは、日本在留の外國宣教師連にも少からぬ利便を興へ、キリヤムス、プラウソ、フルベッキ、バラ、ヘボン等は、日本語の學習と同時に、聖書の翻譯にも

努力する事を怠れなかつたが、種々の故障のために、事業は思ふやうに進行せず、又部分的に出来上つたものも、大抵は出版されずに畢つた。それ等の人々の中で、米國自由浸禮派傳道會社の宣教師イープル(Oortofta Gould)は、元治元年(一八四四年)秋、東京に於て「馬太傳」を平假字で出版したが、これが日本で最初に出版された和譯聖書である。イープルは、ペリイ遠征記によると、水兵であり、また宗教家でもあつたらしく、ペリイ一行に加はつたのは、傳道地としての日本を視察するためで、後萬延元年、自由浸禮派傳道會社の宣教師として日本に來り、神奈川に上陸して、飯田町の成徳寺に居住してゐた。次いで同五年の秋、ヘボン、プラウソ、及び奥野昌綱の三人の手に成つた「馬可傳」と「約翰傳」が出版され、翌六年の春「馬太傳」が更に刊行された。この頃長老派の宣教師カラザス(C. Carothers)も、加藤九郎を助手として福音書の翻譯に着手したが、そのうち、「馬太傳」は同八年に出版されてゐる。宣教師の助手として早くから聖書の翻譯に與つた日本人では、佐藤誠實・三輪義方・奥野昌綱・松山高吉等が、主たる人々であつた。かくて聖書の翻譯は、部分的に試みられたもの、長くこれを以て満足する事の出来なかつたのは勿論で、明治五年九月、日本在留の新教各派宣教師十四名は横濱に會合し、聖書會社の事業として新約聖書の翻譯を企て、プラウソ、ヘボン、グリーン、奥野昌綱、松山高吉の五人を委員に選出し、同七年六月、更に米國監督マクドナルド派のマクレイ(C. S. McLeay)同浸禮派のナタン・ブラウソ(Nathan Brown)の

英國シイエ・エ・エ・エのバイバア(D. P. Bay)同エ・エ・エ・エのライト(C. E. Wright)等の参加を得て事業に着手した。(高橋五郎は、委員ではなかつたが、プラウソの助手として、會に出席してゐた。その後、バイバア、ライト、ナタン・ブラウソ、マクレイ、プラウソ等は途中辭任したが、約五年六ヶ月を費し、同十二年十一月、新約聖書の翻譯を完成し、明治八年八月の「路加傳」を最初に、順次これを出版し、同十三年四月を以て完結した。譯文の方針に就いては、委員會に於て豫め決定されたが、その主なるものをいふと、(一)原本の譯文、原文である希臘語の聖書に據ること。尤も英譯聖書や、漢譯聖書を參考した。(二)文體、これは純日本文にするといふグリイの意見が採用された。尤も純日本文とはいふものの、書物の性質上、平易であつて、而も嚴肅なる文體を必要とするところから、苦心の結果、現在見るが如き一種獨特の文體を創案した(當時、世間一般に喜ばれた文章は、何れも片假字交り、漢文刷しのものであつたが、聖書の文體をそれにしなかつたのは、翻譯委員の意見であり、又漢文刷しでない翻譯の先驅をなした)。新約聖書の翻譯完成に先だつ事一年餘、即ち明治十一年五月、東京での宣教師會議は、舊約聖書の翻譯を議決したが、これより先き、明治九年十月三十日、東京在任の新教各派宣教師會議では、タムスン、ワネル(C. W. Wald)の



〔四年四保天〕(譯)譯 ムアブ

バイバア、カール・グラーフ(Carl Gutzlaff)の四人が、舊約聖書翻譯委員に擧げられ、定時に會合して、約一年の後、創世記の初十一章を翻譯し、且つそれを公表した。その間、別にライト、シヤウ(C. S. Shaw)、フランシス(C. T. Francis)の三人は、「以賽亞書」の翻譯に着手し、約二十五章程の草稿を作り上げたが、その後、ライト及びフランシスの兩人が歸國した爲めに、その事業は中止となり、別にバイバアの手に依つて、「約拿書」二巻、其書「馬太傳」が、翻譯員つ出版せられた。併し同十一年の決議後、これ等の一人々の事業も、舊約委員の手に移され、同十五年一月、

企者で、岩野鷗子、茅野雅子、大村かよ子、加藤みどり、上田君子、栗木郁子、水野仙子、尾島菊子、田村博子、野上八重子等、多くは文學團體の婦人が同人として集まつた。普通の文學雜誌と同じく、小説・詩歌・感想等を収めた。この派の盟主の親ある雷鳥の評論は、常に世人の注目多き、中にも、「元始女性は大陽であつた」「世の婦人達に」等の論文は、いろいろの意味で喧傳された。雷鳥は外にイブセンの「アヲ」を編輯したので、日本の「アヲ」を以て目され、「新しい女」といふ言葉も、この一團の發生と共に流行するやうになつた。後に大杉栄と同様した伊藤野枝が、大正四年の新年號から、經營編輯の一切を引き継いだので、雑誌の文字は一層整然となつた。兎に角女性雜誌として思想的にも文學的にも、目醒しい活躍を示したのも、「青箱」の如きは他になかつたと云つてよからう。

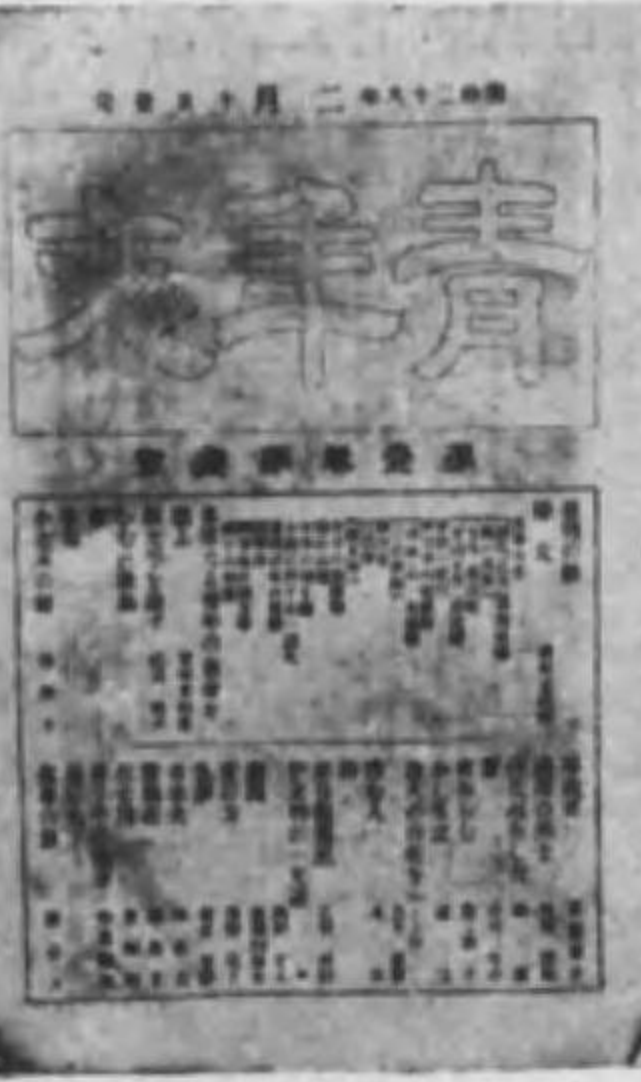
【青年】小説【作者】森島外【解説】明治四十三年四月より翌四十四年八月に亘つて「スバル」に連載。「刊行」大正二年二月都山書店。海外全集第五巻所載。

【梗概】青年小泉純一は、地方の豪商家の一人息子で、創作家になりたいといふ志望で上京し、各中の植木屋に下宿してゐた。神田の文藝講演會で逢つた醫科大学生大村に兄弟し、時々往き來して意見を述べ合ふ位のもので、毎日、本ばかり読んで暮してゐた。丁度自由劇場の旗揚げがあつて、「ポルクマン」を見物に有樂座へ行くと、美しい奥さんと隣り合つた。言葉交へてゐるうちに同僚の有名な法律學者坂井の未亡人だと知つた。かくてそのフランス語の讀書を借りるために、又奥さんの謎の目に誘はれて根岸の邸を訪ねたが、

變愛を感ずる事もなく彼は東京を失ふ事になつた。それは後悔の苦い味は勿論甘美の情も彼に残さなかつた。こんな悶絶が眞の充實した生活でない事だけがはつきり自覺された。併し本能の衝動が理性の自制力を破つて、借りた本を返さずに純一を根岸に向はせた。奥さんは豫想したやうに置室に彼を迎へ、明かな過渡もなしに離れ交り再び離り返された後、純一はまた別の本を手にして門を出て行つた。後述の如く「わたし二十七日に立つて箱根の福住に参ります。一人で参つてをりますから、お暇なら入らつしやいませ」と云つた奥さんの言葉が耳底に力強く蘇つて純一の心を騒がせてゐた。大晦日の朝彼は湯本に來て別の宿屋に投じた。併し散歩の途で會つたのは岡村といふ書生と連れ立つてゐる坂井夫人だつた。純一は暗い不愉快と不平を感じた。純一は、その晩福住に呼ばれて行つてその二人と對座してゐることが不快で堪へられなかつた。戀人でも何でもない相手のことで、不快を感じざるのを耐えなかつた。そして箱根を立て、借りた本を小包で返して了はうと決心した。岡を出て東京へ來てからまだ二月餘りしかたが、思ひがけなく接した人から、種々な刺戟を受け、雲霧がどろどろと變つた露を被ふやうに、内に何か書へたと感じた。今こそ筆を執つて見たら、國にゐた時とはちがつて何か書けるやうになつてゐる氣がした。早く東京へ歸つて書け。純一は晴れた元日の朝を、車【批評】睿智と教養ある一青年が現在過去と未來との間に劃した一線である。この線の

上に生活が無くては、生活はどこにも無いのであると感ずり、眞實の生活を永遠の希求として現前の世界に對しなから、自己の情邊に遂に満足を得られなかつた二ヶ月餘の記録である。坂井夫人との交渉の外に隣りの少女や若い藝者との接觸も寫されてゐるが、彼の行動の批判や内省は、大村との會話や日記の中に記されてゐる。この作は純一を一個の性格として描いてゐるといふよりは、明治末年の時代思潮を彼を通して表出しやうと試みてゐる點に、特色と價值を有する。併しそれがために、心理解剖といふよりは思辨的分子が勝ち過ぎて、小説としての藝術的生彩に缺ける所あるは免れ得なかつた。

【青年唱歌集】山田美妙【解説】横本二册【編著者】山田美妙【名義】新編と冠す。【刊行】明治二十四年八月、博文館。【解説】美妙の自作を主とし、雜誌「良都女」の編輯投稿家の作を第二の編に附載してゐる。第一編に美妙の作三十五篇あり、初に大祭日の頌歌が十篇あり、その中「青箱」の名があるが、全體としては詩集である。第一編は軍歌四篇を収めてゐる。所謂軍歌とは異なり詩歌の情感から生れたもので、表現には緊張がある。第二編には「花の雲以下十九篇を収載してゐる。『まよひの淵』はアリスのロマチックな場面を表はした詩である。『つばすみれ』は作者自ら俗語雜語の混淆を取て試みしを斷り書してゐる。美妙が言文一致の主唱者としての立場から、現代語を詩に用ひようとしたのであつた。様式から見れば、この詩集には、七五、



(新刊) 青年

たので、紅葉は大に憤り、大野酒竹をして、下宿屋の二階で焼酎を食つてゐる青年に、彼の小説の分る筈がないと痛罵に傳へしめたといふ挿話もある。「青年文」と題したのは、發行者の意、青年相手の雜誌となすにあつたらうが、當時最も勢力があつた赤門派(同派)の花形論客を同人としたので、その有力な雑誌は、文壇全體の注目を惹き、頗る有力な雑誌として選ばれた。

【青年文學】編輯【刊行】明治二十四年十一月創刊、三十四年間継続された。【解説】編輯代表は岩野鷗子で、宮崎湖海、岡本田吉夫、加藤みどりなど編輯に参したといふが、寄稿家の多くが湖海子以外は、今も全く不明の雑誌を用ひてゐるので明瞭でない。當時既に坪内逍遙・幸田露伴・原抱一等を聘して講演會などを催したことがある。また井上哲次郎の「文學談」は、毎號に互つて發表を願はしてゐた。

【細男舞】のまの舞【別名】ほそをのま【名義】神樂の才の男の變化といつて青葉の字もあつてゐる。【解説】「太平記」三十九巻に、阿波部の磯良の傳説があるが、この舞は磯良を祀る豊前志賀島邊から出たもので、同じ國には宇佐八幡古表、古要の神社、また山城の離宮八幡奈良の春日若宮、出雲大社にも行はれた。後には人間の歌舞となつたが、古くは人形の舞であらうといふ説もある。山城は人形、奈良、出雲は人が行ふ。細男舞の歌詞は、あまり知られてゐないから、「豊前志賀」に依り、宇佐八幡と古表社のを擧げる。

あ、いや身を清め、いとわの神にいくくや仕へまつりせぬや。

一、いや、よき高し、よき歌して手開けい。

一、いや、手開け、朝日に向けていや神を祈す。

一、いや、あ、出雲に、かねはあれども飾り贈す。

一、いや、飾り贈す、から金飾、いや神は喜ぶい。

一、いや、御許には困人やすらん、ちはやまの。

一、いや、いやちはやまの、あしらの酒に、いや。

一、いや、宇佐の宮、小の山のいはれに、いや、まらまらまら、國の宇佐のおしるやうは、宇佐の宮のおしるやうは。

古表社

一、國のおしるやう、おしるやう、宮の。

一、おしるやう、おしるやう、宇佐の宮の。

一、おしるやう、おしるやう、宇佐の宮の。

一、おしるやう、おしるやう、宇佐の宮の。

一、おしるやう、おしるやう、宇佐の宮の。

高津に住した隠士で、僧侶とも文藝師だとも言ふ。松江重頼に俳諧を學び、傍ら狂歌も玩んでゐたが、天明七年、六橋園飯盛が狂歌百人一首を選んだ時、行風は秀吟なして終りに同人の狂歌を採録しなかつたことである。その狂歌の巧拙は姑く措き、行風の名譽は寛文年間元天皇の勅許を蒙り、「古今夷曲集」(後撰夷曲集)を別題の二部を撰んで、乙夜に供したといふ一事で、勅許による狂歌集は、前代・後世を通じて唯この二部のみである。彼に狂歌の境を定めたものがある。附會の説もあれど、當時狂歌の定義を論じたものとしては、ともかく多とすべきである。

【成美】佛人【姓名】夏目包表、字は萬壽、幼名泉太郎、通稱井筒屋八郎右衛門大必山人・四山道人【生誕】寛延二年一月十日に生れ、文化十三年(一四七)十一月十九日歿す。享年六十八【法名】等覺院成美日濟居士【墓所】東京下谷坂町西願寺【附註】淺草天王町伊藤源兵衛の三男三女郎は、藏前の札院井筒屋の養子となり、五代目八郎右衛門となつた。その第五子に生れた成美は、四人の兄が皆夭折したので、生れると直に父の實家なる伊藤家へ預けられ、三歳までそこで育てられた。十七歳家督を嗣いだが、痛風のため右足が不甦になつたので、三十四歳の時弟庄兵衛に家を譲つて、隅田川を越した多田社に隱栖したが、その翌天明三年七月二十二日庄兵衛が歿したので、再び家業を見ることになつた。成美の父は隨時庵(一雨)の号と號して俳諧をやつたから、成美も少年時代から知らず識らずの間に

と交はり、當時擧頭した音派・雪門等の點取者流とは別個の地歩を占めて、寛政文化時代に江戸俳壇の中心勢力をなした。乙(二四)によつて、その信仰を窺ひ得られよう。札院といふやうな富商で豪華な生活の中から、成美の如き佛人の出たのは異とすべきであらう。

【編著】魁華帖(天明六年)○歳旦帖(年々刊行)



(成美) 成美

縁起が當時の製作たることは明かであるが、この年野元信は正に四十歳、この繪巻の畫風から見ても、これを當時土佐家の繪所預をも兼ねて、萬葉の日本化を達成したこの人の筆に擬するは蓋し當れるに近い。(田中)

清涼井蘇來(せいりょういそく) 讀本作者【本名】詳かでないが、大原和水といふ説がある。大原和水は、「古實今物語」の改作淨瑠璃むかし「現今物語」の作者として、双木千竹と名を連ねた人であるが、傳未詳。併し實曆の末から四五種の作を著し、文化初年まで存命してゐた事だけが判つてゐる。【著作】「古實今物語」五卷(寶曆十一年正月刊)、「御理」(古今雜談)五卷(寶曆十三年序、初版不明、再版安永二年)、奇談類(古今實今物語)五卷(天明二年序刊行)、前書と類似の題材を扱つたといふだけで、前書の關係はない(「當世操軍五卷」天明三年序刊行、書名も「古今雜談」五卷(天明刊行))。【参考】「古今實今物語」五卷(天明刊行)。

青蘆集(せいりやうしゅう) 小説・感傷・紀行文集【作者】徳富蘆花【刊行】明治三十五年八月、民友社。【解説】「除夜物語」は童話「伴助七巻」は逸話、「萬尾船着初」は「零落」(悲心島)は短篇小説、「五分時の夢」は「吾が初戀なる自然」は感傷文、「マリ、パン、シカト、セフ」の日記は、その日記を材料として同女の半面を評傳せるもの、「東信名勝」の「二」甲州紀行は「吾が便」(雨の水園)「雨の秋」は、著者一流の紀行文。巻頭の序詞「五分時の夢」は宗教味に富める名文として、當時の青年に愛讀されたもので、不如歸「自然と人生」各題目によつて文壇の流行作家たらしめる著者が、自身の態度を讀者に宣言したものである。萬尾船着初の記事は明治三十二年十一月三日、時の外務

大臣青木則誠に招かれて夜會に行つた時の寫生である。時の總理大臣は山縣有朋で、外國人の内閣總理を賞識した年の外相官邸に於ける夜會の光景が如くとして描かれてゐる。零落は雑誌「新聲」(對馬)に掲載せるもので、この一篇は著者が民友社以外に於て發行せられた新聞雑誌に、初めて執筆せるものである。「悲心島」は雑誌「文藝界」に掲載せるもので、「伴助七巻」は雑誌「新人」に掲載せるもので、伴助七とは、著者の夫人愛子の伯父原田熊太郎、その弟は夫人の父原田彌平次といふ。「吾が初戀なる自然」は雑誌「小天地」に掲載せるもの。本書は四十四年十一月までに第十九版を重ねた。「自然と人生」青山白雲(別題)と共に三部作といふべきものである。(田中)

世界お伽噺(せかいお伽ばなし) 童話集 百册【編者】巖谷小波【刊行】明治三十二年より四十一年、博文館。後十册に縮刷【内容】第一編「世界の始」より第百編「南大北大」に至る百編より成るもので、第百編は同著者に依つて編纂された「世界お伽文庫」五十編は、本書の追加であつて、縮刷版にはその大部分が収められてゐる。内容は、世界萬國の神話・傳説・經典・民話・創作等を著く渉獵したもので、取材の方面は頗る廣い。完成に十年の歲月を要してゐる。その材料の一部分は研究書として多少存在したであらうし、又アンデルセンやグリムなどの翻譯書も二三ないではなかつたが、兒童の讀物としては不完全を免れなかつた。これ等の物語が純粹なる童話の形態を以て、大規模に本邦に移入されたのは、本書を以て嚆矢とする。この意味に於て、本書は著者の偉業を示すのみならず、兒童文學史上

特記すべきものである。(童話叢刊)【山内】「世界國畫」(明治三年に四冊本として藤澤謙吉から、同五年に「素本世界國畫」全三冊、藤澤謙吉發行として公刊せられた。【解説】素本版は四六版和綴、一冊四十枚以内で、大字木版刷で左方に片假名の振假名が施してあり、口繪に「東之半世界」「西之半世界」の見聞き色刷世界地圖が挿んでゐる。全く地理的知識を口誦の間に記憶せしむるために七五調を用ひたので、詩史的意義は全く存せぬ。(藤澤謙吉參照)

世界主義(せかいしやぎ) (佛) Cosmopolitanism【解説】これは文學上は、國際主義(國際internationalism)と對照して考へらるゝものである。國際主義は各國のそれらゝの特殊な文藝を認めて、その特殊性を發揮しながら、同時に國際協調を考ふる文藝上の主義であつて、例へばフランスのロマン・ロランの如き、理想を共通基本として、その理想を通じての了解のもとに國際協調、世界平和を旨とする文藝、即ち文藝そのものを國際平和に置くのである。従つて戰爭反對論などもその主旨から生じて来る。ロマン・ロラン等の文藝上の活動一切は、これに向けられてゐると言つてよろし。然るに世界主義文藝は寧ろ一時に世界全體が同じ基礎から結合すべき事を旨とする。特殊個性を持つての協調でなく、一時の爆發的結合を目的とする。アンリ・バルビュの文藝活動の目的の如きは、正にこれに類するものである。即ち縱に階級的に人間生活を觀察して、それを横に世界的に、同時に結合せしむることによつて、全世界に新生活面を打開し來らんとする働きである。

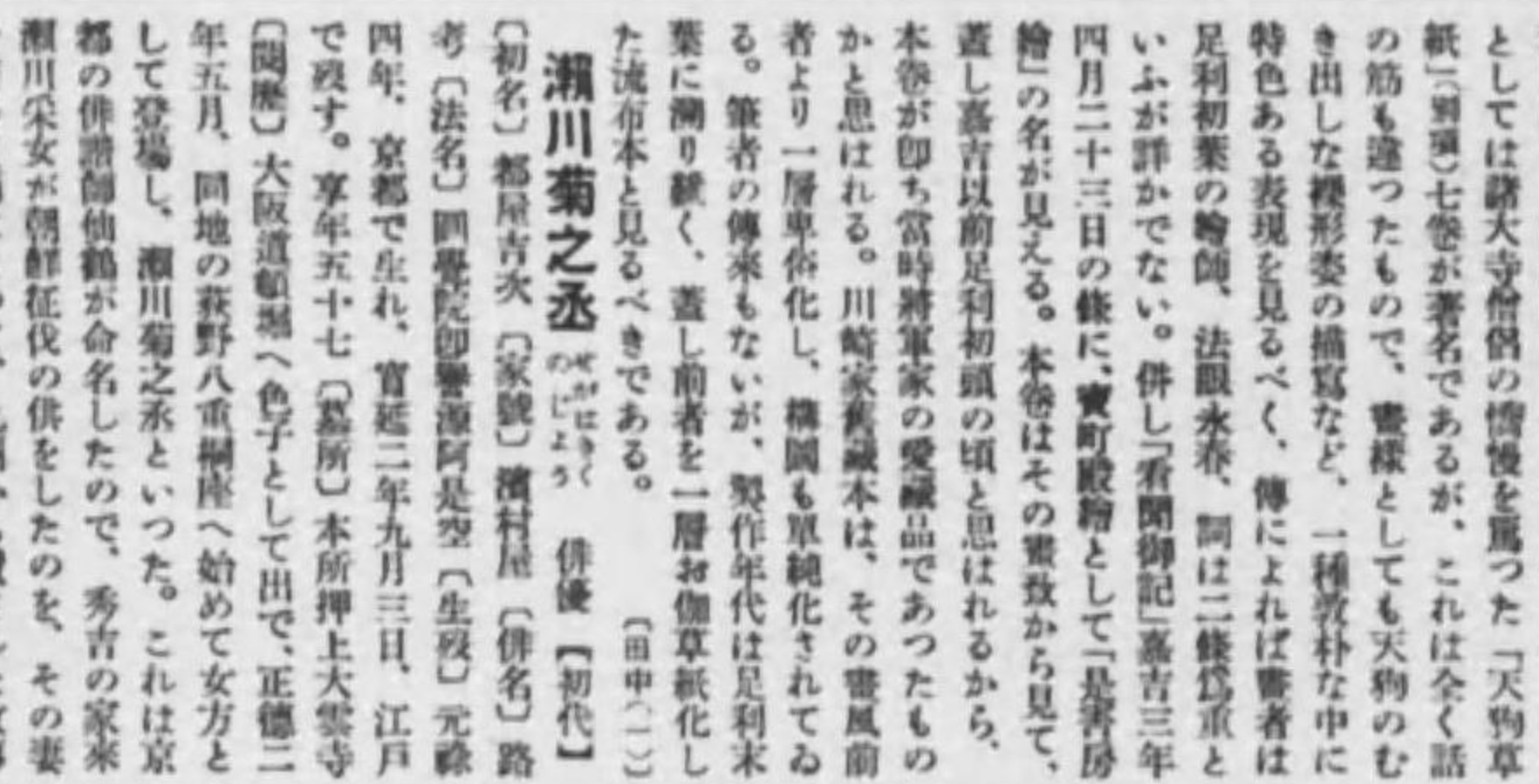
脱の部分もあるが話の筋はほぼ通り得る。即ち是書房なる天狗が支那から渡つて來て、慈惠大師の法力に打倒されて體を賣し、日本の天狗目録等に介抱されて加茂川のほとりまで治し、やがて歸國するといふ物語である。天狗に關する傳説は古くから普及せられ、繪巻としては諸大寺僧侶の傳説を寫つた「天狗草紙」(對馬)七巻が著名であるが、これは全く話の筋も違つたもので、畫巻としても天狗のむき出しな醜態の描寫など、一種教訓的な中に特色ある表現を見るべく、傳によれば畫者は足利初葉の繪師、法眼水春、同は二條爲重といふが詳かでない。併し「看聞記」(嘉吉三年四月二十三日の條に、賣野殿繪として、是書房繪)の名が見える。本巻はその畫致から見て、蓋し嘉吉以前足利初葉の頃と思はれるから、本巻が即ち當時將軍家の愛蔵品であつたものかと思はれる。川崎家藏本は、その畫風前者より一層卑劣化し、繪圖も單純化されてゐる。筆者の傳承もないが、製作年代は足利末葉に溯り得る。蓋し前者を一層お伽草紙化した流布本と見るべきである。(田中)

瀨川菊之丞(せがわきくきのおうぢ) 佛傳【初代】路【初名】都屋吉次(家説)濱村屋(佛名)路【法名】圓覺院即覺源阿是空(生没)元祿四年、京都で生れ、寶延二年九月三日、江戸で没す。享年五十七(墓所)本所押上大雲寺(關西)大阪道頓堀へ色子として出で、正徳二年五月、同地の森野八重福屋へ始めて女房として登場し、瀨川菊之丞といつた。これは京都の佛僧仙鶴が菊名水したので、秀吉の家來瀨川采女が仙鶴征伐の供をしたのを、その妻お菊の貞節によつて、九州から還された故事に因み、夫の姓名を一つに合せたのだといふ。

ふ。しかし佛傳の瀨川といふ苗字はその以前からあるので、この説は疑はし。享保五年佛傳をやめて、京都で商店を營んだが、同七年十一月、再び歸國に現はれ、同十五年十一月、江戸の中村座へ下り、元文二年冬、歸京したが、寛保元年、再び江戸へ下つて、そこで死んだ。(墓所)美談、且つ女らしく、所作事が最も上手だつた。その傑作は「無間の鐘」と「道成寺」と「石橋」の三つで、ことに「無間の鐘」は、人形芝居でも「ひらがな感傷記」に彼の舞臺姿を寫したほどである。この外に、「女鳴神」も當り處の一つである。

【二代】(初名)瀨川吉次(佛名)路考【法名】正覺院覺十阿方願(生没)寛保元年に生れ、安永二年閏三月十三日没す。享年三十三(墓所)初代と同じ。關西、武州王子に生れ、幼時から中村座の養子となつたが、實は初代と下女との間に出来た子で、その女の里は王子の百姓だつたから、そこで養育させて引取つたのだといふ。俗にこれを「王子路考」といふのは、その出生地によつたのである。寶曆六年十一月、初めて菊之丞の名を襲いだつた折したので、技藝は老熟するに至らなかつたが、一代の人氣を集め、金錢を浪費して豪奢な生活をした。自宅には妻妾を合せて三女を蓄へ、越後屋は小僧までがそれらに儲け出す大身代なれど、自分は一人の癡癡に五十三人のくらしたといふ。(墓所)美談、美しく、舞臺が華やかで、初代と同じく所作事を得意にした。

【三代】(初名)市山富三郎、また瀨川富三郎(佛名)玉川、路考、後に仙女(法名)常樂院信譽道阿彌生(生没)寛延三年に生れ、文化七年十二月四日没す。享年六十(墓所)初代



名天狗草紙、今所在不明の殘本一巻と川崎家藏の一巻とがあり、兩者畫様はやゝ相異するが話の筋はほぼ同じである。前者は寛

文五年冷泉爲清が同書の末尾を書き廻したといふ異書のあるもので、順序もやゝ亂れ缺

る。ロマン・ロランの「ジャンクリスタフ」と、バルビュの「クルルテ」とを比較して見ると、この二つの文藝主義の相異は、明確に觀取せられる。一つは理想的理想主義、他は實行的行動主義である。また一方は人類の究極目的などは果たされるものではないから、常にその手段を尊重し、暴動は絶対に排撃することを目指す。時には認容せずにはゐられないことを主張する。一方は自由を尊重し、他は平等を目指す。現在世界の文藝は、この二つの方向に向つて進みつつあることは確かである。(吉江)

世界大擴布説話(せかいだくぷせつわ) 神話【英】Wander tales【名義】説話即ち神話・傳説・メルヘンは、發生の本源地を離れて多くの地に傳播しようとする強い遊離性を持つてゐる。而して或る説話の擴布の範圍が極めて廣大で、殆ど世界の到る處に及ぶ時は、神話學上それ等の説話を呼んで「世界大擴布説話」といふ。【起源】英國の人類學者にして神話學者なるアンドロ・ラング(Andrew Lang)の命名にかゝる。氏は西紀一九〇四年に「風習と神話」(Custom and Myth)著者、民族の移住・通商・戰爭・漂流・婦女掣奪種々の文化現象によつて、説話が轉々として諸地方に擴布することを指摘し、而して這般の擴布過程が、殆どその最大限度に達した場合に於て、世界大擴布説話が成立することを主張した。【解説】同じく説話といつても、その遊離性の強弱には差別がある。メルヘンは最も遊離性に富み、傳説・神話はこれに次ぐが故に、世界大擴布説話をなすものはメルヘンに於て最も多い。シンデレラ物語(Cinderella)

【初名】松村武雄・小山内薫監修【刊行】大正十四年より昭和二年、近代社。【内容】第一巻巻頭、羅馬、伊太利、第二巻巻頭、第四卷北歐、第五巻露西亞、第七巻印度、第九巻佛蘭西・西班牙・和蘭、第十巻印度、第十一巻土耳其・波斯、第十二・十三・十四巻朝鮮及びアイヌ、第十七・十八巻世界童話集、第十九巻北歐童話集、第二十巻獨逸・印度童話集、第二十一巻白耳義・佛蘭西・露西亞童話集、第二十二巻英吉利・愛蘭・亞米利加童話集を收む。譯者は松村・小山内兩氏の外、竹友瀧風・米川正夫・中村白葉・山崎光子・日夏耿之介・茅野蕭々・西條八十・楠山正雄その他の諸氏である。明治以來外國の翻譯書は極めて多く、邦語によつて著く權威ある外國童話に接することとは容易となつてゐるが、組織的の一つの叢書として、その量の越えたる點に於て、本大系は前例なき大出版であつた。(山内)

【初名】松村武雄・小山内薫監修【刊行】大正十四年より昭和二年、近代社。【内容】第一巻巻頭、羅馬、伊太利、第二巻巻頭、第四卷北歐、第五巻露西亞、第七巻印度、第九巻佛蘭西・西班牙・和蘭、第十巻印度、第十一巻土耳其・波斯、第十二・十三・十四巻朝鮮及びアイヌ、第十七・十八巻世界童話集、第十九巻北歐童話集、第二十巻獨逸・印度童話集、第二十一巻白耳義・佛蘭西・露西亞童話集、第二十二巻英吉利・愛蘭・亞米利加童話集を收む。譯者は松村・小山内兩氏の外、竹友瀧風・米川正夫・中村白葉・山崎光子・日夏耿之介・茅野蕭々・西條八十・楠山正雄その他の諸氏である。明治以來外國の翻譯書は極めて多く、邦語によつて著く權威ある外國童話に接することとは容易となつてゐるが、組織的の一つの叢書として、その量の越えたる點に於て、本大系は前例なき大出版であつた。(山内)

【初名】松村武雄・小山内薫監修【刊行】大正十四年より昭和二年、近代社。【内容】第一巻巻頭、羅馬、伊太利、第二巻巻頭、第四卷北歐、第五巻露西亞、第七巻印度、第九巻佛蘭西・西班牙・和蘭、第十巻印度、第十一巻土耳其・波斯、第十二・十三・十四巻朝鮮及びアイヌ、第十七・十八巻世界童話集、第十九巻北歐童話集、第二十巻獨逸・印度童話集、第二十一巻白耳義・佛蘭西・露西亞童話集、第二十二巻英吉利・愛蘭・亞米利加童話集を收む。譯者は松村・小山内兩氏の外、竹友瀧風・米川正夫・中村白葉・山崎光子・日夏耿之介・茅野蕭々・西條八十・楠山正雄その他の諸氏である。明治以來外國の翻譯書は極めて多く、邦語によつて著く權威ある外國童話に接することとは容易となつてゐるが、組織的の一つの叢書として、その量の越えたる點に於て、本大系は前例なき大出版であつた。(山内)

【初名】松村武雄・小山内薫監修【刊行】大正十四年より昭和二年、近代社。【内容】第一巻巻頭、羅馬、伊太利、第二巻巻頭、第四卷北歐、第五巻露西亞、第七巻印度、第九巻佛蘭西・西班牙・和蘭、第十巻印度、第十一巻土耳其・波斯、第十二・十三・十四巻朝鮮及びアイヌ、第十七・十八巻世界童話集、第十九巻北歐童話集、第二十巻獨逸・印度童話集、第二十一巻白耳義・佛蘭西・露西亞童話集、第二十二巻英吉利・愛蘭・亞米利加童話集を收む。譯者は松村・小山内兩氏の外、竹友瀧風・米川正夫・中村白葉・山崎光子・日夏耿之介・茅野蕭々・西條八十・楠山正雄その他の諸氏である。明治以來外國の翻譯書は極めて多く、邦語によつて著く權威ある外國童話に接することとは容易となつてゐるが、組織的の一つの叢書として、その量の越えたる點に於て、本大系は前例なき大出版であつた。(山内)

と同じ(開歴)大阪道頓堀に生る。父は振付師市山七郎。兄は女方市山七郎。中頃、瀬川七蔵といひ、後に狂言作者に轉じて瀬川如泉(別號)といふ。初め市山富三郎といふ色子であつたが、濱芝居から大芝居へ昇進し、二代菊之丞が歿した翌年の安永三年春、初めて江戸へ下り、故人の門に入つて瀬川の姓を冒し、同年十一月、菊之丞の名を襲いだ。併しその實は二代の幕僚に入夫し、その幕僚が歿してから、二代の娘と結婚したらしい。享和元年九月、菊の字を諱みて俳名の路考を藝名とし、更に文化四年、路考を改めて仙女といふ。俗にこれを仙女路考といふ。一ヶ年千八百五十兩といふ高給を取り、内政は豊かで、金銀のほかは地所家屋をも有した。(藝風)美しく女らしく、地味と共に所作事を兼ねて、家傳の藝たる「道成寺」「無間の色」「石橋」を演じた。その缺點はあまりに色づばいといふ、又あまりに寫實に走つた仕事の内容長かつた事である。

女は七代岩井半四郎の妻となつた。【五代】(初名)瀬川多門(俳名)路考(雅號)東藤園(法名)高照院房榮才阿曾(生歿)享和二年に生れ、天保三年正月六日歿す。享年三十一(墓所)初代と同じ(開歴)父は三代菊之丞の女婿であつた瀬川路三郎(後に菊之助、また瀬川高川、瀬川家を継承して中村里好)。五代岩井半四郎の終焉で、文化十二年十一月、河原崎で菊之丞の名を繼いだ。幼名によつて「多門路考」といふ。(伊原)【別號】東園(生歿)元文四年大阪生れ、寛政六年(西四)正月二十三日江戸に歿す。享年五十六(墓所)本所押上大雲寺(開歴)大阪佛徒二代市山助五郎の門弟、市山七蔵といふ女形俳優で、三代瀬川菊之丞の兄に當る。明和五年の春、江戸中村座へ下り、同年十一月、二代菊之丞の門に入つて瀬川七蔵と云つた。のち瀬川乙女と改名、俳名を如考と改めた。天明三年十月中村座で、朔日より三日間、道成寺の所作を勤め、舞臺を引退して狂言作者瀬川如泉となり、二枚目に加はり、同四年十一月、桐座で立作者に昇進したが、生涯にこれといふ當り作もなかつた。(作目)重重人重小町(天明四年十一月)、小町屋(天明五年正月)、狂言、仲藏狂氣(○東重人重歌曾我、天明五年正月)、狂言、於勢の大功(○仲藏の狂言)、江戸仕立(天明七年三月)、狂言、魚屋(○狂言)、千代始音頭(天明五年七月)、狂言、魚屋(○狂言)等。

【五代】(初名)瀬川多門(俳名)路考(雅號)東藤園(法名)高照院房榮才阿曾(生歿)享和二年に生れ、天保三年正月六日歿す。享年三十一(墓所)初代と同じ(開歴)父は三代菊之丞の女婿であつた瀬川路三郎(後に菊之助、また瀬川高川、瀬川家を継承して中村里好)。五代岩井半四郎の終焉で、文化十二年十一月、河原崎で菊之丞の名を繼いだ。幼名によつて「多門路考」といふ。(伊原)【別號】東園(生歿)元文四年大阪生れ、寛政六年(西四)正月二十三日江戸に歿す。享年五十六(墓所)本所押上大雲寺(開歴)大阪佛徒二代市山助五郎の門弟、市山七蔵といふ女形俳優で、三代瀬川菊之丞の兄に當る。明和五年の春、江戸中村座へ下り、同年十一月、二代菊之丞の門に入つて瀬川七蔵と云つた。のち瀬川乙女と改名、俳名を如考と改めた。天明三年十月中村座で、朔日より三日間、道成寺の所作を勤め、舞臺を引退して狂言作者瀬川如泉となり、二枚目に加はり、同四年十一月、桐座で立作者に昇進したが、生涯にこれといふ當り作もなかつた。(作目)重重人重小町(天明四年十一月)、小町屋(天明五年正月)、狂言、仲藏狂氣(○東重人重歌曾我、天明五年正月)、狂言、於勢の大功(○仲藏の狂言)、江戸仕立(天明七年三月)、狂言、魚屋(○狂言)、千代始音頭(天明五年七月)、狂言、魚屋(○狂言)等。

【五代】(初名)瀬川多門(俳名)路考(雅號)東藤園(法名)高照院房榮才阿曾(生歿)享和二年に生れ、天保三年正月六日歿す。享年三十一(墓所)初代と同じ(開歴)父は三代菊之丞の女婿であつた瀬川路三郎(後に菊之助、また瀬川高川、瀬川家を継承して中村里好)。五代岩井半四郎の終焉で、文化十二年十一月、河原崎で菊之丞の名を繼いだ。幼名によつて「多門路考」といふ。(伊原)【別號】東園(生歿)元文四年大阪生れ、寛政六年(西四)正月二十三日江戸に歿す。享年五十六(墓所)本所押上大雲寺(開歴)大阪佛徒二代市山助五郎の門弟、市山七蔵といふ女形俳優で、三代瀬川菊之丞の兄に當る。明和五年の春、江戸中村座へ下り、同年十一月、二代菊之丞の門に入つて瀬川七蔵と云つた。のち瀬川乙女と改名、俳名を如考と改めた。天明三年十月中村座で、朔日より三日間、道成寺の所作を勤め、舞臺を引退して狂言作者瀬川如泉となり、二枚目に加はり、同四年十一月、桐座で立作者に昇進したが、生涯にこれといふ當り作もなかつた。(作目)重重人重小町(天明四年十一月)、小町屋(天明五年正月)、狂言、仲藏狂氣(○東重人重歌曾我、天明五年正月)、狂言、於勢の大功(○仲藏の狂言)、江戸仕立(天明七年三月)、狂言、魚屋(○狂言)、千代始音頭(天明五年七月)、狂言、魚屋(○狂言)等。

【初代】(初名)瀬川多門(俳名)路考(雅號)東藤園(法名)高照院房榮才阿曾(生歿)享和二年に生れ、天保三年正月六日歿す。享年三十一(墓所)初代と同じ(開歴)父は三代菊之丞の女婿であつた瀬川路三郎(後に菊之助、また瀬川高川、瀬川家を継承して中村里好)。五代岩井半四郎の終焉で、文化十二年十一月、河原崎で菊之丞の名を繼いだ。幼名によつて「多門路考」といふ。(伊原)【別號】東園(生歿)元文四年大阪生れ、寛政六年(西四)正月二十三日江戸に歿す。享年五十六(墓所)本所押上大雲寺(開歴)大阪佛徒二代市山助五郎の門弟、市山七蔵といふ女形俳優で、三代瀬川菊之丞の兄に當る。明和五年の春、江戸中村座へ下り、同年十一月、二代菊之丞の門に入つて瀬川七蔵と云つた。のち瀬川乙女と改名、俳名を如考と改めた。天明三年十月中村座で、朔日より三日間、道成寺の所作を勤め、舞臺を引退して狂言作者瀬川如泉となり、二枚目に加はり、同四年十一月、桐座で立作者に昇進したが、生涯にこれといふ當り作もなかつた。(作目)重重人重小町(天明四年十一月)、小町屋(天明五年正月)、狂言、仲藏狂氣(○東重人重歌曾我、天明五年正月)、狂言、於勢の大功(○仲藏の狂言)、江戸仕立(天明七年三月)、狂言、魚屋(○狂言)、千代始音頭(天明五年七月)、狂言、魚屋(○狂言)等。

【初代】(初名)瀬川多門(俳名)路考(雅號)東藤園(法名)高照院房榮才阿曾(生歿)享和二年に生れ、天保三年正月六日歿す。享年三十一(墓所)初代と同じ(開歴)父は三代菊之丞の女婿であつた瀬川路三郎(後に菊之助、また瀬川高川、瀬川家を継承して中村里好)。五代岩井半四郎の終焉で、文化十二年十一月、河原崎で菊之丞の名を繼いだ。幼名によつて「多門路考」といふ。(伊原)【別號】東園(生歿)元文四年大阪生れ、寛政六年(西四)正月二十三日江戸に歿す。享年五十六(墓所)本所押上大雲寺(開歴)大阪佛徒二代市山助五郎の門弟、市山七蔵といふ女形俳優で、三代瀬川菊之丞の兄に當る。明和五年の春、江戸中村座へ下り、同年十一月、二代菊之丞の門に入つて瀬川七蔵と云つた。のち瀬川乙女と改名、俳名を如考と改めた。天明三年十月中村座で、朔日より三日間、道成寺の所作を勤め、舞臺を引退して狂言作者瀬川如泉となり、二枚目に加はり、同四年十一月、桐座で立作者に昇進したが、生涯にこれといふ當り作もなかつた。(作目)重重人重小町(天明四年十一月)、小町屋(天明五年正月)、狂言、仲藏狂氣(○東重人重歌曾我、天明五年正月)、狂言、於勢の大功(○仲藏の狂言)、江戸仕立(天明七年三月)、狂言、魚屋(○狂言)、千代始音頭(天明五年七月)、狂言、魚屋(○狂言)等。

【初代】(初名)瀬川多門(俳名)路考(雅號)東藤園(法名)高照院房榮才阿曾(生歿)享和二年に生れ、天保三年正月六日歿す。享年三十一(墓所)初代と同じ(開歴)父は三代菊之丞の女婿であつた瀬川路三郎(後に菊之助、また瀬川高川、瀬川家を継承して中村里好)。五代岩井半四郎の終焉で、文化十二年十一月、河原崎で菊之丞の名を繼いだ。幼名によつて「多門路考」といふ。(伊原)【別號】東園(生歿)元文四年大阪生れ、寛政六年(西四)正月二十三日江戸に歿す。享年五十六(墓所)本所押上大雲寺(開歴)大阪佛徒二代市山助五郎の門弟、市山七蔵といふ女形俳優で、三代瀬川菊之丞の兄に當る。明和五年の春、江戸中村座へ下り、同年十一月、二代菊之丞の門に入つて瀬川七蔵と云つた。のち瀬川乙女と改名、俳名を如考と改めた。天明三年十月中村座で、朔日より三日間、道成寺の所作を勤め、舞臺を引退して狂言作者瀬川如泉となり、二枚目に加はり、同四年十一月、桐座で立作者に昇進したが、生涯にこれといふ當り作もなかつた。(作目)重重人重小町(天明四年十一月)、小町屋(天明五年正月)、狂言、仲藏狂氣(○東重人重歌曾我、天明五年正月)、狂言、於勢の大功(○仲藏の狂言)、江戸仕立(天明七年三月)、狂言、魚屋(○狂言)、千代始音頭(天明五年七月)、狂言、魚屋(○狂言)等。

【初代】(初名)瀬川多門(俳名)路考(雅號)東藤園(法名)高照院房榮才阿曾(生歿)享和二年に生れ、天保三年正月六日歿す。享年三十一(墓所)初代と同じ(開歴)父は三代菊之丞の女婿であつた瀬川路三郎(後に菊之助、また瀬川高川、瀬川家を継承して中村里好)。五代岩井半四郎の終焉で、文化十二年十一月、河原崎で菊之丞の名を繼いだ。幼名によつて「多門路考」といふ。(伊原)【別號】東園(生歿)元文四年大阪生れ、寛政六年(西四)正月二十三日江戸に歿す。享年五十六(墓所)本所押上大雲寺(開歴)大阪佛徒二代市山助五郎の門弟、市山七蔵といふ女形俳優で、三代瀬川菊之丞の兄に當る。明和五年の春、江戸中村座へ下り、同年十一月、二代菊之丞の門に入つて瀬川七蔵と云つた。のち瀬川乙女と改名、俳名を如考と改めた。天明三年十月中村座で、朔日より三日間、道成寺の所作を勤め、舞臺を引退して狂言作者瀬川如泉となり、二枚目に加はり、同四年十一月、桐座で立作者に昇進したが、生涯にこれといふ當り作もなかつた。(作目)重重人重小町(天明四年十一月)、小町屋(天明五年正月)、狂言、仲藏狂氣(○東重人重歌曾我、天明五年正月)、狂言、於勢の大功(○仲藏の狂言)、江戸仕立(天明七年三月)、狂言、魚屋(○狂言)、千代始音頭(天明五年七月)、狂言、魚屋(○狂言)等。

に逃び、關守の關兵衛(中村)は仲を取持... 所へ飛んで来た蟹の足についた血染の片...

を加へた趣向。【参考】評者名曲選 高野聖之(論評者名曲選第14巻)... 赤白桃李花... 橋本花の事を詠じた歌から来た名である...

観の蔵に閉じたまはるる聲、物置似など... 覺えてしまひ、その後大名の望み手などが...

れた上、座敷牢に入れられた。そのため他傳... にも追刺し捕らるの際、九郎兵衛は御吟味に...

之承は金の工面に困つた擧句、父の耳が遠い... のを利用して又騙し取るといふ奇く子に甘...

思案の末、組下五郎左衛門に相鍵をつくら... せて盗み出さうとする。爰に中村十五郎とい...

不幸に零落してしまふ。何をしても思はしか... らず一日夢中であらうと裏口に出ると、路...

と坐禪なさりませといふ六巻四の二。千百か... うちに三つ程誤らしい事があるとして、千三...

て、詐術、愛慕、嫉妬の事件を取扱つて、智識と人情の纏綿する男女相聞の世界を色々に描いたものである。八文字屋風の體裁的な面白さも見られ、又作者一流の皮肉な観察もあつて、氣質物中の優秀な作である。(小島)

世間手代氣質

【作者】江島屋其誠【刊行】享保十五年(1730) 菊屋版【解説】八文字屋の氣質物(別題)として、『世間子息氣質』『世間親客氣質』と並び、世間三傑といふべき重要な作品である。商家の盛衰は、主の器量と共に手代の才覚に依ること多大であるから、本書は手代の才覚不才覺を中心として當時の町人生活の盛衰を暴露せしめてゐる。一巻三話で、都合十五話より成立つてゐる。中の烏の仲買屋の誠實なる手代太郎兵衛・次郎兵衛・三郎兵衛が、商家の若衆家の相聞に依つて、計を以て互利を博する話の如き(二之巻第一話)、堺筋徳兵衛の手代助八が、長徳丹の製法を知り、江戸で成功して親主に詫をする話(五之巻第一話)等は、筋もよく運び好個の短篇である。其の氣質物で親仁子息手代と人間の本質の類型を表はしたものであるが、『世間手代氣質』(別題)のみは職業的類型を表はしてゐる。明和・安永頃の氣質物は出家・俳人・茶人・銀持・職者・側室の如き職業的類型を描いたものが頻出したが、本書などがその先例となすものである。(吉田)

世間親客氣質

【作者】江島屋其誠【刊行】享保十五年(1730) 菊屋版【解説】『世間手代氣質』(別題)の著者が、多田南嶺の作と考へられるが、享保二年は南嶺没後二年に相當してゐる。ここに多少南嶺の餘地も存する。【刊行】寶曆

二年春八文字屋八左衛門版【諸本】氣質全集(帝國文庫)所收【解説】この作品の序のうちに「義に江其誠、親仁子息氣質を著し、戯言以て頑愚老翁の心を寫せり。いまだ母親氣なき事をいかにせん、五巻にしるし、云々」とあるに依つて製作の動機は列る。一巻三話で五巻十五話より成る。我が子との交渉に現れる様々な母親の氣質が描かれてゐる。巻之一第一話の或る武家の妻が行方不明の子息を尋ね出すために、都の人の噂に立つやうな行動をなした如き、巻之二第一話の、武家の娘にして今は都の町人の妻たる女が、その子息の教育について主人と意見を異にするといふ如き、巻之四第一話の、都西陣の銀持の妻が最愛の娘の縁談に氣をもむ話の如き、何れも當世の母親の心持を可なり描寫してゐる。この作は八文字屋の浮世草子としては後期のものであつて、構想描寫共に異彩がある。作者を南嶺とするのは信すべきことと思はれる。自安・其誠以来の、氣質物中の一異彩と稱すべきである。(吉田)

世間子息氣質

【作者】江島屋其誠【刊行】享保十五年(1730) 菊屋版【解説】『世間手代氣質』(別題)の著者が、多田南嶺の作と考へられるが、享保二年は南嶺没後二年に相當してゐる。ここに多少南嶺の餘地も存する。【刊行】寶曆

世間親客氣質

【作者】江島屋其誠【刊行】享保十五年(1730) 菊屋版【解説】『世間手代氣質』(別題)の著者が、多田南嶺の作と考へられるが、享保二年は南嶺没後二年に相當してゐる。ここに多少南嶺の餘地も存する。【刊行】寶曆

せてしたい三昧をする。町人にもあるまじき武道好み(巻之二第一話)、或は素人癖治をなし或は素術・相撲を稽古する力自慢のもの(巻之二第三話)、或は津浦・茶の湯・音曲などの諸藝に凝り過ぎて家を怠るもの(巻之三第一話)その他、酒好き、遊女好き、占好き等の如き若者について様々描いてゐる。

【構想】西鶴の好色物・町人物などの中に、町家の子息の氣質・性癖を描寫したものは多くある。子息氣質は系統上より謂へば、それ等に依つて、これを一篇に纏めたものである。描寫の手法は大體に於て寫實的であるが、これに誇張的表現を加へ、當世的な教訓と滑稽とをその基調とする。【史的地位】氣質物(別題)としては正徳初年の頃「寛政後者氣質(別題)」が出版されてゐるが、これは當時の名優の追善評記の如きもので、眞に小説的構想の下に製作された氣質物としては、本書を初めとする。而して其の八文字屋自笑と抗争中の出版であり、其の署名のある最初の作品として最も力を注いだもので、前後の娘・手代・商人世帯、親仁の諸氣質物と共に、所謂八文字屋本諸作のうち、重要な位置を占めるものである。

世間親客氣質

【作者】江島屋其誠【刊行】享保十五年(1730) 菊屋版【解説】『世間手代氣質』(別題)の著者が、多田南嶺の作と考へられるが、享保二年は南嶺没後二年に相當してゐる。ここに多少南嶺の餘地も存する。【刊行】寶曆



(左内・表紙) 用 算 調 問 堂

年八月吉且、書肆 大阪本町一丁目萬屋彦太郎版【とある。西鶴全集(帝國文庫)・西鶴名作集(日本名著全集)等に所収。【解説】(巻之一)問屋の官商女町人の活計左前になる原因は多く家々の主婦などの贅澤にあること、近年取引に振手形を用ふるやうに

なつたこと。(長方はむかしの朝)堀木の小賣屋の入貨品に類はるゝ貧家困窮の様子、貧窮のためには素性ある者も悪事を働くこと。(伊勢海老は春の紅葉)年末には伊勢海老の價の法外高き年あること、或る老婆の檢みの調。【風文(文かひ)】歳暮の調。【巻二】(銀一匁)引かれた香袋を老婆の話。【巻三】(銀一匁)講中)金貸し仲間の一矢討のこと、その一人が貸し附けた貸金の返済の見込みなきを、巧みな策で取りかへせし話。(龍首)只はきかぬ宿)借金を避けて大晦日に茶屋に行つた男が、却つて金を費つた上に、女には已むを得ず合力し、借金取りにはつけ込まれ、有金悉皆取上げられた話。(尤始末の意旨)京都の或る人の檢約に関する調。五百目目づつ遺産を買つた二人の兄弟が、一人は成功し、一人は零落した話。(同註も皆かりの世)狂気の眞似して、威嚇に由つて借金取りを退却した男から、策を以て買掛代金の支拂を受けた捨捨勇取小者の話。(巻三)都の役見せ芝居)賢達な能見物をした江戸者と、裕福さうに見せて日毎に芝居見物して喰ひ逃げした五六人の男の話。(年の内の薙花は檢め)借金の取りやう、ふるなの忠告が折角且那に買つた銀を、偶然の事で取り返された話。(小判は疑妻の夢)貧乏な夫婦者が相談づくで、妻を乳母奉公に出したが、その夜乳兒の泣くに困つてゐる折、奉公先の主人が好色者と聞いて早速妻を呼び戻した話。(御目遣ひ)富裕と思ひ誤つて、或る貧家に縁談に入つた神機が、この赤貧の状にあきれ、漸く三日間我慢して、歸りに今宮の蕙葉須に立ち寄つて、この事を話した話。(巻四)圓の夜のわる口)京祇園の大晦日の夜、参詣人の左右に分れて

悪口を言ひ合ひし風習、京の或る富家の家では大晦日に銀箱を上間に置き捨てた話。(奈良の鹿鳴)奈良の鹿鳴の風習と、貧乏なる浪人が鹿が鳴りしに追跡をなし、銀目の品と思ひ誤つて、鹿の子包みを盗んだ話。(亭主の入替り)浅川の乗合船の客運が、その年末の締めに對しての打明け話をする。長崎の餅屋(餅屋)長崎の餅屋の風習、長崎より仕入る、よき見世物の種も近年なくなつた話。(巻五)(つらりての夜市)大晦日の夜市に現る、貧乏の様々。(才覚のちくすたれ)袖巻を工夫した少年は、親の晩期した親出せす、唯正直に學問に勉勵した少年が成功した話。(平太郎の事蹟)大晦日と節分同日になつた年、平太郎の事蹟で人を集むる門徒宗の寺にも参詣人なく、或る寺では僅か三人の参詣人が各々打明け話をする。三人ながら信心からの参詣ではなかつたといふ話。(長久の江戸恋)江戸の警昌の有様。

世間用心記

【解説】每巻四話、通計二十話より成る短篇集。各話悉く大晦日に於ける事件を畫いて、町人生活の種々相を示してゐる。場所は、大阪・京都を中心とし、江戸・奈良・堺・長崎にも及んでゐる。當時節季勘定を一般の風習としてゐたから、大晦日は町人に取つては一年中の總決算の日として彼等の浮世の定まる日であつた。所謂一日千金の大切な日であつた。作者はこゝに着眼して、大晦日の前に顯出する世帯の經濟生活や、彼等のあらゆる限りの智慧才覚を絞つた供金の取り方、債務の逃れ道等を穿つたものである。美談様々人の心の動きがよく描かれてゐるので、本書は彼の傑作の一に數へられてゐる。(註)【世間用心記】(備用心記)を見よ。

世間用心記

の調だけを収めて出した。その三十六家は其角屋・許六・杉屋・涼克・會良・風蘭・尚白・千那・幸山・惟野・野水・福口・月野・桃郎・浪化・凡光・東花坊(芝居)・去來・十草・野坂・露川・土芳・北枝・正秀・曲翠・酒堂・徳屋・徳屋・木節・之相・越人・若海・如行・金屋・金屋、それれんゝその代表的な句を題してゐる。なほ書巻も題句も共に各家の血脈なり傳承なり、何かの因縁あるものに筆を執らせた。例へば幸山はその嫡孫たる但馬豊岡の榊木柳が遺し、智月尼は加賀松任の素園(千代)が遺してゐる類である。以て世説が如何にこの俳仙の選擇標準に深く意を用ひたかが分る。(註)【世説新語茶】(世説新語)一冊【作者】山の手の馬鹿人(蜀山人)【書工】秀軍【名】宋の劉義慶の編した世説新語をもとにした。「新語茶」は「新五左」のもちり、新五左は、當時江戸人の用ひた田舎武士の風俗調。【刊行】不明であるが、安永五年以前【諸本】徳川文藝館茶第五・酒本新語(山崎屋)所収【題材】世説、時事、坊表、笑止と題を設けたのは「世説新語」に依つたので、古今著聞集(別題)に題目を設けて分類してゐるのと同様である。【解説】(巻一)では、上野山下の岡場所に遊びに来た東北の田舎武士傳五右衛門が、若い私娼を相手にし、市川門之助の話をすれば、門番と間違へるといふ可笑味がある。引き違へて大阪商人長次が来て盛んに上方調を喋べる。「時事」では、深川で調染衣庄兵衛と遊女の口説があり、惚れた弱みで女は散々いぢめられる。「坊表」では、各中いろは茶屋に坊主寄山花と色との對話、山花が館を天賣、調染衣庄の織物をもちつて説法といふ等の

符箓を教へる穿ちなどを描いてある。「笑止」では、晋羽七八丁目にあつた同場所、列障な半可通の江戸侍六が、あまり通を氣にするので、相手の遊女にひどく冷遇され、怒つて飲々罵倒し、結局面白くなく夜が明けた。

【構想】「世説」では、江戸言葉と違つた東北訛りと上方詞の對照を見せ、山下附近の穿ちを描き、「怪事」では深川を背景にして滑稽たる口説の光景を描き、「坊客」には寺の符箓と會話で坊主らしい生活の一端と、谷中附近の氣分を浮き出させ、「笑止」では江戸の半可通の武士に反感を持つたらしい傾向を見せてゐる點が面白い。これを要するに、本書は珍しい開場所を材料にしてゐるので、酒落本中の異色として別山の代表作の一である。

【著者】未詳。「世説」には「後深心院關白道明公記」を引いて菩提院開基の說とし、大塚高樹は、基房の説を衣笠内大臣家長の書いたものとしてゐる。「諸本」群書類從卷四六九所收【解説】公家の儀式作法・裝束に關する故實を記したもので、上巻百三十七條、下巻百三十八條から成り、別に菩提院入道關白説々といふ一條がある。

【世尊寺流】書道流派【解説】藤原行成を始祖とする入木道の一流。行成資性直説、才氣に長じ、殊に書道に以て當世に冠絶してゐた。初め小野道風に私淑し、更に王羲之の筆意を學び、研鑽遂に和様の書風を大成して、道風・佐理と共に三蹟と稱せられる。その書は優麗を極め、實に上代様を中心とするものである。今も眞蹟として傳へらるゝものには、高松宮御所藏「白氏文書」、御物「朗秋集」、本館所藏「木簡書切」等があり、

また入木道の書體調抄はその著と傳へられ世にその筆蹟を傳へ、云ふは、彼が權大納言であつたからであり、またその書流を世尊寺流と云ふは、願父一條攝政伊予が、一條大宮西の邸内に世尊寺を創めたるを、行成この邸宅を傳領して、更に堂宇を造り供養し、子孫相繼いで此處に居住した爲めである。行成の後代々能書體を出して家の書風を繼承し、入木道の本宗として大嘗會紀主基屏風の歌、寶聖皇子、仁王會呪文、風動物類集の清書、關聯表等の執筆を掌つてゐた。その系統は、

○行成→行房→伊房→定實→伊行→伊行中にも伊房・定實・伊行・行能等が出色で、伊行には「和蘭蘭歌集」等の外に、家學を傳へたる「夜鶴蘭調抄」の著あり、行能も亦中興と稱せらるゝ能書であつた。併し概して時代下るに伴つて拙劣となり、遂に十七代行季及び、享祿二年に家道斷絶するに至つた。(伊本) 節「句」を見よ。

切韻考「韻書」を見よ。 絶海津津「中津」を見よ。 演説すること「異稱」談義、説法、法説、法語、説教、唱導「性質」説經は唱導であつて、即ち經文を説き衆生を化導することである。この唱導には表白體のものと同頭でつものものと二種ある。前者は定つた格式でつ文章が用意されるもので、僧體の修辭法に依り製作される。修辭形、文法修辭するを以て上乗とされる。故に修辭には並ならぬ苦心が必要とされる。僅れた唱導文は後々引用されて説經體と云つたやうなものになる。後者は演

説に定つた詞章を必要とせぬものである。唱導には、衆生を傾けしむる必要から身振・手振が必要とされる。外國の説經學にもこの演技的表現が規則の一に数へられてゐるが、支那・日本にも、唱導にはこの演技が必要とされた。唱導には又經旨を敷衍し、偈耳に入り易からしめんとし、例話として、往生談、發心談、孝子・忠臣・貞女談、靈驗功徳談、笑話等が交へられる。以て聽衆の興をつないだのである。【韻語】大體各宗廟を通じて同じやうである。元來は經の講説が簡

簡になつてゐて、經文についての説經であるならば、先づ經名、經の來源を講ずる事があり、更に内容に入つての判釋、而して例話となつてゐる。その他唱導の場合の唱導などには、法會の事由を述べ、神降臨の句を唱へ、生死無常の理を表白し、死者を哀悼する句があり、悲歎を述べる句、施主への褒讃句、聖賢智徳の句、經句の句など唱へる散文・韻文等、交々の段々になつてゐる。

【沿革】學問的な説經と見るべき説經は、推古天皇六年藤原魚子の聖德太子が初めてである。又行基は諸佛傳道したと云はれてゐる。合義解に衆人を集めて教化し、又安に罪福を説く事を禁じてゐる。これ等を以て見れば、早くから説經風なものがあつたのである。下つて平安朝には實錄・法苑珠林・源順・寛印・源心・慶雲・清經・榮原・源光・源清・源潤・源光・源明(中興)等、山門・寺門・南都に各々所屬してゐる説經講者が現れてゐる。又山門の座主

【三都の説經座】(大阪)種彦が「用捨箱」に引用した「さんせう」太夫の正本に「攝州東成郡生玉庄大阪天下」一説經座とあり、又「大坂」大阪生玉庄内「寛永年間興行してゐた事は明かである。また「好色由來」に「大阪興七郎始めて操にしたりしより世にひろまりもあそびぬ」とあるがこれにはなほ疑問がある。但し大阪座としては説經興七郎が最も古く、その名代のみが後世まで續いて幕末に及んでゐる。なほ慶安時代に「大阪二部兵衛」といふ者がゐたことは、正本で知られるが、所屬の座及び系統は未詳である。(京都)四條河原に最も早く、日暮小太夫、説經興八郎の説經座があつた。この兩座の發生は未詳であるが、日暮小太夫・同八太夫の跡目相續を許せる關清水大明神九宮から、正徳二年九月に出した受領口宣案があり、關清水無量壽傳はつてゐるから、相當古い名代である事が判る。なほ宿所書上に、小太夫を京宮川筋七丁目とし八太夫を京橋通四條下町とある。且つ「京雀」寛文五年刊の挿畫には、上種少様と共に「日くらし小太夫」といふ稱が見える。やはり寛永以前から興行を續けてゐたらしいが、その終りは分らない。ただ「歌舞伎事始」によると、實録では説經座として名代が續いてゐたやうである。天保八年十月、大阪の文樂座興行を興つた説經座といふは、この末流である。また「竹藪故事」に「京都にて昔

教團は人笑はせの説經教化に巧みであつたと「今昔物語」に傳へてゐる。而して説經なる職業も、平安朝には出来てゐたらしい。今昔物語、平安末期、鎌倉期にかけての傳者には澄蓮(別名)がある。藤原通憲の子、辨才一世に鳴る。澄蓮の子聖覺また辨才あり、且つ文筆に長じ、淨土の門流に入つてから、淨土門では彼を説經念佛の祖としてゐる。澄蓮は澄陽の住持安房院にゐたので、彼の説經及び聖覺の説經風を安房院流と稱する。聖覺より隆

(編者註)慶長元年三二天

【参考】歴史上に於ける淨土法印 聖徳太子(古教團四二二)○我國に於ける唱導の淵源 藤原行成(傳説)と聖徳太子(七)○法説論義について 藤原行成(傳説)と聖徳太子(七)○唱導と本地文學と第七卷(國語と文學)和五ノ八九○説經の研究 黒木勲(文學思想研究五)

【世説】(傳説)【名稱】佛家の説經(別名)から發し、後、盛行と共に多分に淨土教的要素を帯びて來たので、かう呼ばれた。説經は、又は單に説經とも呼ばれる。【解説】淨土教(別名)と相並んで、近世初期から盛んに流行した新しい民衆演劇の一つである。その起源は、何時の頃まで遡り得るかは、なほ不明であるが、淨土教よりはず古く、鎌倉の末期乃至室町時代の初期には、佛家の説經から脱化した音曲としての説經が起つてゐたと思はれる。而してこの初期の説經は、

証を叩きながら語り語る程度のものであつたが、次第に、胡弓を弾き、更に三味線を放り入れて語るやうになつた。これ等が後まで説經(別名)門説經などと呼ばれた音曲としての説經である。かくて説經は、初めは人の集まる辻などで、長柄の傘を立て、その下で語つてゐた所謂大通説であつたが、

また入木道の書體調抄はその著と傳へられ世にその筆蹟を傳へ、云ふは、彼が權大納言であつたからであり、またその書流を世尊寺流と云ふは、願父一條攝政伊予が、一條大宮西の邸内に世尊寺を創めたるを、行成この邸宅を傳領して、更に堂宇を造り供養し、子孫相繼いで此處に居住した爲めである。行成の後代々能書體を出して家の書風を繼承し、入木道の本宗として大嘗會紀主基屏風の歌、寶聖皇子、仁王會呪文、風動物類集の清書、關聯表等の執筆を掌つてゐた。その系統は、

【三都の説經座】(大阪)種彦が「用捨箱」に引用した「さんせう」太夫の正本に「攝州東成郡生玉庄大阪天下」一説經座とあり、又「大坂」大阪生玉庄内「寛永年間興行してゐた事は明かである。また「好色由來」に「大阪興七郎始めて操にしたりしより世にひろまりもあそびぬ」とあるがこれにはなほ疑問がある。但し大阪座としては説經興七郎が最も古く、その名代のみが後世まで續いて幕末に及んでゐる。なほ慶安時代に「大阪二部兵衛」といふ者がゐたことは、正本で知られるが、所屬の座及び系統は未詳である。(京都)四條河原に最も早く、日暮小太夫、説經興八郎の説經座があつた。この兩座の發生は未詳であるが、日暮小太夫・同八太夫の跡目相續を許せる關清水大明神九宮から、正徳二年九月に出した受領口宣案があり、關清水無量壽傳はつてゐるから、相當古い名代である事が判る。なほ宿所書上に、小太夫を京宮川筋七丁目とし八太夫を京橋通四條下町とある。且つ「京雀」寛文五年刊の挿畫には、上種少様と共に「日くらし小太夫」といふ稱が見える。やはり寛永以前から興行を續けてゐたらしいが、その終りは分らない。ただ「歌舞伎事始」によると、實録では説經座として名代が續いてゐたやうである。天保八年十月、大阪の文樂座興行を興つた説經座といふは、この末流である。また「竹藪故事」に「京都にて昔



京都 浄土

【世説】(傳説)【名稱】佛家の説經(別名)から發し、後、盛行と共に多分に淨土教的要素を帯びて來たので、かう呼ばれた。説經は、又は單に説經とも呼ばれる。【解説】淨土教(別名)と相並んで、近世初期から盛んに流行した新しい民衆演劇の一つである。その起源は、何時の頃まで遡り得るかは、なほ不明であるが、淨土教よりはず古く、鎌倉の末期乃至室町時代の初期には、佛家の説經から脱化した音曲としての説經が起つてゐたと思はれる。而してこの初期の説經は、証を叩きながら語り語る程度のものであつたが、次第に、胡弓を弾き、更に三味線を放り入れて語るやうになつた。これ等が後まで説經(別名)門説經などと呼ばれた音曲としての説經である。かくて説經は、初めは人の集まる辻などで、長柄の傘を立て、その下で語つてゐた所謂大通説であつたが、

【世説】(傳説)【名稱】佛家の説經(別名)から發し、後、盛行と共に多分に淨土教的要素を帯びて來たので、かう呼ばれた。説經は、又は單に説經とも呼ばれる。【解説】淨土教(別名)と相並んで、近世初期から盛んに流行した新しい民衆演劇の一つである。その起源は、何時の頃まで遡り得るかは、なほ不明であるが、淨土教よりはず古く、鎌倉の末期乃至室町時代の初期には、佛家の説經から脱化した音曲としての説經が起つてゐたと思はれる。而してこの初期の説經は、証を叩きながら語り語る程度のものであつたが、次第に、胡弓を弾き、更に三味線を放り入れて語るやうになつた。これ等が後まで説經(別名)門説經などと呼ばれた音曲としての説經である。かくて説經は、初めは人の集まる辻などで、長柄の傘を立て、その下で語つてゐた所謂大通説であつたが、

るものである。【註】「推原的神話」を云ふ。【註】「修辭學」性質「事理を説明する文章である。抒情文、敘景文、敘事文、(各別)が讀者の想像・感情に訴ふるを主とするに對し、これは知識・理性に訴ふるを主とする。敘事文を作るには、敘事の筋を見つけ、敘述の順序方法を考へ、對者に解り易く書くことが必要であるが、説明文にもそれが肝腎である。説明文は又餘程敘景文と似てゐる所があるけれども、これはかれより一段複雑した知的なもので、かれは人の情に訴へるに對して、これは人の理解に訴ふるものである。【作法】説明文を作るに、先づ注意しなくてはならぬことは、用語の曖昧多義なるを避くべきことである。用語が曖昧であれば、文章全體としても決して明確を得るものでない。次によく説明の順序を立て、理路整然として一絲亂れず、不用な修飾など挿入して文路を紛亂させるやうのこともなく、成るべく簡明にし、かも成るべく周密に、或は例を引く、或は喩を設け、誰が見てもなるほど首肯されるやうに作らなくてはならぬ。簡明と周密とは、一見矛盾してゐるやうであるが、さうではない。簡明とは冗漫の反對で、餘計なことを言はず必要なことだけを手短かにきつぱり言ふことである。周密とは空疎の反對で、言はなくてはならぬことを残さず詳述することである。【註】「佛蘭西」【名義】「雪中風雪」の門をいふ。【註】「芭蕉」江戶に於ける俳諧派の中、其角の酒風(江戸俳諧)に對して直書をなしたもので、作風は風雪の作風を繼承し、温雅な傾向のものであつた。【註】「雪門」佛蘭西【名義】「雪中風雪」の門をいふ。【註】「芭蕉」江戶に於ける俳諧派の中、其角の酒風(江戸俳諧)に對して直書をなしたもので、作風は風雪の作風を繼承し、温雅な傾向のものであつた。

笠も「風雪はものがたき人にて、蕉門の歴々或は變風の企ありといへども敢て取合せず、ひとり亡師の遺風を守りてたのしみはしてとぞ」(芭蕉)と云つてゐる。享保十六年の「五色風」(別題)も、實は當時の江戸座に對する廓清運動であつたが、これにも雪門の咫尺(思想)が參じて居り、同十八年の「五色風」の五人の「積五色風」の五人には、雪門の雪中風雪(別題)と眞象とが參照してゐて、これも江戸座に對する反抗運動であつた。雪門は三世雪門に至つて、當時の俳諧復興の嚮導と相俟つて隆盛を極め、雪門は享保三年の江戸座宗匠二十人の「江戸二十歌仙」(別題)に對し、「雪おろし」(別題)を著して論難し、これが端となして江戸座との間に論争を起すに至つた。然るに雪門は江戸俳壇に最大の勢力を有したに拘らず、その作風に俗調を孕んでゐたが、四世雪門以後は俳諧漸く下り、覺悟の如きは「今雪門といふ俳諧は、又是(雪門)の似たり(芭蕉)と云つてゐる道は退轉したるに似たり(芭蕉)と云つてゐる。これは又獨り雪門に止らず佛壇一般の傾向でもあつた。併し雪門は世々佛壇の勢力を持続しつゝ、連絡として今日に及んでゐる。【註】「佛蘭西」佛蘭西【名義】「雪中風雪」の門をいふ。【註】「芭蕉」江戶に於ける俳諧派の中、其角の酒風(江戸俳諧)に對して直書をなしたもので、作風は風雪の作風を繼承し、温雅な傾向のものであつた。

【註】「佛蘭西」佛蘭西【名義】「雪中風雪」の門をいふ。【註】「芭蕉」江戶に於ける俳諧派の中、其角の酒風(江戸俳諧)に對して直書をなしたもので、作風は風雪の作風を繼承し、温雅な傾向のものであつた。【註】「雪門」佛蘭西【名義】「雪中風雪」の門をいふ。【註】「芭蕉」江戶に於ける俳諧派の中、其角の酒風(江戸俳諧)に對して直書をなしたもので、作風は風雪の作風を繼承し、温雅な傾向のものであつた。

【註】「佛蘭西」佛蘭西【名義】「雪中風雪」の門をいふ。【註】「芭蕉」江戶に於ける俳諧派の中、其角の酒風(江戸俳諧)に對して直書をなしたもので、作風は風雪の作風を繼承し、温雅な傾向のものであつた。

た。江戸の初期草本から延寶迄に十餘種出版せられてゐるが、何れも易林本系統の「説書二行節用集」の類である。但し寛文二年版の「説書二行節用集」だけは従来の本に異本(主筆十二年本の題)で増訂してゐる。次いで延寶八年に「新刊節用集大成」(七巻)と、「合類節用集」(八巻十巻)が刊行された。前者は相傳雪空



【註】「佛蘭西」佛蘭西【名義】「雪中風雪」の門をいふ。【註】「芭蕉」江戶に於ける俳諧派の中、其角の酒風(江戸俳諧)に對して直書をなしたもので、作風は風雪の作風を繼承し、温雅な傾向のものであつた。

【註】「佛蘭西」佛蘭西【名義】「雪中風雪」の門をいふ。【註】「芭蕉」江戶に於ける俳諧派の中、其角の酒風(江戸俳諧)に對して直書をなしたもので、作風は風雪の作風を繼承し、温雅な傾向のものであつた。

【註】「佛蘭西」佛蘭西【名義】「雪中風雪」の門をいふ。【註】「芭蕉」江戶に於ける俳諧派の中、其角の酒風(江戸俳諧)に對して直書をなしたもので、作風は風雪の作風を繼承し、温雅な傾向のものであつた。

記述さるべ卓説である。古今集以後は、殊に...

旋頭歌抄

【成立】享永元年十一月稿成り、翌二年...

錢屋金塔

【著者】日本歌史 佐佐木信綱...



錢屋金塔

狂歌仲間、鹿部歌仙も住つてゐたので、...

【著者】小澤久松、菊池と、秀才の青年...

名作集上(日本名著文庫) 近松全集第六巻所...

即ち筑後後の幸先を脱つた意に外ならぬ。全...

世路日記

【著者】小説 菊池香雪...

版かを直れた。爾來志堂・偉業館・求光閣...

吉原妓樓に於て菊池とチヨとの奇遇。日東正...

物で、即ち當時の社會劇である。心中を初め...

【戦記物語】戦記物語は、戦争を主として成る歴史時代を取扱った叙史的文学作品を總稱したものである。或る戦争時代を叙述した書として「將門記」「陳奥話記」「奥州後三年記」「承久記」「承久軍物語」「承久兵亂記」(各別)等もあるが、これ等は叙述簡單な板で、文學的價値が乏しいものであり、又「義経記」「曾我物語」(各別)等は個人經歷を中心として、時代を中心としたものでないからこれに含まれない。かく戦記物語といふ語を狭義に解して、「保元物語」「平治物語」「平家物語」「源平盛衰記」「太平記」(各別)の五種を含ませるのが普通の解である。【由来】古典の歴史的事記の間に分在してゐる合戦の事記から系統を引き、一つの纏まつた戦記として最初に世にあらはれたのは、「將門記」「陳奥話記」などである。これ等は合戦の經過を漢文で記した簡單な戦記體に過ぎないが、叙述の過程には戦記物としての特色もほの見え、次いであらはれた華やかな戦記文學の先驅となつてゐる。近古時代に入つて争亂續いて起り、文運の變轉に伴つて「保元物語」「平治物語」「平家物語」などの主要戦記物語が相次いで出て、戦記文學は黄金時代出現の觀を呈したが、「太平記」を嚆矢として、「義経記」「曾我物語」等の個人的物語に移つて、いよいよ最後の幕を閉じつた。更に内容についていへば、戦記物語の基本的内容となつてゐる叙史的要素は、「古事記」「日本書紀」「戦記」「平家物語」「源平盛衰記」「今昔物語」等の系統を引いたものであり、補助的内容となつてゐる抒情要素は、歴代の歌謡を初め王朝時代の情感を主

とした物語・日記等の面影を傳へたものである。また戦記物語の表現が剛健なる漢文體と優柔なる和文體とを折衷調和して和漢混濁文を成してゐるのは、王朝時代に盛んであつた漢文體を「將門記」「陳奥話記」等の先驅的作品を通じて傳へ、更に物語・日記などに時めき榮えた王朝の國文體を、これに配合調和して成したものである。なほ文化史的方面から觀ると、戦記物語は發達の貴族文化と新興の武家文化との融合調和によつて生み出された特殊な産物であつて、新興階級階級階級の特色を併せ具へ、剛健雄壯な輪廓のうちに、優麗高麗な情味を豊かに蘊する近古文化の代表的結晶といふべきものである。【性質】組織上から觀ると、戦記物語は合戦に關する事項を主材とし、更に自然と人事とにわたつて、興味あり趣致あるさまじくな事象を配合して、叙事の進展に變化を與へ、その内容を複雑にし、讀者の感興をそよそよに出来てゐる。叙事の中心となり物語の主體を形成してゐるのは本系統的の事項であるが、この間に傍系的の事項や挿話を適當に配合してゐる。そしてこれ等の素材は、叙事の發展するにつれて選別的に並列せられ、恰も小説話の集まるる觀を呈してゐるけれども、これはそれ／＼前後に連絡があり、全體的に綜合統一せられ、全體は一つの纏まつた作品として完成せられてゐる。戦記物語の特質として舉ぐべきことはいら／＼あるが、その本質から觀ると次のやうに考へることが出来る。(1)成長的。戦記物語はその組織が並列式で記事の追加も自由であるところから、時を經るにつれて内容が次第に増補せられて成長發展してゐる。従つて戦記や内容が原本とは著しく

趣を異にした本が續々と派生し、物語の作者に據せらるゝ者も多数あらはれ、製作年代についても異説が續出してゐる。(2)歴史的。空想を加へて脚色を施してゐる所も少くないけれども、その素材の大部分は歴史的人物・事件であるから、著しく史傳的色彩を帯びてゐる。(3)叙事的。或る氏族又は勢力團の對抗によつて生じた合戦抗争を主材とし、事件の發展推移を叙するの眼目としてゐる所から、戦記物語は叙事文學として本來的な發展をしてゐる。(4)國民的。戦記物語は長い間に多くの人の手につけられ、國民の好尚に適するやうに成長發展し、國民の性情を最もよく發揮して、廣く國民の間に愛讀せられ、なほ音樂的に演奏され、通俗的に演説せられて國民の親愛共感を一層深うしてゐる。(5)悲劇的。合戦は人生に於ける最も深刻にして悲愴なる出来事であるが、戦記物語はこれを主材としてゐる上に、戰勝者の側よりも敗者側の側を多く寫し、又戰亂に附隨して起つた悲愴なる情景を主に描いて附隨して、何れも悲劇的の性質を持つてゐる。(6)説話的。「平家物語」が平曲として琵琶に合はせて語られたものであり、音樂史上重要な地位を占めてゐる事は言ふまでもないが、「保元物語」「平治物語」も琵琶に合はせて語られて、「太平記」「源平盛衰記」「曾我物語」も曲調を以て語られたものであるから、戦記物語は一般に説話的の性質を有するものといふべきである。更に表現の態度から觀ると、次のやうな特色がある。(7)客觀的。戦記物語は作品の性質上、描寫が叙述的説話的になつてゐるから、作者の主觀を文へることは割合に少く、描寫の態度は大體に於て客觀的である。(8)外面的。素材の内部に

るところに、獨特の多大なる價値が存在する。【参考】「戦記物語」(國語と文學)○戦記物語(研究)十風力

善教房物語繪卷

【解説】西園寺三郎氏所藏一巻。善教房なる一僧侶が一般庶民の日常生活の裡に淨土信仰を普及する話を畫いたもので、詞書はすべて兼中に書き入れて對話體にし、これに善教の附けて話の順序を示してゐる。畫は色紙装束の白描であつて、後光嚴院の宸筆と傳はられてゐるが明かでない。そのくだけた對話の調子や卑近な人物の描寫など、白描繪卷の中でも固有の特色を見るべきもので、製作年代としては南北朝か遅くも足利初期を下るまい。應永の頃淨土真宗に善教といふ僧侶もいた事であるが、この物語の主人公を誰かにその人と斷する程の根據は見出し難い。【田中(一)】

善教房物語繪卷

【参考】「善教房物語」(國語と文學)○善教房物語(研究)十風力

千句

【解説】百韻十卷を十卷續けた形式のものであるが、各巻別々に百韻の式目に従つて巻いた百韻十卷を合せたものは十百韻と云ひ、千句はその中の各百韻の式目が十百韻に近いけれども、なほ百韻十卷全體に互つての規定があつて、それを守るべきものを云ふ。即ち撰合・去聲・別韻は、各百韻に於て規定される上に千句全體を通じて規定されてゐる。以上の如く百韻と千句とは異なるので、これを「併置百全抄」がひいて、去聲の用捨ある故也と云ひ、「三学院法師」には「千句・十百韻の差別有去聲ひ六ヶ數ゆへ多くは十百韻也」と云つて、去聲では千句をむづかしいものとしてゐる。又千句を四季に分つて巻く時には、春の發句三、次に夏の發句二、次に秋の發句三、次に冬の發句二の如く分ち、月千句・花千句に於ては發句は十ながら月、十ながら花となる。賦物別題も千句その他も成るべく長高くおとなしくする。又千句の三ツ物のみを集めたものを千句三物といふ。千句を巻く日時に於ては、千句はこれを一日に巻く場合もあつて、これを一日千句といふが、普通には三日を以て巻き終るもので、即ち初日に三百韻、第二日に四百韻、第三日に三百韻を巻くのである。その前日に連衆相集つて、習禮と稱へて、臨・第三に等類のないやうに打合せしたり、又小手しらべのやうに一部を巻いたり、又巻き了つた後に、道

前九年合戦繪卷

【解説】常陸守所藏一巻。詞書を缺いてゐるが、畫中に書き入れた人名や光景などに依つて察するに、この合戦の發端即ち源頼義・頼安府に在留の際、安倍頼時が駿馬金賣を獻する場面や、その子貞任が藤原光貞の陣を破り、人馬を殺傷したので、光貞これを頼



(前九年合戦繪卷) (國語博物館蔵)

は加賀家本も原本は河内豊田八幡に在ったと云はれてゐるが明かでない。この抜き寫しの一巻によると、原本は六巻本であつたらしく、繪巻も博物館本とは異つてをり、近年加賀邊にこの原本の断片とおぼしきものもあると云ふ。「青雲集」には永元四年十一月將軍家が奥州十二年合戦繪を都から召し寄せたといふ記載があり、これは前九年繪に「青雲集」承安四年の條に見える繪實法印筆の後三年繪の如きを合したのもかも知れないが、或は前九年をその淵源まで溯つて十二年とする説から見れば、これが即ち前九年繪を指すことになるとも知れない。何れにせよ製作時代の上下から見れば、これを該當せしめ難く、抜き寫しの原本を以てしても、その原本を永元以前まで溯らしむるは困難である。思ふに鎌倉時代は武士的傾向に相違してこの種軍記繪巻の類も一種ならず製作もされ、傳授もされた事と思はれ、これ等遺作の如きは、この繪巻を復原すべき資料の一として珍重される。

【前調】心海書 二卷 【著者】手島瑠庵 【刊行】初版安永二年、以後同七年、寛政四年その他の後撰本がある。【解説】二十四丁の小冊子、内容は、口教、女子口教附録、司馬公家要略人六部和歌の三部より成る。幼童の日常生活につきて教を授けたるもの。冒頭の一條に、「一朝をひたり候はば、手水を御つかひなされ候て、まづ神様を御拜みなさるべし。これは此日本は神様の御國なれば、神様の御影にて皆と御教をたべ、衣服を着申事も是みな神様の御かげなれば、一ばんに神様へ御禮儀をなされ候て、御禮申上なされ候て第一にて候」とある。江戸時代に於ける兒童の

【後記】足利直冬は、直義の遺志を繼いで謀叛を起し、赤松貞村・清純に討たれたが、妻飛鳥の前と女轉衣衣とは、重實の白旗、紅雀の旗、探題の印を持ち、轉衣の許婚を尋ねて家運の再興を計らんと、吳羽・虎王の姉弟を伴つて飛鳥を脱れた。然るに貞村の追手に、轉衣・吳羽を見失つた飛鳥は、計らずも亡き母の女房御に遭ひ、喜んだのも束の間、追手の鎌六の刃に斃れた。一方轉衣は清純の娘となつて世を歩中、許婚の修行名を待兵衛と明かしたが、追手の重剛を受けて、二人は又別れてしまつた。飛鳥を見失つた虎王は、その所持する探題の印を求め、偶々鎌六を討つて仇を報い、轉衣・吳羽の在所を知り、待兵衛の妖術と共に追手に赴いた。然るに虎王は母の夫鳥羽六に會ひ、その密かに愛した故主直冬の高に留めて給つた鳥羽が、淫靡泡雪とその情夫高權次郎の悪計の因となるが、吳羽の前夫大鳥通政の智略によつて救はれ、又飛鳥の前は母の女が身代りとなつて救はれてゐる事、虎の夫和田正季、幸六、輝等、こゝに直冬の子孫

【後記】未だに終つて、題名の天竺得兵衛の奇縁として、その片影を見るに過ぎない。即ち得兵衛の奇縁をなす伏線と見るべきであらう。その大筋は以上の如きものであるが、相國義滿の轉柄に身を以て代らうとする吉川小主水の忠節、その許婚清水の貞節に配される妙見宮の靈験、清純と白拍子愛兒、その繼母・盲人治部實は得兵衛との挿話等も、後の奇縁の用意に出づるものか。作者はこの後巻を重ねて益々怪奇を説かうとするのであつたらうが、作者の幼幼對蹠の意圖は、虎王・通政等の忠義、泡雪・叔太郎の悪事にも明かに認められよう。

【千家元慶】詩人【號】銀明峰と稱したことがある。【開歷】明治二十年六月東京麹町に生れた。父は男爵千家景福。府立第四中學に學び、中途退學してからは、學校の經歷がない。三十七年の頃、佐藤紅緑について俳句を學び、銀明峰の號で『新潮』に發表した。後、詩に志し、大正三年、佐藤惣之助、橋本大郎等と雑誌『テール』に關係したことがある。『白樺』にその詩作を發表するに及んで、武者小路實篤に大に認められ、驚嘆すべき詩人の出現として詩壇に送られた。武者小路實篤は、千家の詩は少くも今の日本でも人間の心にひびく詩だ。そして千家は今の日本に於て最も有望な詩人だ」とまで稱揚した。又佐藤惣之助と共に雑誌『風』を發行したこともある。【作風】その詩は、散文的な形式に於て、韻律上の非難を受けたが、その素朴純真な態度は、多くの認めるところとなつた。その底に人道的熱情を有してゐると共に

【讀本】種々の寫本が傳はつて、互に詳略異同がある。今主として奥書によつて分類すれば次のやうである。(一)「應永三年求法沙門の奥書」あるもの。即ち「應永三年二月十七日、以先皇之御草本、和形法華經之功、求法之沙門阿」とあるもので、和形法華經の本文「行徳云」とある記事に照合して、長慶天皇の皇子行徳僧正の書寫にかゝるものであらうと考證された。筆者識の一卷は、この系統の本である。(二)「應永三年の書きおのり」の末つた、榮の庵のしはしの徒然もやなぐさむとて、ふる反古ひらき見るついでに、先人の遺巻にて、この御草本ありけり云々と、長い假名の跋を有する本である。和田英松氏所藏本や地蔵本等もこの系統の本である。これ等の本には更に、此抄書、長慶法皇御書、源氏物語五十四帖中絶、只此一冊中絶、因縁一首、以源云々、山水のその巻をよめてぞちの流もにこらざりける、贈聖教人明題等

【讀本】種々の寫本が傳はつて、互に詳略異同がある。今主として奥書によつて分類すれば次のやうである。(一)「應永三年求法沙門の奥書」あるもの。即ち「應永三年二月十七日、以先皇之御草本、和形法華經之功、求法之沙門阿」とあるもので、和形法華經の本文「行徳云」とある記事に照合して、長慶天皇の皇子行徳僧正の書寫にかゝるものであらうと考證された。筆者識の一卷は、この系統の本である。(二)「應永三年の書きおのり」の末つた、榮の庵のしはしの徒然もやなぐさむとて、ふる反古ひらき見るついでに、先人の遺巻にて、この御草本ありけり云々と、長い假名の跋を有する本である。和田英松氏所藏本や地蔵本等もこの系統の本である。これ等の本には更に、此抄書、長慶法皇御書、源氏物語五十四帖中絶、只此一冊中絶、因縁一首、以源云々、山水のその巻をよめてぞちの流もにこらざりける、贈聖教人明題等

【讀本】種々の寫本が傳はつて、互に詳略異同がある。今主として奥書によつて分類すれば次のやうである。(一)「應永三年求法沙門の奥書」あるもの。即ち「應永三年二月十七日、以先皇之御草本、和形法華經之功、求法之沙門阿」とあるもので、和形法華經の本文「行徳云」とある記事に照合して、長慶天皇の皇子行徳僧正の書寫にかゝるものであらうと考證された。筆者識の一卷は、この系統の本である。(二)「應永三年の書きおのり」の末つた、榮の庵のしはしの徒然もやなぐさむとて、ふる反古ひらき見るついでに、先人の遺巻にて、この御草本ありけり云々と、長い假名の跋を有する本である。和田英松氏所藏本や地蔵本等もこの系統の本である。これ等の本には更に、此抄書、長慶法皇御書、源氏物語五十四帖中絶、只此一冊中絶、因縁一首、以源云々、山水のその巻をよめてぞちの流もにこらざりける、贈聖教人明題等

【讀本】種々の寫本が傳はつて、互に詳略異同がある。今主として奥書によつて分類すれば次のやうである。(一)「應永三年求法沙門の奥書」あるもの。即ち「應永三年二月十七日、以先皇之御草本、和形法華經之功、求法之沙門阿」とあるもので、和形法華經の本文「行徳云」とある記事に照合して、長慶天皇の皇子行徳僧正の書寫にかゝるものであらうと考證された。筆者識の一卷は、この系統の本である。(二)「應永三年の書きおのり」の末つた、榮の庵のしはしの徒然もやなぐさむとて、ふる反古ひらき見るついでに、先人の遺巻にて、この御草本ありけり云々と、長い假名の跋を有する本である。和田英松氏所藏本や地蔵本等もこの系統の本である。これ等の本には更に、此抄書、長慶法皇御書、源氏物語五十四帖中絶、只此一冊中絶、因縁一首、以源云々、山水のその巻をよめてぞちの流もにこらざりける、贈聖教人明題等

【讀本】種々の寫本が傳はつて、互に詳略異同がある。今主として奥書によつて分類すれば次のやうである。(一)「應永三年求法沙門の奥書」あるもの。即ち「應永三年二月十七日、以先皇之御草本、和形法華經之功、求法之沙門阿」とあるもので、和形法華經の本文「行徳云」とある記事に照合して、長慶天皇の皇子行徳僧正の書寫にかゝるものであらうと考證された。筆者識の一卷は、この系統の本である。(二)「應永三年の書きおのり」の末つた、榮の庵のしはしの徒然もやなぐさむとて、ふる反古ひらき見るついでに、先人の遺巻にて、この御草本ありけり云々と、長い假名の跋を有する本である。和田英松氏所藏本や地蔵本等もこの系統の本である。これ等の本には更に、此抄書、長慶法皇御書、源氏物語五十四帖中絶、只此一冊中絶、因縁一首、以源云々、山水のその巻をよめてぞちの流もにこらざりける、贈聖教人明題等

【讀本】種々の寫本が傳はつて、互に詳略異同がある。今主として奥書によつて分類すれば次のやうである。(一)「應永三年求法沙門の奥書」あるもの。即ち「應永三年二月十七日、以先皇之御草本、和形法華經之功、求法之沙門阿」とあるもので、和形法華經の本文「行徳云」とある記事に照合して、長慶天皇の皇子行徳僧正の書寫にかゝるものであらうと考證された。筆者識の一卷は、この系統の本である。(二)「應永三年の書きおのり」の末つた、榮の庵のしはしの徒然もやなぐさむとて、ふる反古ひらき見るついでに、先人の遺巻にて、この御草本ありけり云々と、長い假名の跋を有する本である。和田英松氏所藏本や地蔵本等もこの系統の本である。これ等の本には更に、此抄書、長慶法皇御書、源氏物語五十四帖中絶、只此一冊中絶、因縁一首、以源云々、山水のその巻をよめてぞちの流もにこらざりける、贈聖教人明題等

【讀本】種々の寫本が傳はつて、互に詳略異同がある。今主として奥書によつて分類すれば次のやうである。(一)「應永三年求法沙門の奥書」あるもの。即ち「應永三年二月十七日、以先皇之御草本、和形法華經之功、求法之沙門阿」とあるもので、和形法華經の本文「行徳云」とある記事に照合して、長慶天皇の皇子行徳僧正の書寫にかゝるものであらうと考證された。筆者識の一卷は、この系統の本である。(二)「應永三年の書きおのり」の末つた、榮の庵のしはしの徒然もやなぐさむとて、ふる反古ひらき見るついでに、先人の遺巻にて、この御草本ありけり云々と、長い假名の跋を有する本である。和田英松氏所藏本や地蔵本等もこの系統の本である。これ等の本には更に、此抄書、長慶法皇御書、源氏物語五十四帖中絶、只此一冊中絶、因縁一首、以源云々、山水のその巻をよめてぞちの流もにこらざりける、贈聖教人明題等

【讀本】種々の寫本が傳はつて、互に詳略異同がある。今主として奥書によつて分類すれば次のやうである。(一)「應永三年求法沙門の奥書」あるもの。即ち「應永三年二月十七日、以先皇之御草本、和形法華經之功、求法之沙門阿」とあるもので、和形法華經の本文「行徳云」とある記事に照合して、長慶天皇の皇子行徳僧正の書寫にかゝるものであらうと考證された。筆者識の一卷は、この系統の本である。(二)「應永三年の書きおのり」の末つた、榮の庵のしはしの徒然もやなぐさむとて、ふる反古ひらき見るついでに、先人の遺巻にて、この御草本ありけり云々と、長い假名の跋を有する本である。和田英松氏所藏本や地蔵本等もこの系統の本である。これ等の本には更に、此抄書、長慶法皇御書、源氏物語五十四帖中絶、只此一冊中絶、因縁一首、以源云々、山水のその巻をよめてぞちの流もにこらざりける、贈聖教人明題等

【讀本】種々の寫本が傳はつて、互に詳略異同がある。今主として奥書によつて分類すれば次のやうである。(一)「應永三年求法沙門の奥書」あるもの。即ち「應永三年二月十七日、以先皇之御草本、和形法華經之功、求法之沙門阿」とあるもので、和形法華經の本文「行徳云」とある記事に照合して、長慶天皇の皇子行徳僧正の書寫にかゝるものであらうと考證された。筆者識の一卷は、この系統の本である。(二)「應永三年の書きおのり」の末つた、榮の庵のしはしの徒然もやなぐさむとて、ふる反古ひらき見るついでに、先人の遺巻にて、この御草本ありけり云々と、長い假名の跋を有する本である。和田英松氏所藏本や地蔵本等もこの系統の本である。これ等の本には更に、此抄書、長慶法皇御書、源氏物語五十四帖中絶、只此一冊中絶、因縁一首、以源云々、山水のその巻をよめてぞちの流もにこらざりける、贈聖教人明題等

【讀本】種々の寫本が傳はつて、互に詳略異同がある。今主として奥書によつて分類すれば次のやうである。(一)「應永三年求法沙門の奥書」あるもの。即ち「應永三年二月十七日、以先皇之御草本、和形法華經之功、求法之沙門阿」とあるもので、和形法華經の本文「行徳云」とある記事に照合して、長慶天皇の皇子行徳僧正の書寫にかゝるものであらうと考證された。筆者識の一卷は、この系統の本である。(二)「應永三年の書きおのり」の末つた、榮の庵のしはしの徒然もやなぐさむとて、ふる反古ひらき見るついでに、先人の遺巻にて、この御草本ありけり云々と、長い假名の跋を有する本である。和田英松氏所藏本や地蔵本等もこの系統の本である。これ等の本には更に、此抄書、長慶法皇御書、源氏物語五十四帖中絶、只此一冊中絶、因縁一首、以源云々、山水のその巻をよめてぞちの流もにこらざりける、贈聖教人明題等

【讀本】種々の寫本が傳はつて、互に詳略異同がある。今主として奥書によつて分類すれば次のやうである。(一)「應永三年求法沙門の奥書」あるもの。即ち「應永三年二月十七日、以先皇之御草本、和形法華經之功、求法之沙門阿」とあるもので、和形法華經の本文「行徳云」とある記事に照合して、長慶天皇の皇子行徳僧正の書寫にかゝるものであらうと考證された。筆者識の一卷は、この系統の本である。(二)「應永三年の書きおのり」の末つた、榮の庵のしはしの徒然もやなぐさむとて、ふる反古ひらき見るついでに、先人の遺巻にて、この御草本ありけり云々と、長い假名の跋を有する本である。和田英松氏所藏本や地蔵本等もこの系統の本である。これ等の本には更に、此抄書、長慶法皇御書、源氏物語五十四帖中絶、只此一冊中絶、因縁一首、以源云々、山水のその巻をよめてぞちの流もにこらざりける、贈聖教人明題等

菅玉五郎

菅玉五郎「三社祭」を見よ。
菅玉五郎「金巻」を見よ。
菅玉五郎「金巻」著者・成立」金巻...

先哲叢談

先哲叢談「先哲叢談」傳記 八巻
先哲叢談「先哲叢談」傳記 八巻...

市河實著

市河實著「刊行」文化元年
市河實著「刊行」文化元年...



（録日・序）話新編

船頭部屋

船頭部屋「船頭部屋」酒席本 一册
船頭部屋「船頭部屋」酒席本 一册...

船頭部屋

船頭部屋「船頭部屋」酒席本 一册
船頭部屋「船頭部屋」酒席本 一册...

船頭部屋

船頭部屋「船頭部屋」酒席本 一册
船頭部屋「船頭部屋」酒席本 一册...

船頭部屋

船頭部屋「船頭部屋」酒席本 一册
船頭部屋「船頭部屋」酒席本 一册...



八三五

我... 藤原萬句合の序文部分。手書きの文字が密集して書かれている。

藤原初篇(初頁)の序文。手書きの文字が縦書きで書かれている。

藤原第十二篇の序文。手書きの文字が縦書きで書かれている。

繪本藤原の茶(廣重畫)



第一の權威となり、その選評の前附が川柳... 川柳の歴史と地位に関する序文の前半部分。

藤原初篇(初頁)の序文... 藤原初篇の序文の前半部分。

藤原初篇(初頁)の序文... 藤原初篇の序文の後半部分。

阿倍川町及びその界隈の名主を勤めてゐた... 藤原初篇の序文の最終部分。



(藤原初篇)川柳

宗伊(寛文)の著の語りを経て、自説を述べたもの。享保十五年刊。○草庵集(寛政六)上(三)京...

宗伊(寛文)の著の語りを経て、自説を述べたもの。享保十五年刊。○草庵集(寛政六)上(三)京...



(仙歌清歌大) 四 宗 山 西

寛政十年、文化十一年に歸つてからは京に居つたが一生仕へず、隠居を轉じ、又隠居に出た。彼も生活の資を得るため...

宗因(寛文)の著の語りを経て、自説を述べたもの。享保十五年刊。○草庵集(寛政六)上(三)京...

宗因(寛文)の著の語りを経て、自説を述べたもの。享保十五年刊。○草庵集(寛政六)上(三)京...

宗因(寛文)の著の語りを経て、自説を述べたもの。享保十五年刊。○草庵集(寛政六)上(三)京...

宗因(寛文)の著の語りを経て、自説を述べたもの。享保十五年刊。○草庵集(寛政六)上(三)京...

不忍文庫

賢弘代屋
(傳文忍不)

天海藏

康家川徳傳
(本 傳)

金澤文庫

時實扶北
(家文庫金)

天海藏

齋戒谷持
(氏谷持齋戒)

天海藏

海天信
(藏 齋 天)

淺州文庫

齊卜坂坂
(庫文庫淺)

天海藏

庫文信林

天海藏

彦種亭柳
(庫文庫彦)

そらしし ぞらしし

が成子から後継者各道に出て、往來の人々の
後からそれ等の人々の話に耳を傾けて行。
多居好きの酒屋の老翁に仕方断り聞かせて酒
を持つて歩いて行く者の事や、諸問等の會話、
乞食等の結核、己の運の迷、内心びく／＼
で懐疑定する酒飲み、或は古き武士など
が見える。「華之内語」の後編としてそれを
踏襲したものである。(華之内語參照) (小説)

壯士生涯 (小説)

喪志編 (小説)

【著者】 根取
【名義】 喪志編とは遺書録を玩物に比べ
て自謙したものと思はれる。【諸本】 國書刊
行會の百家類纂第三所載。【解説】 著者徳田
の自題に、「問々史傳・雜説等に及ぶごとく、
其見し所を放して去らんも口惜しければ、筆
に隨ひ見に任せて、古に今に和に漢に雜録し
て抄録し、因より性記述なれば、後日の遺
忘に備ふるのみ……敢て人に示さんには非
ず、書して陰庇に藏むるなり」と云つてある。
されど單なる抄録物でなく、和漢の典籍に據
つて故事の起原を考證し、その他見聞の奇事
等を録したもので、清國并に亞細亞諸國の地
理・物産、及び和蘭船客の情況等を記すこと多
く、又逸話には三世に亘つて時計を工夫せし
蘭人の事、勝取八雲軒安を多藝の事、清田兄
弟遊海を服従せしめし事等もある。その他、
中古以来の史傳に係る記事が少くない。凡て
三百餘條を含んでゐる。宣統二年己巳年夏六月
十一日の自序がある。著者の博覧はこの書に
よつて分る。殊にこの時代に於て心を海外の
事情に注いでゐた事は珍しい。(和史)
瀟湘雜金時 (錢辰金時) を見よ。
康家川徳傳 (石井宗叔) を見よ。
宗純 (石井宗叔) 字は一休。諱



一休 徳田宗純
師南浦紹
明の木像
を造り、
山城妙
勝寺に入
り、翌々
年同く
山城徳
山に大徳
寺を創り

は宗純。幼名は周建【號】狂雲・夢角・訪羅・
國景。天下老和尚【生没】應永元年正月朔日
京都に生れ、文明十三年(二四二)十一月二十
一日山城新に於て寂す。享年八十八【墓所】
山城新羅恩庵【學統】宗純は六歳の時安國寺
に入り、佛外に師事し、十三歳の時東山の慈話
堂に就いて作詩法を學び、群衆等と交つて盛
名を顯せ、「春草」(春夜宿花等の名吟)を賦し
て當時に知らる。十五歳の頃には既に一家の
詩人として聞えた。應永十七年十七歳の時、
清見に就いて内外の書を學究し、尋いで無因
和尚に依つて大徳派の宗風を受け、宗純學型

謙が寂するや石山寺に參籠し、その後近江堅
田へ行き、宗純に師事した。同二十五年(二十
五)宗純より一休の號を與へられた。宗純の
寂後、和泉に兩棲した。永享五年(四十五)後小
松天皇御不豫の折、御床に召されて心要を説
いた。後、龍門の鹿屋を領り、一門の嗣書を
傳へ、翌年御院坊北の小徳に居り、翌々年大
徳寺如意庵に移つた。嘉吉二年(四十九)宗純
の十三回忌を修した。後、大徳寺の事に依り
痛心して餓死せんとした。花園天皇これを慰
め給ふ。後、訪羅庵に遷る。康正元年(六十二
歳)「自戒集」を編んだ。翌年大和の新妙勝寺
に大徳國

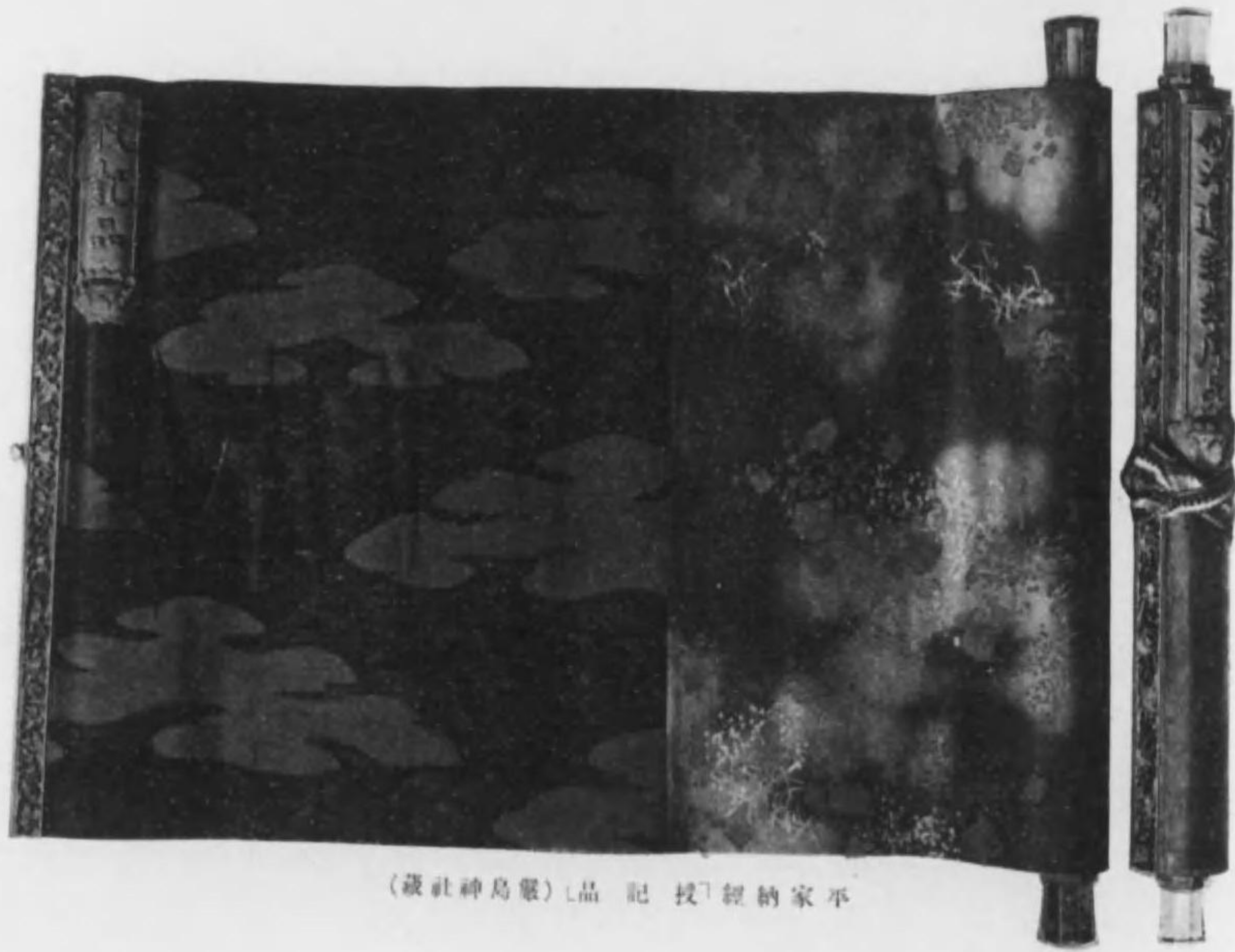
須弥南時
護命法
宗純
小直半
宗純

一休 徳田宗純
山城新羅恩庵

後、名譽を造り、九月又亂を避けて和泉に赴
き、尋いで住吉に住んだ。二年後、如意庵を
再建し、又大徳寺法堂を建てた。文明十三年
(八十八)十一月、齋戒く十一日寂す。【著作】
狂雲集(別項)○自戒集(人物)○宗純は酒脫
磊落な性格で、貴賤の差別なく親しみ交はる
ので、童兒は常に宗純の後を慕ひ、鳥雀は馴
れてその手に食するに至つたが、法門に臨ん
では極めて辛鋭嚴格で、漢堂・妙周・宗純等と
問答論争した。宗純の體類を讀つて嗣書を傳
へた。又論議を著し、山水・人物・花鳥等、
いづれも狂逸にして而も清麗があり、氣韻に
富んでゐる。【參考】一休和尚行實○東海一休和尚年譜○
本朝高僧傳○慈覺傳略○本朝高僧傳○和長
卿記
藏書印とよしん 書誌學【解説】印章(別項)



(藏社神鳥巖) 品 序 經 納 家 平



(藏社神鳥巖) 品 記 投 經 納 家 平



(續氏一轉野上) 子野雜書法



(續氏治山雜式) 子野雜書法



(續氏青久山期) 子野雜書法



(續寺玉天四) 子野雜書法

語「古事談」二字治遺物語「私家百因集」
「古今著聞集」等があり、漢語には「源經」「白氏文集」「莊子」等があり、佛典には「起信論」「涅槃經」「法華經」「金光明經」「阿含經」「往生要集」等がある。なほ「沙石集」と同じ説話も散見する。【内容】本書も「沙石集」(別項)と類似するもので、種々の雑談を集録してゐるが、矢張り佛敎的な説話が主な内容となしてゐる。
(巻一)には、自力本願他力本願、易と佛敎、田獵の天皇王、楚王と后、化道多義、眞言物語等説話と説經説をのせてゐる。(巻二)には物語には得失相違不事を始めとして、知恩の條には猿の報恩説があり、世難は三世の業因に依ると説いて、遊女、あさなへ買、まめ組ものごさ組の滑稽譚を挙げ、妄語得失を説いては、説經僧の失敗譚、羅耶や帖を食する僧とその弟子坊主との滑稽譚が見られる。(巻三)には飲酒を樂成疑念の見地で承認した説經談、山僧と其母の滑稽譚、法宗上人と鹿の母子、鐵輪王の因果譚、禪林寺僧正の滑稽譚、南都高僧、聖武帝と學僧等の笑話がある。袈裟の因縁、作者の述懐等が見られる。(巻四)には、老人用室、願志の重障、泣尼の滑稽、失戀死別に依る發心往生、無明の兄弟、述懐の和歌等が見られるが、いづれも佛敎的な説經談に供せられてゐる。(巻五)には、長谷寺の觀音が、僧に誘拐せられようとする姫君を救ふ滑稽な靈驗譚、勅使のために湯を拭はぬ上人、慈童女、貧女の一僧、梵志と國王等の因果譚、冥途往生、梵輪が三途の苦を救ふ等の話が見られる。(巻六)は空間の妻をなぐさめ、農作の保護をつとめ、或は地獄を救ひ、死者を蘇生せしめる等の地獄の靈驗説話が、多少滑稽味をおびて出てゐる。鐵鬼が

東山の高僧を訪ねる話、數奇な運命に弄せられた禪門夫妻の出家譚、地獄に恨を催はうとする法師の魂の語等が見られる。(巻七)には、動物靈驗譚を用ひて禮儀を説き、法華經の靈驗をさとしてゐる。精進齋や願行、淨不淨を説いてゐる。(巻八)に注目すべき説話は、老子・孔子を本地垂迹の思想で、圓教・迦葉二菩薩の化身であると説いてゐるのと、禪宗の坐禪三昧に五臟腑の響聲譚が説かれてゐることである。(巻九)には、京都の解脫、觀念の利益、讀經の利益、龍尾寺緣起の龍の話、空也と松尾明神等の話がある。嚴密と龜鹿の條には、奇習を用ひる滑稽譚がある。(巻十)には、隱居院羅尼の靈驗譚、後白河法皇の御頭痛を因果的に説明した因果説話等、或は讀經の儀、神明の慈惠等、神佛混淆の態度で説かれてゐる。以上述べた如く本書の文學的興味あるのは、所々に出て來る滑稽譚話の少くない事である。兩も説話を通じて當時の時代思想が呈示されてゐる事は、見逃し得られぬ點である。

【参考】鎌倉時代文學新論 野村八良 (高松)
【雜談集】(1)元禄二年(1695)刊行 元禄五年(1700)刊行 其角全集(佛敎文學)
【佛敎文學】(1)其角全集(佛敎文學)
【佛敎文學】(2)其角全集(佛敎文學)
【佛敎文學】(3)其角全集(佛敎文學)
【佛敎文學】(4)其角全集(佛敎文學)
【佛敎文學】(5)其角全集(佛敎文學)
【佛敎文學】(6)其角全集(佛敎文學)
【佛敎文學】(7)其角全集(佛敎文學)
【佛敎文學】(8)其角全集(佛敎文學)
【佛敎文學】(9)其角全集(佛敎文學)
【佛敎文學】(10)其角全集(佛敎文學)

へただけのものと思はれる。時宜相應の故に云つてゐるのは、東山の談に、個體をあげて云々」とあるのと同じ氣持からの語であらう。かくて東山の談が附されて翌年刊行されたものと思はれる。【内容】撰者の見聞に基く佛敎並に儒者及び撰者に關係ある人々の發句、連句を集めたもので、上巻は佛敎を主として、外に若翁父子と大山・江の島へ吟行した吟句及び四季の發句を載せ、下巻は連句を主として、これに少數の發句と三條の佛敎とを交へたものである。佛敎は、芭蕉の「幸崎の松は花より顯にて」の句の留字についての門下の疑義及び芭蕉の答を初めとして、問門他門及び自己に涉り、古今に涉り、發句・連句に涉つて或は事實を主とし或は自見を主とした説話である。連句は殆どその全部は、後年撰者自身「佛敎雜談」(別項)に再録して居り、發句も撰者自身のものに別集もあるから、本書独自の面目は要するに佛敎にあると云つてよい。【價值】本書の佛敎中には、佛敎として確くべきもののあることは勿論である。其角の佛敎の本、纏まつて聽かれるものは、去來の「花實集」(佛敎雜談)であるが、其角の自著では本書のみである。讀經の「佛敎或問」は屢々本書に言及し、「雜談集」の一書は、誠に其角が旨を知り、撰者の教をあかす最第一の書なり」とまで稱言してゐる。「白蓮夜話」には、「雜談集にはおのれが非をあげいひ」と云ふ點を論じてゐる。下巻の梅翁の句の前文に「佛敎は佛敎の源氏なり」の有名な語も見られる。かく本書は佛敎及び佛敎上の事實に對する其角の感懐評論を纏くべきものとして價値の大きなものである。【形態】門人漢々の其角道義の「其角十七回」は、後に「漢々雜談集」と改題さ

れたが、かく改題された程その體裁が本書に似てゐないではない。道義のためのものなるが故に「其角十七回」の如き體裁として置いたものとすれば、該集編纂の意中には本書に撰する志向が働いてゐたものかも知れない。これにやゝ遅れて現はれた「五色燈」(別項)は、本書下巻の一條中の「句は連具也點はあき人も、その作者相互點の動機となつたので、巻頭にこの語を含む一條を掲げ出してゐる。其角に傾倒した天明の几童は、本書に就つて「新雜談集」(別項)を著作してゐる。これ等の事實の見られるのも、本書の所説と其角一流の才氣とに因るのである。
【宗長】(1)長六
【宗長】(2)長六
【宗長】(3)長六
【宗長】(4)長六
【宗長】(5)長六
【宗長】(6)長六
【宗長】(7)長六
【宗長】(8)長六
【宗長】(9)長六
【宗長】(10)長六

宗長手記(前句)の事を細かに説いたもの。○連歌
自註(五下下地守に送ったもの)○謡詞○百香連
歌合評○老葉註○古瀬新水。その他百香千句
の類がある。「連歌比況集」(前項)もその作と
いふ説がある。

【参考】宗長居士傳(三書)○連歌の史的研
究(開久)

【樂光】俳人(姓名)建部兼親、字は
兼父(別號)秋香庵、實從岡、実業書、兼倉(生
没)寶曆十年に生れ、文化十一年(二四七四)十
一月十七日歿す。享年五十四【島所】東京淺
草北寺町日輪寺【俳系】白鹿門。その八弟子
の一【閑歴】千住の人、善家山本龍齋の子で

あるが、關屋の里に門下生活をしてゐた。成
美・道彦、岩間等と共に江戸の三大家と目され
た。名古屋の十郎、白石の乙二(各別項)、本庄
の長策、根岸の抱一などは特に親しく交は
つてゐた。兼親は文見に學び一機軸を出し、
【韻脚】高古有鳥羽正之風と龜田鶴翁がそ
の句集の序中に云つた一句は、能く兼親に當
つてゐる。父兼親の用ひた「松浦」の印をその
機軸用して、少し新めを押しつゝゐるのを見て
も、その恬淡洒脱の程が知られる。その編著
の小冊子は多数に上るが、皆一特色を具へて
ゐる。特にその挿畫に於て他の模倣を許さない
ものがある。【編著】武藏野(寛政六年)○徳萬
歳半紙本一册(寛政十二年)門人兼倉のために編し
たもの。俳書大系(俳諧名家集)所収○おぼろ互



宗長居士傳(三書)○連歌の史的研
究(開久)

【参考】おぼろ互(俳諧名家集)所収○おぼろ互
の俳諧(おぼろ)を見よ。

【参考】おぼろ互(俳諧名家集)所収○おぼろ互
の俳諧(おぼろ)を見よ。

【参考】おぼろ互(俳諧名家集)所収○おぼろ互
の俳諧(おぼろ)を見よ。

【参考】おぼろ互(俳諧名家集)所収○おぼろ互
の俳諧(おぼろ)を見よ。

【参考】おぼろ互(俳諧名家集)所収○おぼろ互
の俳諧(おぼろ)を見よ。

【参考】おぼろ互(俳諧名家集)所収○おぼろ互
の俳諧(おぼろ)を見よ。

【参考】おぼろ互(俳諧名家集)所収○おぼろ互
の俳諧(おぼろ)を見よ。

【参考】おぼろ互(俳諧名家集)所収○おぼろ互
の俳諧(おぼろ)を見よ。

【参考】おぼろ互(俳諧名家集)所収○おぼろ互
の俳諧(おぼろ)を見よ。

【参考】おぼろ互(俳諧名家集)所収○おぼろ互
の俳諧(おぼろ)を見よ。

【参考】おぼろ互(俳諧名家集)所収○おぼろ互
の俳諧(おぼろ)を見よ。

【参考】おぼろ互(俳諧名家集)所収○おぼろ互
の俳諧(おぼろ)を見よ。

【参考】おぼろ互(俳諧名家集)所収○おぼろ互
の俳諧(おぼろ)を見よ。

【参考】おぼろ互(俳諧名家集)所収○おぼろ互
の俳諧(おぼろ)を見よ。

【参考】おぼろ互(俳諧名家集)所収○おぼろ互
の俳諧(おぼろ)を見よ。

【参考】おぼろ互(俳諧名家集)所収○おぼろ互
の俳諧(おぼろ)を見よ。

【参考】おぼろ互(俳諧名家集)所収○おぼろ互
の俳諧(おぼろ)を見よ。

【参考】おぼろ互(俳諧名家集)所収○おぼろ互
の俳諧(おぼろ)を見よ。

【参考】おぼろ互(俳諧名家集)所収○おぼろ互
の俳諧(おぼろ)を見よ。

【参考】おぼろ互(俳諧名家集)所収○おぼろ互
の俳諧(おぼろ)を見よ。

【参考】おぼろ互(俳諧名家集)所収○おぼろ互
の俳諧(おぼろ)を見よ。

【参考】おぼろ互(俳諧名家集)所収○おぼろ互
の俳諧(おぼろ)を見よ。

【参考】おぼろ互(俳諧名家集)所収○おぼろ互
の俳諧(おぼろ)を見よ。

【参考】おぼろ互(俳諧名家集)所収○おぼろ互
の俳諧(おぼろ)を見よ。

【参考】おぼろ互(俳諧名家集)所収○おぼろ互
の俳諧(おぼろ)を見よ。

【参考】おぼろ互(俳諧名家集)所収○おぼろ互
の俳諧(おぼろ)を見よ。

【参考】おぼろ互(俳諧名家集)所収○おぼろ互
の俳諧(おぼろ)を見よ。

【参考】おぼろ互(俳諧名家集)所収○おぼろ互
の俳諧(おぼろ)を見よ。

【参考】おぼろ互(俳諧名家集)所収○おぼろ互
の俳諧(おぼろ)を見よ。

【参考】おぼろ互(俳諧名家集)所収○おぼろ互
の俳諧(おぼろ)を見よ。

【参考】おぼろ互(俳諧名家集)所収○おぼろ互
の俳諧(おぼろ)を見よ。

【参考】おぼろ互(俳諧名家集)所収○おぼろ互
の俳諧(おぼろ)を見よ。

【参考】おぼろ互(俳諧名家集)所収○おぼろ互
の俳諧(おぼろ)を見よ。

【参考】おぼろ互(俳諧名家集)所収○おぼろ互
の俳諧(おぼろ)を見よ。

【参考】おぼろ互(俳諧名家集)所収○おぼろ互
の俳諧(おぼろ)を見よ。

【参考】おぼろ互(俳諧名家集)所収○おぼろ互
の俳諧(おぼろ)を見よ。

【参考】おぼろ互(俳諧名家集)所収○おぼろ互
の俳諧(おぼろ)を見よ。

【参考】おぼろ互(俳諧名家集)所収○おぼろ互
の俳諧(おぼろ)を見よ。

【参考】おぼろ互(俳諧名家集)所収○おぼろ互
の俳諧(おぼろ)を見よ。

【参考】おぼろ互(俳諧名家集)所収○おぼろ互
の俳諧(おぼろ)を見よ。

【参考】おぼろ互(俳諧名家集)所収○おぼろ互
の俳諧(おぼろ)を見よ。

【参考】おぼろ互(俳諧名家集)所収○おぼろ互
の俳諧(おぼろ)を見よ。

【参考】おぼろ互(俳諧名家集)所収○おぼろ互
の俳諧(おぼろ)を見よ。



宗長居士傳(三書)○連歌の史的研
究(開久)

れる。ビョーの捕鯊がある。【附記】同じ「デカモン」中の物語を讀したもので、本書の姉妹篇ともいふべきものに、

【宗牧】「運歌師」(姓)谷氏「號」孤竹

【参考】明治の國文學研究會(田中)「宗牧」(姓)谷氏「號」孤竹

た。天文の末、旅路で歿したが、臨終に際して古今傳授の宮を近衛朝臣白河公に送り、「紅葉葉はつねなき風にもちりぬともなほ木のもとを

【参考】「耳底記」にも宗牧はよく人に斯道を傳へたるものにて、運歌の道のことまか

【参考】「耳底記」にも宗牧はよく人に斯道を傳へたるものにて、運歌の道のことまか

【参考】「耳底記」にも宗牧はよく人に斯道を傳へたるものにて、運歌の道のことまか

【参考】「耳底記」にも宗牧はよく人に斯道を傳へたるものにて、運歌の道のことまか

増補訂正して組織を改めたものである。まづ語をその意義によつて、天地氣候以下二十四

【参考】「耳底記」にも宗牧はよく人に斯道を傳へたるものにて、運歌の道のことまか

【参考】「耳底記」にも宗牧はよく人に斯道を傳へたるものにて、運歌の道のことまか

【参考】「耳底記」にも宗牧はよく人に斯道を傳へたるものにて、運歌の道のことまか

【参考】「耳底記」にも宗牧はよく人に斯道を傳へたるものにて、運歌の道のことまか

【題材】この作の角書に、「市川海老蔵遺稿の正本」とあるが、海老蔵即ち七代市川團十郎に遺書があつたのを、明治六年に至つて書いたものと見える。

【参考】「耳底記」にも宗牧はよく人に斯道を傳へたるものにて、運歌の道のことまか

【参考】「耳底記」にも宗牧はよく人に斯道を傳へたるものにて、運歌の道のことまか

【参考】「耳底記」にも宗牧はよく人に斯道を傳へたるものにて、運歌の道のことまか

【参考】「耳底記」にも宗牧はよく人に斯道を傳へたるものにて、運歌の道のことまか

の心中を推量するので、秀次はその本心を明かさんとし、立ち聞きせんとした兵部之介を槍で貫く。兵部之介は石田三成(加増)してお

【参考】「耳底記」にも宗牧はよく人に斯道を傳へたるものにて、運歌の道のことまか

【参考】「耳底記」にも宗牧はよく人に斯道を傳へたるものにて、運歌の道のことまか

【参考】「耳底記」にも宗牧はよく人に斯道を傳へたるものにて、運歌の道のことまか

【参考】「耳底記」にも宗牧はよく人に斯道を傳へたるものにて、運歌の道のことまか

【参考】「耳底記」にも宗牧はよく人に斯道を傳へたるものにて、運歌の道のことまか



馬御風

風の作物の先驅として、又九代團十郎が得意のものとして既に定評あるものである。

【参考】「耳底記」にも宗牧はよく人に斯道を傳へたるものにて、運歌の道のことまか

【参考】「耳底記」にも宗牧はよく人に斯道を傳へたるものにて、運歌の道のことまか

【参考】「耳底記」にも宗牧はよく人に斯道を傳へたるものにて、運歌の道のことまか

【参考】「耳底記」にも宗牧はよく人に斯道を傳へたるものにて、運歌の道のことまか

【参考】「耳底記」にも宗牧はよく人に斯道を傳へたるものにて、運歌の道のことまか

【参考】「耳底記」にも宗牧はよく人に斯道を傳へたるものにて、運歌の道のことまか

【参考】「耳底記」にも宗牧はよく人に斯道を傳へたるものにて、運歌の道のことまか

【参考】「耳底記」にも宗牧はよく人に斯道を傳へたるものにて、運歌の道のことまか

【参考】「耳底記」にも宗牧はよく人に斯道を傳へたるものにて、運歌の道のことまか

【参考】「耳底記」にも宗牧はよく人に斯道を傳へたるものにて、運歌の道のことまか

【参考】「耳底記」にも宗牧はよく人に斯道を傳へたるものにて、運歌の道のことまか

【参考】「耳底記」にも宗牧はよく人に斯道を傳へたるものにて、運歌の道のことまか

【参考】「耳底記」にも宗牧はよく人に斯道を傳へたるものにて、運歌の道のことまか

【参考】「耳底記」にも宗牧はよく人に斯道を傳へたるものにて、運歌の道のことまか

【参考】「耳底記」にも宗牧はよく人に斯道を傳へたるものにて、運歌の道のことまか

【参考】「耳底記」にも宗牧はよく人に斯道を傳へたるものにて、運歌の道のことまか

【参考】「耳底記」にも宗牧はよく人に斯道を傳へたるものにて、運歌の道のことまか

金剛現行

【雲行御】三香目【作者】觀世小次郎(本名...)

【雲】三香目【作者】未詳(内容)行脚僧...

【雲】三香目【作者】日吉安清(二十番目...)

増山の井

【雲】三香目【作者】未詳(内容)行脚僧...

【雲】三香目【作者】未詳(内容)行脚僧...

【雲】三香目【作者】未詳(内容)行脚僧...

の注進を耳にしたがら宗慶の海にまじる...

【雲】三香目【作者】未詳(内容)行脚僧...

【雲】三香目【作者】未詳(内容)行脚僧...

【雲】三香目【作者】未詳(内容)行脚僧...

屋の鏡言を巴御前が嗜める。御寮所は浦の鏡... 浦の鏡は、大名家小路、浦の鏡は...

めめ假病と明かし、直に兄弟に祝言させる... 小四郎は悦んで浦へ内通に走...

師のやつしは「世間曾我」(別題)、小四郎は曾... 我五人兄弟、曾我の里は曾我虎が...

が彼を思つてゐることを告げる。時宗茶に... 相手にはない。虎は説方なく十郎の方へ去...

曾我派は一時に世に認められた。二直庵も家... 風をよくし、雲を描くに巧みであつた。曾我...

曾我物 歌舞伎(名) 曾我狂言... ともいふ。曾我兄弟の事蹟に取材した狂言...

三座で所演されたもので、即ち、山村座(古今... 兵衛我(十番)の市川十郎五郎(五郎)...

十番新等である。【對面の變遷と種目】 慣例として行はれた曾... 我の對面を主に、變遷上からこれを大別...

前で、並び大名の前で、兄弟が朝比奈の手引... 結經へ對面するといふ形式になつた。尤もこ...

【對面の變遷と種目】 慣例として行はれた曾... 我の對面を主に、變遷上からこれを大別...



(明治本) 對面 對面

なる。それは對面を重々しく見せる効果ばか... りでなく、如何にも奉狂言にふさはしいので...

【初演】元治元(文久)二年二月江戸市村座。【脚本】...

平に賣られた忘具であつて、茶道の傳書は巴之丞の手に渡り、進洲の實の妹は時鳥である...

【價値】小蘭次郎の當り處であつたのみならず、その藝統の一面を繼承した五代並に六代尾上菊五郎...

それ、特色があつて面白い。【脚本】...

【續今宮草】佛蘭集 二冊 【作者】小西来山...

記があり、この後には三句通補してある。又句上に泉石の評を記した句が少くないが...

【續満島子傳】傳記 一巻 【作者】未詳【成立】延喜二十年八月朔日...

【續有磯海】佛蘭集 二冊 【作者】竹冷文庫第三編...

の中、去来は早く一人で兩儀を使ひ、許六支考も兩儀を使つて行つてゐる。この兩儀の中、續撰といふ方が優勢になつたのは、本集が「俳諧七部集」に選ばれた後のことと思はれる。又この名稱の選定者も判然とてゐない。「刊行」元禄十一年五月「諸本」原稿は白茶表紙の半紙本二冊で、あづつ屋庄兵衛開版。その他諸版の「俳諧七部集」及び芭蕉全集(俳諧文庫)高岡俳諧前集(俳諧大考)芭蕉全集(日本名著全集)等に所載。



俳諧七部集

【内容】上巻が發句、下巻が發句で、上巻は芭蕉・治國・馬寛・甲國四吟歌仙、下巻は芭蕉・治國・馬寛・甲國四吟歌仙、四吟歌仙一巻、治國の「發句」もれたる一の句を立句とする。芭蕉の芭蕉支考、芭蕉歌仙一巻、支考の今宵歌を前書とする芭蕉支考、馬寛・馬寛支考五吟歌仙一巻が収められ、下巻は四季各部と釋教之部附遺著、旅之部の六部が部立てして、發句五百九十九首を収め、その中芭蕉三十一句、支考二十四句、治國二十句が多い方である。秋之部の芭蕉の名月二句が支考が評を後記してゐる。なほ本集には遺著しや書入や訂正やがあつて、井筒屋の奥書に草稿を手紙の儘行したと云つてゐる如く、さう見えるものになつてゐるが、これは種々の資料によつて支考の作爲であることが確定される。【史的地位・價值】「俳諧七部集」中最後の地位を占めてゐるが、正に芭蕉晩年の俳風を代表するもので、「蕉依(別題)の姉妹篇」或は「蕉依の如き地位」を取り、「蕉依」と同じく輕み

の調子のもと言ひ得る。去来は、「ひきこ」【蕉依】以後を云つて、「其後又一ツの新風を起さる。蕉依・續撰は芭蕉(俳諧七部集)と言ひ、許六は、六世間の人、後撰の調子は許六のみで面白き事也と云々(俳諧問答)と言ひ、東登は、續撰は蕉依にあるなり、全體は之程度の流行ちやと先師(馬寛)などのいはれた(七部集)と云つてゐる。支考は最後の結成者であるだけに、「蕉依」の法華經にして「蕉依」の法華經と云ふ、實にして實ならんや」ば花にして花ならず、實にして實ならんや」(芭蕉)と云つてゐるが、これは勿論引引して考へねばならぬけれども、「蕉依」ほど人事俗事に傾く弊が少く、この點から「蕉依」に優る所がある。(芭蕉)

【内容】「三千里」(別題)の續編。續に日本全國遍歴を企てた著者は、先づ東北方面を一通して一旦歸京して後、明治四十二年四月、再び旅装を懸へて出發した。甲斐を抜出して信濃に入り、越後を越え、飛騨を過ぎ、越中を経て能登に踏み入り、加賀に至つた。轉じて伊勢に赴いて運宮の御儀を拜觀し、更に美濃を過ぎ、越前に戻り、それより丹波・但馬・因幡・伯耆・出雲・石見・長門といふ順に歴遊してゐる。この巻は下關で編纂してある。著者はそれに續いて、九州に入り、東海道を經て四十四年七月、東京に戻つた。この行は二年三月を費し、初度の東北の旅一年三月月と併せて、前後三ヶ年を以て、全國俳句旅行の目的を果した譯である。この中、九州以後の記は「三千里」下冊として刊行せらるゝ譯のみである。但し「日本及日本人」紙上「續一日一信」として載せられるもの、その未刊の部を見ることは出来る。【影響】俳壇の新傾向運動は、四十一年頃より漸く顯著となつたので、恰も著者のこの第二次旅行が、直接にその運動ともなれば宜かつた。各地の俳句會では俳三味といふ句作旅行が試みられた。研究的の製作が熱を帯びた事この當時の如きは、前後に稀であつた。殊に城崎・玉島の兩所に於ける俳三味は勇猛精進の意氣に燃え、その時、所謂新傾向運動に決定的の方向を與へた信條は、この間の製作意圖より醸成せられたものと云つてゐる。兎も角著者のこの旅行と本書の發表が、俳壇の新運動を促進した事は顯著である。作句の中より、

有徳者に徳を狂ひさく花か
俗耳談(別題) 隨筆 正編次編各五卷二冊 宮川通成・柴田成美・矢島泰成の分巻筆記したもの。【解説】和漢の語義、事原、古語等を人の問ふに對して解答したもの。正編卷一に表は承以下、卷二に機嫌を食ふ以下、卷三に其うちが故實以下、卷四に物事のままたなるをよしとす以下、卷五に常に反する物以下、次編卷一にいとと云ふ詞以下、卷二に福を神佛に願ふ事以下、卷三に水をとと謂ふ事以下、卷四に福と云ふ詞以下、卷五に福の字をかくりと謂ふ以下各數十項を載せてゐる。序跋はない。寫本に誤脱が多い。【著者小傳】山本栞女は尾張の博學者で、天野信景の門人。號を實齋と言つた。書を能くして從學者も多かつた。政年未詳。實齋中の人と云ふ。別著に「燕行錄」「實齋漫錄」の二冊がある。(和泉)

高風を示すに足るべきものである。文の種類は、年次によつて記事、紀行、雜題の三種に分けてある。(石井庄)

【續撰】河東實情(別題) 俳句集 四冊 十年【内容】子規の俳句の最高發達たる新編「日本」紙上の日本俳句より選抄したものであるから、代表的な選集として、「春夏秋冬(別題)に次ぐものと見做して宜い。年代は明治三十六年以後、恰も子規の病歿前日本俳句が豐收期となつてより以後であるから、俳諧の趣味傾向が濃厚に現はれてゐるとも見られる。「新俳句」から「春夏秋冬」になつて、句の進歩したことは、子規子の明言する如くである。「春夏秋冬」から「續春夏秋冬」になつて、句が如何に變化したか、予はこゝに明言することを得ぬ」と編者は云つてゐるけれども、「春夏秋冬」以後、表現上の進歩は著しきものがあり、子規に依つて創められた新派俳句なるものは、この時代に於て一の頂點に登りきつたものと云ふべく、從つてこれに續いて一轉化をなす原因を察してゐる。それが即ち新傾向(別題)である。編者の言に「予の日本新聞記者たること約四年、一日新聞の句數約八百、四年間一千四百六十日の句數約百十五萬、其中毎季千句併せて四千句を得て此集を成す」と、題存の標準の嚴密であることはこれでも知られる。(和泉)

行傳、市井の風俗等に關する事項の考説を續録したもので、卷一に露の五郎兵衛以下十六條、卷二に尼が紅粉以下十八條、卷三に玉川主膳以下十五條を収めてゐる。劇場見聞、遊歴、俗曲等に關する記事が多く、概ね古書を引いて考證してゐる。俳諧が少くある。(和泉)

【續撰】河東實情(別題) 俳句集 四冊 十年【内容】子規の俳句の最高發達たる新編「日本」紙上の日本俳句より選抄したものであるから、代表的な選集として、「春夏秋冬(別題)に次ぐものと見做して宜い。年代は明治三十六年以後、恰も子規の病歿前日本俳句が豐收期となつてより以後であるから、俳諧の趣味傾向が濃厚に現はれてゐるとも見られる。「新俳句」から「春夏秋冬」になつて、句の進歩したことは、子規子の明言する如くである。「春夏秋冬」から「續春夏秋冬」になつて、句が如何に變化したか、予はこゝに明言することを得ぬ」と編者は云つてゐるけれども、「春夏秋冬」以後、表現上の進歩は著しきものがあり、子規に依つて創められた新派俳句なるものは、この時代に於て一の頂點に登りきつたものと云ふべく、從つてこれに續いて一轉化をなす原因を察してゐる。それが即ち新傾向(別題)である。編者の言に「予の日本新聞記者たること約四年、一日新聞の句數約八百、四年間一千四百六十日の句數約百十五萬、其中毎季千句併せて四千句を得て此集を成す」と、題存の標準の嚴密であることはこれでも知られる。(和泉)

【續撰】河東實情(別題) 俳句集 四冊 十年【内容】子規の俳句の最高發達たる新編「日本」紙上の日本俳句より選抄したものであるから、代表的な選集として、「春夏秋冬(別題)に次ぐものと見做して宜い。年代は明治三十六年以後、恰も子規の病歿前日本俳句が豐收期となつてより以後であるから、俳諧の趣味傾向が濃厚に現はれてゐるとも見られる。「新俳句」から「春夏秋冬」になつて、句の進歩したことは、子規子の明言する如くである。「春夏秋冬」から「續春夏秋冬」になつて、句が如何に變化したか、予はこゝに明言することを得ぬ」と編者は云つてゐるけれども、「春夏秋冬」以後、表現上の進歩は著しきものがあり、子規に依つて創められた新派俳句なるものは、この時代に於て一の頂點に登りきつたものと云ふべく、從つてこれに續いて一轉化をなす原因を察してゐる。それが即ち新傾向(別題)である。編者の言に「予の日本新聞記者たること約四年、一日新聞の句數約八百、四年間一千四百六十日の句數約百十五萬、其中毎季千句併せて四千句を得て此集を成す」と、題存の標準の嚴密であることはこれでも知られる。(和泉)

【足新翁記】(別題) 隨筆 三卷【著者】柳亭種彦(別題) 明治三十九年「百家説林」編輯に收められて上印。【解説】江戸時代の流

【續撰】河東實情(別題) 俳句集 四冊 十年【内容】子規の俳句の最高發達たる新編「日本」紙上の日本俳句より選抄したものであるから、代表的な選集として、「春夏秋冬(別題)に次ぐものと見做して宜い。年代は明治三十六年以後、恰も子規の病歿前日本俳句が豐收期となつてより以後であるから、俳諧の趣味傾向が濃厚に現はれてゐるとも見られる。「新俳句」から「春夏秋冬」になつて、句の進歩したことは、子規子の明言する如くである。「春夏秋冬」から「續春夏秋冬」になつて、句が如何に變化したか、予はこゝに明言することを得ぬ」と編者は云つてゐるけれども、「春夏秋冬」以後、表現上の進歩は著しきものがあり、子規に依つて創められた新派俳句なるものは、この時代に於て一の頂點に登りきつたものと云ふべく、從つてこれに續いて一轉化をなす原因を察してゐる。それが即ち新傾向(別題)である。編者の言に「予の日本新聞記者たること約四年、一日新聞の句數約八百、四年間一千四百六十日の句數約百十五萬、其中毎季千句併せて四千句を得て此集を成す」と、題存の標準の嚴密であることはこれでも知られる。(和泉)

【解説】本編を用ひる著書に二種ある。(一)は古書保存會本、(二)は國書刊行會編纂のものである。前者は五冊より成り、明治三十六、七、八年に刊行。第一卷、編年録(應永元年迄)、第二卷、七代寺部總記・平城宮大内裏跡坪別之圖及附圖、第三卷、續家部・聖德太子傳私記(古今事類)、(第四卷)獨物語、(第五卷)帝王部(延久四年五年日次記(官職部)有職問答・公武大體略記(文部部)藤原公檢校之記(合職部)大津城合戰記(第四卷)公事部(編年抄、前九鬼長門守守隆傳、近衛氏書上・毛利家様子・前東色樂、前田田舎傳を収めてゐる。この古書保存會は「古今の貴重圖書を刊行する目的を以て明治三十六年に創設されたもので、吉川弘文館が中心となり會員組織の下に、第一期刊行として本書が選ばれた。又後者は井上頼岡・佐伯有義監修の下に、同三十九、四十年に刊行。第一冊神祕部、第二、三、四冊史傳部、第五冊記帳部、第六、七冊法制部、第八、九冊地理部、第十冊教育部、第十一、十二冊宗教部、第十三冊詩文部、第十四、十五冊歌文部、第十六冊雜部となつてゐる。國書刊行會發售のうちは第一期に屬するもので、塙保己一の輯めたる正續二編の後を承けて其遺漏を拾ひ、且其未だ取るに及ばざりし近世(江戸幕府時代の典籍)を収めたものである。正續史略集、存探、震書・帝國文庫、各別項等に已に刊行されたものを省き、原本三百六十七部三百五十五卷を、「群書類從」(別題)の部門二十五を神祕・史傳等十二のそれに編制して收載する。底本は官署名家の編輯を用ひ、校訂は各書專門家の手を經たもので、嚴密な點に於て定評のあるものである。(土光)

【續撰】河東實情(別題) 俳句集 四冊 十年【内容】子規の俳句の最高發達たる新編「日本」紙上の日本俳句より選抄したものであるから、代表的な選集として、「春夏秋冬(別題)に次ぐものと見做して宜い。年代は明治三十六年以後、恰も子規の病歿前日本俳句が豐收期となつてより以後であるから、俳諧の趣味傾向が濃厚に現はれてゐるとも見られる。「新俳句」から「春夏秋冬」になつて、句の進歩したことは、子規子の明言する如くである。「春夏秋冬」から「續春夏秋冬」になつて、句が如何に變化したか、予はこゝに明言することを得ぬ」と編者は云つてゐるけれども、「春夏秋冬」以後、表現上の進歩は著しきものがあり、子規に依つて創められた新派俳句なるものは、この時代に於て一の頂點に登りきつたものと云ふべく、從つてこれに續いて一轉化をなす原因を察してゐる。それが即ち新傾向(別題)である。編者の言に「予の日本新聞記者たること約四年、一日新聞の句數約八百、四年間一千四百六十日の句數約百十五萬、其中毎季千句併せて四千句を得て此集を成す」と、題存の標準の嚴密であることはこれでも知られる。(和泉)

段坂を渡り上つて行く洋服出立の二人連がある。それは小野哲也と、その友人葉村幸三郎である。哲也は帝大を出た法學士の學校教師である。學生時代から秀才を見込まれて小野家の婿養子となつたもので、妻時子と姑との三人暮らしであるが、この頃は夫に死に別れて出戻つた義妹の小夜子といふ二十三になる女がある。勝氣な時子との間の圓滿を缺く哲也は、その心の空虚を小夜子に依つて慰めを見出してゐるのである。時子が義理の妹に対する不満は爆發して来る。小夜子は自分の身をひいて、一時、葉村にすまぬまゝに富貴盛衰各家に家庭教師となる。哲也は妻を疎む心が強くなり、渋谷に無難を言はれてそこを逃げ出して来た小夜子に一層親しみかけ

た構想のはつきりした作品で、當時の所謂家庭小説等の影響さへもありはしないかと疑はれる。哲也と云ひ小夜子と云ひ時子と云ひ、類型的な性格と心理を説いてゐない。時子の嫉妬、小夜子と哲也の戀愛の描寫などには通俗味が多分にある。また探偵小説的に筋の變化を追つて行く邊りにも通俗味がある。發表當時の世評は高く、一般社會にも愛讀されたが、文藝史的の意義と價值とは「浮雲」(別題)のそれに比較すべきものがない。すでに二十年程の歳月を経た當時の自然主義一派の最高潮の時代にあつては、「其面影」は何等新機運を誘ふことの出来なかつたのは事實である。併し日本を去り海外に放浪する哲也には、晩年の作者の風貌とその思想上に於ける浪漫的な片影と認めない譯には行かない。本作の最後は「浮草(ルーチン)別題」の結末を思はせるものがあり、哲也にもルーチン型の一面がないでもない。又哲也の性格は「浮雲」の文三と同型で、その新しい發展とも見られる。【参考】「二葉亭四迷内田魯庵」(別題)思ひ出す人々内田魯庵(鎌倉)早稲田文學明治文學研究會編「櫻痴」(武蔵)

持つてゐる。かゝる不統一なものになつてゐるが、文藝王(二)はこの七月に宗廟が歿してゐて、當時岩城に遷住した葉村がこれを聞いて、懇々宗廟墓の地の箱根の湯まで来て、道標の長歌を宗廟へ送つたりしてゐるなどから考へて、宗廟の死に感ずる所があつて急に思ひ立つて書き置いた結果、かゝる不統一なものになつたかと想像される。本集中、師心敬信の歿後八年の春に、その墓所で百韻を行ひ、十三回忌に佛名を冠字にした百韻を行つたことの見えなどが注意される。(「志出」)

出してつた。青根葉之進の娘お蘭、半七を大御川原で見染め、葉之進は人を介して半七を養子にした。或る日出入の醫者稲田安幸が尋ねて来て、築地に移したからと、死ひに来る。半七は何も知らず遊びに行くと、死んだと思つた三郎が安幸宅にゐるのを見て驚く。實は見詰の橋本所三つ日で三郎の橋が落ち、女の死體が上つたので(豊元通の死體)、三郎は死んだと思ひ詰り厚く葬つたところが、安幸に救はれてゐたのである。半七はそのまゝ三郎を安幸の家近く圍つて折々通つた。彼は葉家の首尾を遂に聞知した。三郎は根岸に琴の指雨をして半七を愛つた。三郎は不在中、浦路の山麓が通つて来て半七と契つた。浦路は伯父の悪漢に欺かれて悪賢横槍典全に賣られ、投身して死んだのである。その妹お浦に乗り移つて、半七と契つたのである。お蘭の父葉之進は、主君の悪行を諷刺切腹した。養子半七を離縁したのも、迷途の及ばぬやう心遣ひしたのである。お蘭は追ひ出されて種々の迫害を受け、附根にまで零落するが、遂に半七に再會し、後、附根に再興され、半七は召返されて本妻お蘭、三郎、お浦はお部屋様と呼ばれてめでたく榮えた。

【構想】一人の男性を巡る三人の女性の戀といふ春水の人情本の常套的なものであるが、讀本から脱化した作だけに、草野は趣味に富んだものである。稲田安幸夫婦が駄洒落を言ひ合ふ所などは、文政以後の滑稽本に似通つたものである。(山崎)

【傳系】(初代)八、傳未詳。宮園花開子に傳へて、斯流の祖であり、宮古路豊後後孫の末代國太夫(半世)時代の高足とおぼしく、同門の繁太夫が大阪で一旗を揚げたのに先立つて京都で一旗を揚げた。門下から二代國八、春富士正傳、宮古路世代太夫(元世)等が命の逸才を出した事などが知られる。(宮園)傳未詳。寶曆十二年宮園豊前と改め、更に明和四、五年前後豊前と改名。別號、平泉。天明五年五月九日京都で歿す。三人皇孫。彼は天成の美香家であつた。又文才があつて、輕快な滑稽調などの作もあり、且つ斯流の語り物の大部分が彼の作曲であるに徴しても、彼は宮園節の大成者である。一時京都に宮園豊

前座を興行したと傳へられるが、その他に京都で芝居への出陣は傳へられてゐない。數年間江戸へ下つて斯流を扶せんとなつた事がある。多くの門下の中、源氏太夫、出水太夫、兵衛太夫、喜久太夫、文字太夫等が名高く、喜久と文字の兩太夫は、安永以降斯流の中興をなした。三絃では、豊乳化梅助治等が著

【傳系】(初代)八、傳未詳。宮園花開子に傳へて、斯流の祖であり、宮古路豊後後孫の末代國太夫(半世)時代の高足とおぼしく、同門の繁太夫が大阪で一旗を揚げたのに先立つて京都で一旗を揚げた。門下から二代國八、春富士正傳、宮古路世代太夫(元世)等が命の逸才を出した事などが知られる。(宮園)傳未詳。寶曆十二年宮園豊前と改め、更に明和四、五年前後豊前と改名。別號、平泉。天明五年五月九日京都で歿す。三人皇孫。彼は天成の美香家であつた。又文才があつて、輕快な滑稽調などの作もあり、且つ斯流の語り物の大部分が彼の作曲であるに徴しても、彼は宮園節の大成者である。一時京都に宮園豊

【傳系】(初代)八、傳未詳。宮園花開子に傳へて、斯流の祖であり、宮古路豊後後孫の末代國太夫(半世)時代の高足とおぼしく、同門の繁太夫が大阪で一旗を揚げたのに先立つて京都で一旗を揚げた。門下から二代國八、春富士正傳、宮古路世代太夫(元世)等が命の逸才を出した事などが知られる。(宮園)傳未詳。寶曆十二年宮園豊前と改め、更に明和四、五年前後豊前と改名。別號、平泉。天明五年五月九日京都で歿す。三人皇孫。彼は天成の美香家であつた。又文才があつて、輕快な滑稽調などの作もあり、且つ斯流の語り物の大部分が彼の作曲であるに徴しても、彼は宮園節の大成者である。一時京都に宮園豊

【傳系】(初代)八、傳未詳。宮園花開子に傳へて、斯流の祖であり、宮古路豊後後孫の末代國太夫(半世)時代の高足とおぼしく、同門の繁太夫が大阪で一旗を揚げたのに先立つて京都で一旗を揚げた。門下から二代國八、春富士正傳、宮古路世代太夫(元世)等が命の逸才を出した事などが知られる。(宮園)傳未詳。寶曆十二年宮園豊前と改め、更に明和四、五年前後豊前と改名。別號、平泉。天明五年五月九日京都で歿す。三人皇孫。彼は天成の美香家であつた。又文才があつて、輕快な滑稽調などの作もあり、且つ斯流の語り物の大部分が彼の作曲であるに徴しても、彼は宮園節の大成者である。一時京都に宮園豊

鼠環十種(註) 叢書 二册(編者) 三田村魚(刊行) 大正五年、國書刊行會...



(編者) 魚村三田

に、山神を聞いて感じて舞つた事を現し たとか、又は聖徳太子が河内の魚沼に於て尺八を吹き給うた時に、山神感じて舞うたこと...

十太夫(別號)白丹、絢堂、藤原、一練、兼、竹光、天地庵、向旭樓、青野、謙道、高、高、高、高...

あひやあひや あひやあひや あひやあひや

寛容で、子弟を導くに詳々として他まなかつた。明和九年四月十日致仕し、遊樂して...

のはい。葛原宿門分縣系圖によれば、小林一茶も赤丸の門となつてゐるが、一茶は赤丸の同門二六庵竹阿に属してゐたので、赤丸の直系とは言ひ難い。

蘇民將來(註) 説話(名義) 生民を將來に蘇民する義(日本書紀通釋) 神符を衣袖に懸けると死人と蘇生する義(下巻)...

一の世界大綱布説話に過ぎない。それがいかなる過程の下に、遠須佐能雄神に就いて物語られるやうになり、又どうして茅渟の神事の起原を説明するために利用されるやうになつたかは、解釋が甚だ困難である。

うとするに則ち高の頭客三谷が来て、附き合つて飲み直せといふので、また酒になつた。むしやうにやる時は、何でもしたいことをして遊ぶに限る。あれならいふ人があつたら呼んでやる。中屋の松つあんなどはどうだとの言葉に、兼吉は松太郎の弟の清二郎...

思つたのも、矢張り目だつたかと口惜しく、また筆が洩れてゐるのが惜らしくしてな

【批評】「舞臺」は「たかたの記」「文づかひ」(各別題)の三作を世に問うた後、久し振りで

奸策に乗り家色の紙を借りて自家の手代書六に預け、父の金三百兩を引出させ、それを

【脚色】「祭文」と歌舞伎の「心中中門角」とから成立した「おそめ久松の白しぼり」(別題)に

【新編歌舞文】(別題)等比して注意されるべきであらう。【影書】歌舞伎にも移されて

【参考】「おそめ久松の白しぼり」(別題)は、久松の親野の久作が草足袋を土産に

元禄六年五月二十二日とするは誤である。享年六十二【法名】墓碑には、賢翁宗居士【墓所】

【参考】「おそめ久松の白しぼり」(別題)は、久松の親野の久作が草足袋を土産に



河合良吉

おそめ久松の白しぼり

した時には江戸に在つたが、徳川等と深くその死を悼み、後、義仲寺の墓に詣りて、

【参考】「おそめ久松の白しぼり」(別題)は、久松の親野の久作が草足袋を土産に

【参考】「おそめ久松の白しぼり」(別題)は、久松の親野の久作が草足袋を土産に

【参考】「おそめ久松の白しぼり」(別題)は、久松の親野の久作が草足袋を土産に

【参考】「おそめ久松の白しぼり」(別題)は、久松の親野の久作が草足袋を土産に

【参考】「おそめ久松の白しぼり」(別題)は、久松の親野の久作が草足袋を土産に

【参考】「おそめ久松の白しぼり」(別題)は、久松の親野の久作が草足袋を土産に

武意 牛門物色動新卒 病客高齋轉傲然 御氣潜通城心也 雄風迫遠海不云 歌来不啻樹杯後 無限長河行路馬 誰知此處感 懸

近世始りたる事なり」とある。古くは...

「大悦物語」にもほぼ同様に見えてゐる。...

じた。一に一夜のお情の夕顔の若ばえ、二に...

「大悦物語」にもほぼ同様に見えてゐる。...

開化等の新語を混用した點に於て喝采を傳...

あつた。文化十年。行年六十二。(和山)...

て純文學への復帰が試みられ、一時はプロ...

國が萬國に勝れて尊い所以は、漢土は聖人、賢人の才智で法令が定められた國であるから、當に變革が行はれて天運が長久でないのに、我が國は天照大神以來一系の皇統が連続して君臣の分明かに、大神の神勅が永久に事實として保存すること、天照大神は萬國を照らす日輪で、我が國はその御生涯の本國であり、天皇は御子孫であるから、我が國は君國で他は臣國であること、我が國の道は武を本體として朝廷を尊ぶるのに、諸外國には武力を以て王位奪取をなすものがあること等を、第二條、儒・佛の惡しき所以は、儒者の稱する堯舜の受禪は却つて惡風の因で、これから湯武の放伐も起り、代々王位を奪ふ者を生じ、我が國でも儒道が入つてから、大逆の者が出たとして、儒道の害悪は人倫の第一たる君臣の大義に於てある所にあるとして、又佛道については、釋迦の教に従へば種族が絶滅するとし、神佛同一説の如きは甚だ不可であるとして、第三條、俗神道の惡しき所以は眞の神道は神國の神たる所以を知り、神の成し置き給へる事を習ひ、正しき人の道を行ふ事であるのに俗神道は國體の事など夢にも知らぬ、鈴振神道、乞食神道などは、天皇の御爲めに力を盡すにありとし、所謂三忠臣として東成・藤原・正成を挙げ、東成に關しては「源平盛衰記」を抄出してゐる。なほ終に修訂者好むが初稿者の讀むべき書目を書き添へてゐる。【批評】「古事大義」の要點を簡明に抄出したやうなもので、著者の古事精神の概要として見るべきものである。【西尾】

【發表】明治二十三年十月、「海外雜報」として「日本之文學」に掲載「刊行」同年六月第一號「萬葉集」に對照體と改題して收録。現代日本文學全集（中野實集）附録全集第一卷所載。【提要】明治二十二年四月の頃、主人公事件と名づけてゐるは、病を得て中禪寺の奥、白根嶽の下、湯の湖のほとりの客舎に静養した。病癒えて同じ道を通返すも厭はしく、宿の主



(舟橋内武)畫 繪 繪 對

かと疑つて見たが、それらしくもなく、女は若いに似て居りすましてゐる。一夜の泊りを許されて、夜一夜、女の音語りを聞く。彼女は東京のさる豪家に育つたが、早く父を失ひ、十八の歳には母も亡せた。まだ悲しみの失せぬ、彼女の上には縁談が降るやうにあつた。中にも、或る貴公子から深く思はれ、彼女も嫌ひではなかつたが、亡き母の遺言を守り、心を鬼にして結婚を拒んだ。彼女に倦れて病床に臥した貴公子を臨終の際に一目見てから、彼が戀しくなり、悲しみの餘り狂ひ出して、いつしかこの山中に迷ひ入り、或る高僧にめぐり遭つて悟りを開き、こゝに草庵を結んだといふのである。青貝指の黒塗の小箱に入つてゐたといふ亡き母の遺言の内容に就いては、女はただ笑つて答へない。たま／＼朝日紅々とさし登つて、家も人も雲霧と消え去つて、枯れ残つた去歲の堂海の中に我ただ一人、足下には一つの白い獨脚が轉つてゐた。村里へ下り、温泉宿の主にきけば、去年のこと、氣の狂つた獨脚を病む女を食ひ山に入つたまま、歸らないが、多分その女が山中で死んだのであらうと語つた。【解説】本書「血紅星」(別題)とは、抒情的散文詩とも言ふべきものであるが、併し本書はそれ自身、纏まつた一つの筋を持つてゐる。ただ作者の主題に、詩的表現を肉付けた條件初期の特性の最も顯著な作品なので、一概に現實性の稀薄、若しくはその假想と現實との間に横はる矛盾等を非難すべきではない。描寫の問題よりも、作者の思想が、この異常なと運命の悲愴を語ることに特殊な味ひがある。作者も言つてゐる如く、「血紅星」と共に、

支那の説話から暗示を得たものである。なほこの作は、「風流集」に次いで世評高く、石橋翠月の如きは、「評小説界」に題したる名什」と稱賞した。【千恵】
大貳三位 おんみつ 歌人(姓名)藤原賢子。最初越後の辨とも云ひ、後に正三位太宰大貳高階成章の室となり、大貳三位と稱す。【問解】父は藤原元孝、母は紫式部。後冷泉天皇の乳母となり、前原繁房と結婚等と親交があつた。「河海抄」序及び「狭衣下紐」に、「狭衣物語」の作者と云つてゐるが、この説は疑問である。【作品】家集を「大貳三位集」「藤三位集」として二本を傳へ、神宮文庫に一本を藏する。【動機】作者の別名によれば、後拾遺集に九首、金葉・詞花兩集に各一首、千載集に四首、新古今集に六首、新勅撰集に三首、續古今集に各一首、後拾遺集に一首、風流集に二首、新千載集、新拾遺集、新後拾遺集、新續古今集に各一首の歌を載せてゐる。【参考】紫式部と大貳三位石川貞吉(國語と國文學四四)○狭衣物語考(國語學雜誌一五)ノ一〇【田中】
大日本歌學史 おんうたがくし 和歌【著者】福井久藏(刊行)大正十五年、不二書房。【解説】巻頭に年表があり、著者の歌人歌學者の著作・年表等を記してゐる。第一「歌學の範圍と其の起源」より、第六十一「結論」に至る迄六十一章を設けて、明治四十年頃までの歌學の變遷を述べてゐる。佐佐木博士の「日本歌學史」と比較してみると、各々一長一短がある。この著者には別に「大日本歌學叢書」(別題)の著作があるためであらうが

佐佐木博士の歌學史に收録解説した歌書よりも數に於て多い。その代り、同博士の解説よりも、詳細な部分も亦少くない。而して第二章に「和歌式と漢詩の法格」と題し、或は第四章「歌合の判に見えたる歌學思想」と題し、佐佐木博士の叙述の足らぬ部分を補足した章もある。歌人・歌書等に對する傳記や、書誌的研究の相違もあつて、一致しない點のあるのは當然であり、又見方の相違も多少は認められる。それ等は容易にきめられない問題であるが、同博士が中世歌人・近世歌人と二大別して、江戸時代の歌人系統をも「中世歌學」の本章「國書門下及びその系統」に一括して主としてこれを論じ、「近世歌學」の部に於ては殆ど論じてゐないに反し、この書に於ては、長波・梨舟・春海を論じた次に、「徳川中期に於ける堂上派」の一章を設けて、主として論じてゐる如きも、強ひて中世・近世と分けるとした二國紀八冊を以てすべきであるといふ考に基くもので、注意すべきである。【田中】
大日本歌書總覽 おんうたのあらまじ 三冊【著者】福井久藏(刊行)上巻大正十五年八月、中巻昭和二年十月、下巻同三年八月、不二書房。【解説】著者が多年、公私の圖書研究、或は個人の書庫をさぐつて、研究した結果、明治初年に至るまでの約六千部、三萬巻の歌書の解題を施したものである。歌書の性質、種類によつた分類法をとり、各部門、各項目に互ひ、その首に總説をかき、その研究の沿革や書誌的大要をのべてゐるもの極めて有意義である。上巻・中巻を十二部門に分け、上巻は歌學・撰集の二門で、下巻は家集・定數歌集・歌合・歌合集・歌合集・奉納歌集・歌合史及撰集・歌集・撰集・撰集の十門に分つ

てゐる。歌學は總論的なものと特殊なものとの二目に分ち、總論に關するものは、歌道に關する記載に富む注意すべき隨筆を附録とし、特殊なものには、作歌・歌題・詞書・詞・名所・法式・附録・批評・附録・索引・句讀・韻・雜考の十門に分ちてゐる。家集の部門は、御集・竹園御集・一般家集の三目に分ち、定數歌集は、百首類・千首類・五十首類・十六歌仙類の四目に分ち、百首類は更に細かく分類解説してゐる。歌合は普通の歌合及自歌合・職人合・物合・詩歌合の四目とし、歌合集は、宮中御會類・看判・行幸御幸・御家集・諸會・會堂の四目に分ち、觀心集は撰集・追憶道・遺集の二つとしてゐる。歌集は撰集・御集・風俗・朗詠・童謡の三目を收め、撰集は長歌・今様・旋頭歌・回文・落首・片歌の六目に分ち、撰集は以上の部門に渡れたものを收め、歌道に關するもの、物名・歌物に關するもの、名歌・官職・儀式・武藝・卜算等の十六の目に分ちてゐる。下巻は五十首類の索引及び補遺として上中の巻に渡れた歌書の解題をしてゐる。本書は歌書全般の解題としては、渡れた歌書も多少の誤りもあり、且つ解説も餘り簡略に過ぎる感があるが、併し獨力でこれだけの編者なしたことは尊敬に値する。圖書解題の如きも歌に關するものは、この何分の一にもあたらぬ。將來補正せらるべき點はあるが、和歌の研究に當つては必ず参考すべき資料である。【田中】

大日本國語辭典 おんやまとこたごひ 五冊【著者】上田萬年・松井清治(刊行)本文(西巻)は大正四年十月、同八年十二月、昭和三年十月、同四年四月に修正版刊行。索引(一巻)昭和三年十月刊行。「内容」假名引の國語辭典で、上田松井兩氏の十五年に亘る努力の結果で成る。所收の語彙は、上古から現代に至る一般日本語並びに普通の學術語、國語化した外来語(漢語)和語、梵語、英語、獨逸語、佛蘭西語等)及び現在東京附近に行はれる方言(他國語等)をも收めて、その語彙二十餘萬に及んでゐる(但し、地名人名・書名等固有名稱を除いてゐる)。これ等の語を、すべて歴史的假名遣に從つて平假名で標出し、振假名で發音を示し、これに宛つべき漢字或は西洋語を挙げ、品詞別を示し、語彙を説き、用例及び出典を示し、或は國解を加へてゐる。なほ語彙は確實で、且つ語釋に必要なものだけを挙げた。【價値】本書は、現在に於ては一般的國語辭書として最も進歩したものである。殊に語彙の豊富なことと一々血縁を挙げたこととは、従前の如何なる書よりも勝れてゐる。併し語彙に於ては、奈良朝平安朝頃の語は、よく收録されてゐるが、鎌倉以後になると、脱漏も少くなく、釋義の妥當でないものも時にあるやうである。かやうなもの補正は、この書で原則として缺いた語彙の研究と共に、將來の辭典編纂者に遺された事業である。【田中】
大日本國法體記 おんやまとこたごひ 三冊【著者】徳川光圀(成立)光圀は、正保二年

【十八卷】「史記」の始皇傳を讀み、感ずる所あつて「史記」の志を立て、明解三年春、史局を江戸駒込の下屋敷に設け、二月二十七日初めて府僚の文事に長ずる者をして編纂に従事せしめた。寛文十二年には、史局を小石川の邸に移し、彰考館と名づけ、御天下の碩學を招き、遺書を各地から捜索せしめて、益々その事業を擴大し、元禄十一年西山隱栖は、史館を水戸に移し、爾來子孫承承、十二代二百五十年を経て明治三十九年に至つて完成し、同年十二月、候爵徳川閑院が朝廷に獻して乙夜の覽に供した。彰考館總裁として修史の業を督した者は、人見傳兵衛、十住大祐、佐宗淳(十住)中村蘭言、鶴岡寛吉、安積實朝、大串元善、東山昭、酒井忠、神代兼綱、小宅友賢、中島爲貞、打越直正(兼)、依田藤安、増子淑時、河合正修、徳田庸名、徳島敏、鈴木重輔(白鳥)、富田敏貞(長)、野口祐、大塚啓明、立花亮、豊田亮、文、栗田寛、等である。【諸本】享保五年十月二十九日、本紀七十三巻、列傳百七十巻、並に序目修史例、引用書目、すべて二百五十巻、精寫功竣し、幕府に獻納した。これを享保本といふ。ついで紀傳檢閲の議起り、再訂に従事し、文化七年、紀傳を淨寫して朝廷に獻じ、嘉永年間これを刊行した。すべて百冊、嘉永本といふ。その後、明治十四年、吉川弘文館から木版本二百二十六年記念として大日本雄辯會から活字本十七冊として刊行した。なほ外に、山路愛山の「譯文大日本史」(明治四十五年刊、雄辯會)がある。

ラレ是ハ共ニ源氏重代ノ重寶ニテ義貞ノ方ニ傳ケリト聞ユレハ末ノ一族共ノ藩ヲヘキ太刀ニハ非ラズニ...

本字清長慶



録目版丹支利吉

ヤ何ク古ノ諸國ヲ入道相國賞セシニ向セン哉ト被申レ...

本字活和元

参考太平記巻第一 常陽水戸府 後醍醐天皇御治世...

記平太考参

で、但し七は他と他の異稱の本巻三十一、四十一と、但し巻三十二、三十三、三十五は開と...

に右京本(音釋紀)・西院本(御覽私要抄)などがある。【後醍醐天皇の御宇に當つて、鎌倉幕府の執權北條時高は、政道を顧みず、專横を擅にしたので、天下の人心が次第に離れて、天皇は、王權を回復して天下を安んずるべく、御心掛けになり、ひそかに北條氏討伐の謀をめぐらされた。然るに、その事が露見して、計謀に關與した武將の土族類貴、多治見國長は親文親、忠國等は捕はれて關東へ送られた。天皇は關東へ御書文を賜はつて辨明をなされた。その後、信連は流され、香朝も佐渡に流されて斬られ、俊基は一旦赦されたが、再び捕へられて斬られた。次いで、東使が上洛して主上を遠國に遷し參らせんとするといふ風聞があつたので、主上は笠置へ臨幸なされ、大納言藤原實朝が主上に代つて山門に赴いたが、これもやがて笠置へ參集した。よつて六波羅から大軍を差向けて攻めたので、笠置の城が陥り、主上は捕はれて六波羅へ遷され給ひ、中務親王(尊徳法親王)をはじめ、月御堂客たちも概ね捕へられて流刑に處せられた。これより先、捕王正成は勅命を受け、赤坂城を築いて勤王の兵を擧げ、敵の大軍を備ました。が、後、計を案じ、城を焼いて落ちた。元弘二年三月、主上が隱岐國へ遷され給ふや、兒島高徳は勤王の志を寄せ、途中主上を奪ひ奉らうと企てたが果さなかつた。大塔宮は南都から吉野の城へ赴き、ひそかに賊討滅の計をめぐらされた。正成はその後、千代破に城を築き、赤坂城を回復し、天王寺邊へ出沒して、屢々敵を備ました。赤松圓心も播磨に義兵を擧げた。よつて關東から再び大軍を差向けて、吉野を圍、千代破の三城を攻めさせた。赤坂では平野將監の失策で城が落ち、吉野では防戦に力が盡きて、大塔宮は落ち給ひ、村上義光が御身代りとして自害した。千代破城では、正成が姉崎義直を以て百萬の大敵を散々になやました。新田義貞は輪旨を受けて上野に義を唱へ、近國を從へて勢が盛んであり、筑紫でも菊池武時が勤王の義を唱へて、關東の節をつくし、四國でも土居二郎得能三郎が宮方になつて旗を擧げた。主上は隱岐から伯耆へ遷幸なされ、名和長年がこれを奉じて船上山に據り、追手を討ち退けたので、諸方の豪族が風を望んで參集した。また藤原酒部、瀬河山崎、京都なども屢々合戦があつて、宮方の勢が盛んになるので、關東から更に大軍を差向けた。この時、足利尊氏も西上したが、ひそかに宮方に心を寄せ、官軍と共ニ六波羅を攻め落し、北條仲時以下を滅したので、地方における北條氏の餘黨も、次いで平いでしまつた。こゝに於て、主上は都に還幸なされ、王政復古の大業が遂げられ、政令が朝廷から發せらるゝことになり、功勞者にはそのん、恩賞の沙汰があつたが、藤原藤房は、熊島進奏のことにつき意見を述べ、藤原藤房に大塔宮を執し奉つて逃れ、事變を都に知らせた。それで尊氏は討手として東下し、時行を滅したが、そのまゝ關東に留まつて東八ヶ國を管領し、新田氏の所領を沒收したので、義貞も尊氏の所領を沒收し、互に確執を生じた。

た。義貞は尊氏討伐のため東下し、播磨で直義を破つたが、竹下で尊氏に破られて都に引退したので、主上は山門へ遷幸なされ、尊氏は大軍を差向けて都に入つた。既に北條國家が奥州勢を率ひて西上したので、それに力を得、官軍は足利勢を攻撃した。尊氏は力戦したが、遂に敗れて都を落ち、船に乗つて九州へ走つた。よつて、主上は山門から都へ還幸なされた。尊氏・直義は、九州の豪族を誦らひ、延元元年五月、數十萬の大軍を率ひ、海陸並び進んで東上したので、義貞・正成等はこれを兵隊に防いだ。破れて正成兄弟は戦死し、義貞は都に退いた。主上はまた山門に臨幸なされ、尊氏は都に入つたので、山門や京都で屢々戦があり、名和長年が戦死した。然るに尊氏は、ひそかに使を山門へ遣し、京都に還幸あらんことを請うたので、主上は思召を附いてその請を許された。義貞はこの由を聞いて大に驚き、苦衷を訴へたので、主上は義貞に奉宮を託して慰撫せられ、京都に還幸なされたが、忽ち花山院へ押籠められ給ひ、主上はひそかに花山院を脱出して吉野へ遷幸なされたので、大衆を初め近國の官軍が行在所に歸せ参じた。義貞は奉宮恒長親王を奉じて北國へ赴き、孤忠を抽んでた。然るに、足利勢が大舉して來攻するに會ひ、金崎城は攻め落されて、恒長親王は捕へられ給ひ、又尊良親王は自盡し給ひ、新田義國以下悉くこれに殉じた。次いで義貞も亦、足利高經と藤島に戦ひ、燈明寺で戦死した。顯家は奥州勢を以て南都を陥れ、京洛を脅したが、安部野で討死した。延元四年八月、主上は吉野の行宮で崩御なされたので、後村上天皇がその後を

承けて御位なされた。島屋義助は諸方に戦ひついで吉野から伊豫に赴いたが、病にかゝつて歿した。楠木正行は父の遺志をついで王事に勤め、歴々敵を破つたが、高師直と四條頼時とに戦つて討死した。師直等は勢に乗じて吉野行在を犯したので、主上は實名生に遷幸なされた。直義は南方に歸順し、桃井直常またこれに従ひ、北方と戦つたが、後、登氏と和し、師直兄弟を殺した。その後、直義は登氏と不和になつて戦つたが、やがて病歿した。新田義興、義宗等は、東國に兵を擧げ、歴々戦つて威勢が盛んであつたが、敵の計に陥つて滅びた。正平十三年(文永三年)四月、登氏は越前守に就いて王事に勤め、少貳頼朝と筑後川に戦つて破り、次いで少貳大支勢を飯守山、香椎に破つた。仁木義長、山名時氏等は、一時南方へ歸つてゐた。後、また北方に歸り、細川清氏も南方に歸順し、四國を平定したが、細川頼之に攻められて討死した。正平二十二年十二月、將軍義隆は病にかゝつて歿し、細川頼之は幼將軍義満を輔けて執事職となつた。

【解説】本書は、吉野時代の争亂を叙したものであるが、この争亂は事件が複雑な上に、局面が擴大して戦間も頻繁激烈であり、記事も五十餘年の長きにわたつてゐるので、記事も頗る紛糾複雑して散漫となり、叙事の中心も屢々動揺してゐる。本書の結構は、大體、三部に分れてゐる。前部は後醍醐天皇の關東御征伐に端を発し、北條氏が滅び、建武中興が成立するのを以て一時期を劃するものゝ一である。中部は足利尊氏が謀叛して王政復古の大事業を遂げ、得明院を擁立して、太古の

聖統に對抗せしめ、天下を南北兩朝の御爭ひのやうに仕向けて、巧みに人心を收攬し、楠木正成、新田義興以下吉野方の諸將を滅して、兵馬の實權をその手に收め、足利尊府の基礎を確立するに至つた過程の描寫(卷十三乃至卷十九)。後部は吉野方の勢威が振はず、足利尊府の權勢が擴大するにつれて、足利氏骨内の間又は諸將士の間内江糾纏が甚だしくなり、それにつけて、吉野方がまた勢力をもりかへし、南北上下相もつれて、紛争騒亂が絶間ない内に、いつしかそれもだれて下火に向ひ、時機は次第に推移して天下は備前歸して行き、義隆將軍の逝去によつて、足利氏創業時代の幕が閉ぢられ、幼將軍義満の輔佐役たる細川頼之の執事職就任を以て、守成時代の幕が開かれんとする意をほのめかけて筆を擱いてゐる。この結構は、大體に於て前部が最も整備して筋道が立つて居り、中部から後部に至るに於て、事件が次第に複雑紛糾して統一の美を失つてゐる餘ひがある。又叙寫が合戦に傾き過ぎて、優美なる風流源や可憐なる戀物語などを却却してゐるので、記事は概して殺伐陰鬱な傾向を帯びてゐる。又記事は大體、戰勝者の側よりも、敗者の方の行動を寫してゐるものが多く、人物によつて多動を寫してゐる事情はあるけれども、作者の同情は武家方よりも宮方に多く傾かされてゐる。併し、宮方に對しても徒に愚痴の筆を弄するやうなことはなく、公明な見解や正大な論議を試みてゐる。そして紛争騒亂した世相の顯現を功利的、末法的な時勢と、純然たる人慾の發露と、惡徳の跋扈とに歸し、悲愴なる運命の致すところとを顯し、人の運命も神佛の冥徳に委ねてゐる傾向が著しい。そして時代思潮の反映するところ、個人意識が次第に消滅して、集團意識が發動し、勇武・強剛・壯烈・果敢なる形相氣魄が漲つて、男性的の特色が最もよくあらはれ、自然や人生に對する觀照態度も概して客觀的であり、美よりも善と善とを理想として、破邪顯正を標榜し、敬神崇佛の思想を強調し、精神發達の過程も理智的、思案的、意志的、信仰的になつてゐるので、道徳的、教訓的、宗教的の傾向が著しくあらはれ、信念や道義の鼓吹に類する力が漲がれてゐる。それで、皇宗尊徳の思想は全篇を一貫し、勤王の大義を奨め、幾多の忠臣義士の忠烈なる行動を讚賞し、治世の大道、人倫の本義を勸説し、戀愛のやうな情緒は寧ろ厭惡して道念を以てこれを律し、愛に溺るゝ女性を卑しんで節操ある義烈の婦人を賞揚してゐる。かくて、その指導原理となつてゐるのは、倫理的の道念であるが、これは儒教と神宗と武士道の思想が、三位一體となつて始終働いてゐる。また本書の創作態度が、集團と客觀と普遍とに重心をおく結果、人物の性格描寫の如きも、個性の活躍は乏しく、寧ろ概念的に描かれてゐることが多い。なほ、尙古的、尙外的、尙形的の風尚も著しくあらはれて、故事先例を尙び、引用・對照・誇張・比喩などによつて、行文を修飾し、形象を盛へることに苦心してゐる傾向も著しい。要するに、本書は、「平家物語」(別項)に見るやうな統一派成の妙味や優美流麗の味は乏しいけれども、時代的の生彩が溢はつて、深刻な人生の相を現はし、剛壯堅實なる國民的情を發揮して、飽くまで漢文美学的・意志的の傾向を帯び、文章は著しく漢文美味を加へて、或は豪宕に、或は詞麗に、和漢混

大新田義貞乃多居その他、青木大中原、種、太平記忠臣講義、秀徳傳記その他、義長、義興、合巻(鳴呼忠臣傳)の由来、小夜衣、初時雨矢口抄その他)など何れの場合も、太平記が嚮導して、なほ、讀本(楠公記)補正行戰功圖、南朝(太平記その他)に於ては、取材や行文の上における「太平記」の影響が一層著しくなつてゐる。次に、後代文學に材料として採られてゐる「太平記」の記載事項についていへば、「源治御有過死の事」の影響が著しいといへば、源治御有過死の事、この事件を材料として、赤穂義士のこと(附會して作り出した假名手本忠臣蔵(別項)が非常にもはやされたので、同様の作品が多く世に出た爲めである。「北野通夜物語」の影射の著しいのは、この節中に見え、北條時頼の死の事、義隆「鉢木」の材料として採られ、江戸時代の戯曲小説等に、この傾向を眞似た作品が流行した結果と思はれる。「正成兵衛(下向の事)」正成兄弟討死の事は、由緒の確化として、國民的信仰の焦點となつた正成の事蹟中、最も感動の深い「櫻井陣の教訓」や「滝川頼朝」を含んでゐるので、後代文學に感入されてゐる。その他、「赤坂城軍の事」「千鶴軍の事」「新田義興自害の事」「大塔宮野落の事」「正成天王寺未來記後見の事」鎌倉合戦の事などの影響も特に目立つてゐる。また後代文學には、「源平太平記」「御佛太平記」「化物太平記」「東國太平記」といふ風に、「太平記」といふ名稱を襲つてゐるものが非常に多く、殆ど百種以上にも及んでゐる。

【註釋】(参考)太平記四十一卷(中)内藤貞綱○太平記(源平)四十一卷(中)内藤貞綱

清文の妙趣をあらはしてゐる。かうして、本書は、文學として特殊な地位と價值とを有してゐる上に、史書としても相當なる價值とを有し、吉野時代の史的檢討には見逃すべからざる資料となつてゐる。又本書は、楠公の神謀奇策をはじめ、合戦の計謀や經過を叙してゐることが多いので、兵書としての面影を留し、武人の間に大に愛重せられた。その他、本書は、漢語的の性質を具へ、國民の間に廣くもてはやされてゐる。神田本に「三重」「三重」「四重」などの符號を附してゐるのは、本書が曲節を以て編纂せられたことを示してゐる明徴であるが、なほ本書は物語性によつて、中世の頃既に講讀せられて居り、近世に及んで、所謂太平記讀(別項)として民衆の間に講讀せられ、今日の講讀(別項)の源をなした、この方面に於ても、大に國民文學的特色を發揮してゐる。

【影響】「太平記」は、廣く國民の間に愛讀せられたものだけに、これが後代文學に及ぼした影響は可なり著しい。先づ戯曲の方面について見るに、諸曲の「白龍」「鉢木」「武文」「義興」「大塔宮」「大森彦七」「關原補」「櫻井外」二十餘齣、舞の本の「新曲」「源平の相模入道」「大塔宮」「源平の相模入道」「源平の相模入道」「源平の相模入道」新田系圖「神矢矢口抄」「大塔宮野落」「太平記」から材料を採つたものであるが、中には文章までもそのまゝ引用してゐるものもある。小説の方面に於ては、御佛童子(源平物語)、中書王物語など、源平世系、味に八文字(源平直義軍記)、楠公記、風流源水巻その他)などにも、「太平記」に基づいた作品は少なくなく、草雙紙類では、原本(義興)矢口抄、楠木太平記、川を消滅する氏滿の下(原本)が、同様に扮して来る。葉末(源平)に傳書を贈つた節が来て苦しいが、細川頼之に感入される。「二段」氏滿の執權石堂の妹子東は言ひかはした(源平)平(源平)と共に落ちる。宇治に住む夢野の在兵衛の許へ、正行は妻秋夜と共に来て、この家の御助が在兵衛の實子なる自分と取替子で眞の正成の風を知る、敵軍を放たために自害する。勇助實は正行は宇治常侍と名乗り、菊水を救ふと定める。「三段」石堂御助は放野の主人氏滿を追拂ひ、己が侍花石をその後嗣として守り立ててゐるが、氏滿が歸郷を遂げた科で、花石に切腹を命ぜられるや、氏滿を助けんためであつた本心を明かして花石を殺す。宇治常侍は石堂を墓下に加へんとて来たが、その忠誠に感して思ひ止まり、劍川主膳と假稱する鞠ヶ淵夜直は新田義興と逢つて、南朝のための軍兵を約す。「四段」草津に住む秋夜は借金に窮して刀を賣るが、母は宇治の一味と知り、縁談の親交を調へ(與へる)。常侍は鳥原に遊ぶ。對面作次となつてゐる金井助兵衛は、常侍を父の仇と狙ふ(傾城玉川)兄と偽り、一命を捨てて毒藥の秘方を常侍に傳へる。具足屋藤兵衛の許へ、によつて秋夜は討手に圍まれたが、細川頼之の情に感して縛に就く。常侍も石堂から南北朝和睦の志を聞いて切腹する。「五段」氏滿は世に出て、常侍は謀叛が發覺して殺される。

【構想】もとより他時代に假託すべき江戸時代の事件であるから「尼御堂由井出」等ではこれを鎌倉時代としてゐるが、本作で南北朝時代(所謂「太平記の世界」)を用ひたのは、正行が楠正成を崇拜し、その流の軍法を用ひたといふ説を活かさんがためであらう。二段目

